

旧韓末における羅喆の訪日活動

—朝鮮開化派亡命政客および玄洋社系人士との交流を中心に—

佐々 充 昭

〈目次〉

はじめに

- 一、金允植と羅喆の師弟関係
- 二、金玉均の日本亡命と大陸浪人たちとの交流
- 三、閔妃暗殺事件における岡本柳之助の行動
- 四、開化派官僚の日本亡命と日本での亡命者帰国運動
- 五、日本亡命時における孫秉熙の政治活動
- 六、孫秉熙と開化派亡命政客たちとの交流
- 七、羅喆の第一次訪日と民間外交
- 八、羅喆の第三次訪日と大陸浪人たちとの交流
- 九、羅喆による乙巳五賊暗殺未遂事件
- 一〇、乙巳保護条約締結以降における愛国啓蒙運動の展開
- 一一、第四次訪日における羅喆一行の活動
- 一二、日本における羅喆の病氣治療
おわりに

はじめに

韓国併合が行われる直前の一九〇九年二月五日（陰暦一月一五日）に檀君教（翌年に大倮教と改称）という宗教教団が創設された^①。この教団は、古

朝鮮の建国神話の中に出てくる檀君を精神的求心点として、朝鮮の国権回復と民族独立を達成しようとするものであった。この教団を創設したのは、旧韓末期に民間の憂国志士として政治活動に奔走した羅喆（一八六三～一九一六）という人物である。羅喆は檀君教（大倮教）を創設して民族独立運動を展開した後、朝鮮総督府の教団弾圧に抗議するため、一九一六年民間檀君信仰の拠点であった黄海道九月山の三聖祠で自決した^②。羅喆は檀君教（大倮教）の活動を通じて、日本帝国主義に対抗するための精神的な支柱を提供し、植民地期朝鮮の民族独立運動家たちに多大な影響を与えた。

解放後の韓国では、羅喆を「抗日民族独立運動の先覚者」と位置付け、彼の行った民族独立運動の事蹟を高く評価している^③。特に羅喆が生まれた全羅南道宝城郡では、郷土を代表する民族独立運動家として、羅喆に対する記念事業に積極的に取り組んでいる^④。また、二〇〇四年には民間団体として弘巖羅喆先生宣揚事業会が結成され、羅喆を「民族の先覚者、独立運動の父、国学の先覚者」と評価しながら様々な顕彰活動を展開している^⑤。特に二〇一六年は、羅喆が九月山三聖祠で自決してからちょうど百周年目にあたることから、これらの団体を中心に様々なイベントが繰り広げられた。例えば、大倮教系の研究機関である社団法人国学研究所は「羅喆の殉教で独立運動が燎原の火の如く広がる」というテーマで、二〇一六年五月にソウルで学術会議を開催した^⑥。また宝城郡でも、弘巖

先生宣揚事業会を中心に様々な記念事業が繰り広げられた。復元した生家跡地に総事業費七六億ウォンをかけて羅喆記念展示館が新たに建設され、二〇一六年十一月の追慕祭に合わせて開館された。また、宝城郡庁のホームページには、羅喆の一代記を扱った「檀君の息子」という歴史小説が二〇一六年一月五日から八月末まで三五週にわたって連載され、同年に単行本として出版された。

このような関心の高さからも分かるように、今まで羅喆に関する膨大な数の研究論著が発表されてきた。それらの研究は主に、羅喆が行った民族独立運動に関するものと、彼の宗教活動に焦点を当てたものの二つに大別することができる。これらの研究はいずれも、羅喆を抗日民族主義者と位置づけながら、彼が日本の帝国主義侵略に対していかに頑強に抵抗したかという観点から論じたものである。

これに対して、本稿では、檀君教（大倮教）を創設する以前に行われた羅喆の政治活動に焦点を当て、それが単なる抗日独立運動として行われたものではなかった事実を明らかにする。檀君教（大倮教）創設以前の羅喆は、旧韓末期の複雑な政治情勢の中にあつて日本側勢力との妥協や協調を模索しており、この時期に羅喆が行った政治活動も日本の帝国主義支配に真つ向から対抗するようなものではなかった。この問題に関して、本稿では特に、羅喆が一九〇五年七月から一九〇九年一月まで全四回にわたって日本を訪問し、日本政界の著名人たちと接触した事実に着目する。この羅喆の訪日活動に関して、従来の先行研究では、日本政界の要人たちに朝鮮の独立と国権回復を訴えるための民間外交として行われたものであり、それは日本帝国主義に対抗するための民族独立運動の一環であったというのが通説となっている。これに関して、羅喆は日本を訪問した際に、乙巳保護条約（第二次日韓協約）の締結に反対する運動を展開し、その後、乙巳保護条約に賛成した売国五大臣（乙巳五賊）の暗殺

を試みて未遂に終わる事件を起こしている。しかし、羅喆が日本で行った活動について詳細に調べてみると、それらの運動を行っている傍らで、閔妃暗殺事件に関与して日本へ亡命していた親日開化派官僚たちと交流していたことがわかる。また、羅喆が日本で会った人物たちはすべて、頭山満を中心とする玄洋社系の大陸浪人たちであった。その他にも、羅喆は日本において実に不可解な行動をとっている。従来の研究では、羅喆と言えば抗日独立運動家というイメージが持たれていたために、このような親日的とも言えるような行動に関しては一切看過されてきた。これに対して、本稿では、羅喆が檀君教（大倮教）を創設する以前に日本で行った政治活動に焦点を当て、彼が日本を訪れた理由やその政治的背景について明らかにする。

羅喆の訪日活動に関する資料としては、大倮教教団が記録・編集した文書や、大韓帝国政府や韓国統監府が記録した文書類の他、羅喆の周辺にいた知人たちが書き残した日記類などがある。羅喆の訪日活動に関する研究は、主にこれらの資料をもとに行われてきた。しかし、近年、これらの資料の他に、新たな記録文書が発見されている。旧韓末当時の羅喆は日本側当局から「要視察韓人」に指定され、常に密偵の監視を受けていた。その報告文書が発見されたのである。この資料は、従来の羅喆研究においてほとんど言及がなされてこなかった。^⑪しかし、韓国の一部の研究者は、この記録文書に着目して、従来の研究に問題提起を投げかける研究を行っている。例えば、趙竣熙は、この記録文書を手がかりとして日本での現地調査を行い、羅喆の訪日活動の足跡について明らかにしている。^⑫また呉瑛燮も、この記録文書をもとに、旧韓末期に展開された羅喆の政治活動に関する論文を発表している。その論文の中で、彼は「まずしい民間の儒林にすぎなかった羅喆の渡日は、単純にごく少数の憂国志士による民間次元の外交独立運動にとどまるのではなく、中央政界

の高宗側近ないしは日本亡命客と緊密な連携のもとに展開された中央的・集団的な次元の政治的救国運動の性格を持っていた¹³⁾と述べている。しかし、趙堧熙の研究は、日本の政治家との面談内容や羅喆が訪れた場所に関する単純な言及にとどまったものとなっている。また、呉瑛燮の研究も、旧韓末期における朝鮮政界の動向と関連づけながら羅喆の訪日活動を跡付けているものの、羅喆が日本で接触した玄洋社系の大陸浪人や親日開化派官僚との関係に関する分析が不足しており、羅喆の訪日活動の政治的背景を完全には明らかにできていない。本稿では、これらの先行研究の問題点を踏まえながら、日本側当局が調査した記録文書を主な資料として、羅喆が四回にわたって行った訪日活動の実態について明らかにしてみる。

一・金允植と羅喆の師弟関係

羅喆の訪日活動について論じる前に、羅喆がどのような経緯で政治の世界に投身するようになったのか、彼の経歴を辿りながら考察しておきたい。羅喆は、一八六三年陰暦二月二日に全羅南道樂安郡南山面錦谷里（現在の全羅南道宝城郡筏橋邑七洞里錦谷）で、羅龍集の子（三男中の次男）として生まれた。本名は斗永であったが、後に寅永と改名した。字は文卿、号は耕田・経田・弘巖、堂号は一之堂を使用した¹⁴⁾。彼の本貫は羅州羅氏であり、朝鮮時代に刑曹正郎・司饗院注書などをつとめた湖堂羅昶（一四七七～一五二四）の後孫として名声の高い家門であった¹⁵⁾。しかし、羅喆が誕生した頃にはすでに没落し、父の羅龍集も官職についておらず、小規模の自作農を行う経済的に貧しい家柄だった。羅喆は幼少時から漢字を学び始め、湖南地方で碩学として知られた王錫輔の門下で修学した。向学心に燃えた羅喆は、その後ソウルに上京した。ソウルに特

別な人脈があったわけではなかったが、南山で行われた大臣たちの花見を兼ねた詩会で自作の即興詩が認められ、二二才（一八八三年）の時に金允植の門人となった。これにより、田舎の残班儒生にすぎなかった羅喆に出世の道が開かれた。金允植（一八三五～一九二二）は当時一二を争うほど高名な儒学者であり、朝鮮末期の中央政界において政府の高官として活躍した人物である¹⁶⁾。以下ではまず、羅喆が師事した頃の金允植の活動について述べておきたい。

周知の通り、一八六三年に哲宗が嗣子なくして死去すると、興宣君李昰応の第二子高宗が王として迎えられた。高宗が若年であったために、王の生父である興宣君が大院君として実権を握ったが、一八七三年の崔益鉉の上疏を契機とする王妃閔氏一派の策動によつて退陣に追い込まれた。この政変により、閔氏一派による勢道政治が始まった。これ以降、大院君と閔妃一派は、諸外国からの圧迫という国際情勢のもと、守旧派と開化派が勢力争いを展開する複雑な政治状況の中で激烈な対立を繰り返していった。その中で、穩健開化派路線をとった金允植は、当初、清側の勢力に連なっていた。一八八一年に朝鮮政府は清国の文物制度を見聞させるために領選使を派遣した。その際、金允植は領選使団長として中国天津の機器局に派遣され、新式兵器の製造技術などを見聞・習得した。そしてちょうどこの頃、一八八二年六月に旧式軍隊兵士たちの暴動である壬午軍乱が朝鮮で起こった。この事態に直面して閔氏政権は倒れ、高宗は責任をとつて大院君に政権を委ねた。大院君の登場によつて軍乱はいったん收拾されたものの、この混乱の間隙を突いて、日本側は軍隊を派遣して朝鮮における勢力を拡大しようとした。一方、この事態を憂慮した清側は、ちょうどこの時、天津に滞在していた金允植の出兵要請を受けて、三千名ほどの軍隊を朝鮮に派遣して日本軍を牽制し、大院君を捕らえて天津に連行していった。こうして大院君政権は崩壊し、閔氏

政権が復活した。壬午軍乱を鎮圧した清は、李鴻章の信任の厚かった袁世凱を指令官として清国軍隊をソウルに常駐させ、朝鮮の内政と外交に干渉をしてきた。

その後、一八八四年一〇月に急進開化派による甲申政変が起こったが、清国軍隊が昌徳宮を占拠していた日本軍を攻撃して政変は終結した。金允植は、開化思想家である朴珪寿の門下で学んだが、金玉均も同じ門下生であったことから、もともと両者は親しい間柄であった。そのこともあってか、甲申政変時に発表された新政権内において、金允植は礼曹判書に任命されている。しかし金允植はこれに応じず、逆に袁世凱に出兵を要請した。そして甲申政変の後、督辦交渉通商事務となつて政府の外交関係を担当した。一方、清側の勢力強化に危機感を抱いた高宗と閔妃は、清側を牽制するためにロシアに接近する動きを見せた。この動きを察知した清側は、一八八五年八月に天津に幽閉中であった大院君を朝鮮に帰国させ、十月には袁世凱を駐劄朝鮮総理事交渉通商事宜に任命して、国王の高宗を凌ぐほどの強い権限を与えた。この時、金允植は大院君を朝鮮に帰国させる上で主導的な役割を果たした点が注目される。実際、これ以降、金允植は朝鮮国内で大院君に連なる動きを見せた。このように金允植は、壬午軍乱と甲申政変という激動の時期を、対清協調路線をとることによって政府の重職を担っていた。

しかし、そんな彼も困難にぶち当たった。釜山前僉使の金完洙が統理交渉通商事務衙門の約定書を作成して、日本の商人から銀五千元を借用した後、年限を過ぎても返済をせずに数次にわたつて督促を受けるという事件が発生した。これに対して、督辦交渉通商事務であった金允植は、各国との交際において細心の注意を払わなくてはならない重要な職責にあるにもかかわらず、私債文字に押印をして契約を成立させ、他国の笑いのものとなり朝廷を辱めたという罪で、一八八七年五月に忠清南道の沔

川郡へ流配されてしまった^⑨。その後、金允植は五年六ヶ月間にわたり流配生活を続け、一八九四年に釈放された。

一方、羅喆の方はどうなったかと言うと、この間に彼は金允植の門弟として学問の研鑽に励み、一八九一年(二九才)に科擧の文科に及第し、同年一二月に承政院仮注書という役職(王の傍らに侍りながら起居動靜を記録する史官)に任命された。その後、一八九三年(三一才)に軍職である兵曹司正に任命され、同年一〇月に承文院の権知副正字に任じられた。しかし、これに仕官せず、故郷に戻った。一八九五年(三三才)にも徴税署長に任命されたが、これにも応ぜず免職願いを出した。その理由は、自分の志とは異なる末端の役職(九品)であったからであったとされている^⑩。その後、羅喆は一八九五年に再び上京し、金允植の家に同居しながら子弟関係を深めていった。金允植の日記によると、羅喆は「私の孤独な寂しさを思つて同居しようと考えた」と記されている^⑪。二〇才そこらの田舎儒生を門人として受け入れ、科擧に合格するほどにまで育ててくれた師の恩に報いるべく羅喆は金允植に仕え、一方、金允植の方も弟子のそのような一途さに対して愛情を感じていたことが窺える。

羅喆と金允植との師弟愛の深さは、その後金允植の身に起こった重大事件の際に羅喆がとった行動からも確認できる。金允植は、一八九五年の閔妃暗殺事件に関係した罪を問われ、一八九七年一二月に済州島へ終身流配されることになった^⑫。その際、金允植門下の弟子たちの数名が金允植について行くことになった。羅喆も終身流配刑となった金允植に同行して済州島に行くことにした。弟子たちが旅立つ際には、いつ生還できるかも分からず、家族兄弟たちが互いに涙を流しながら決別し、その情景は見るに忍び難いものであったと、金允植自身日記の中で記している^⑬。済州島に到着した後、羅喆はわざわざ金允植の家のすぐ近くの家に宿を定め、囚われの身となった金允植に寄り添うように生活した。一日

中金允植と囲碁を打って過ごしたり、夏には弟子たちと一緒に海水浴をしたりして、まったく無為ともいえるような生活を金允植に仕えるためだけに過ごした。そんな中で、一八九九年一月の羅喆の誕生日には、同じく済州島に流配された謫客たちが酒肴や餅麵を持ち寄って集まり、羅喆を慰労し、囲炉裏を囲んだ飲食会をしたりしている。金允植に同行した弟子たちは十一名ほどであったが、羅喆もその中の一人として、家事を打ち捨てて、五年間の長きにわたって師である金允植と艱難を共にした。特に一九〇〇年の一二月には、羅喆の妻が亡くなっている。その際、あいにく天候が悪く済州島にやって来る船便が無く、羅喆は四ヶ月以上も船を待ち続け、その間家に帰ることができなかった。その時の様子について、金允植は日記の中で次のように記している。

文卿（羅寅永、文卿は羅喆の字・引用者）は昨年の一二月一日に、夫人が亡くなったことを、ソウルから転送されて来た手紙によって知った。もともと文卿の妻は賢く、その内助の功は桓孟の徳（鮑宣の妻桓少君と梁鴻の妻孟光を併称したもの。良妻の譬え・引用者）のようであった。家は極貧で、子女は皆年をとって未だに結婚できないでいる。しかし、家がいくら貧しくても、くよくよした様子を少しも見せなかった。文卿は私に随って五・六年の間、家事をうち棄てているが、賢い妻の内助を頼みとして、家の事をまったく気にかけて来なかった。いま妻の訃報に接して、その無念な思いと悲しさはいかばかりであろうか。家の将来は暗くて何も定まっておらず、残された者を悲惨にさせる。すぐにでも家に飛んで帰りたいほどであるが、その孤独をただ慰めることしかできない。大洋で隔絶された場所であり、船便を得ることが難しく、ただ悶々とするばかりである。

このような記事から、金允植が、流配地に同行した羅喆およびその家族の苦しみに対して、深い同情の念を抱いていたことがわかる。

その後、済州島で民党と天主教人の対立による大規模な民乱が起り、済州島に流配された罪人を他道に移す命令が一九〇一年六月に下された。これにより、金允植は全羅道の智島に移配されることになった。済州島を発った金允植は一九〇一年七月に智島に到着した。一方、羅喆はちょうどその頃、故郷に戻っていたが、実家が無事であることを確認した後、息子の結婚式をあげて、一九〇一年一二月に智島にやって来た。しかし、羅喆は智島に長く留まることはなく、金允植との面会を果たした後、その二日後に智島を発っている。

その後、羅喆はソウルに戻って、桂洞にある金允植の自宅に滞在していたようである。金允植の日記を見ると、羅喆は一九〇二年一月にソウル桂洞にある金允植の留守宅から、自宅が無事であることを知らせる書簡を金允植のもとへ送っている。その間、羅喆は智島にいる金允植と書簡を通じて連絡をとりあっている。一九〇三年九月には金允植のもとに、羅喆の孫が誕生した知らせが届いている。また、回数は多くないが、智島にいる金允植のもとを訪問することもあったようである。金允植の日記には、一九〇三年三月に羅喆が智島を訪問した記事が記されている。

以上に述べたように、金允植が智島へ移配されて以降、羅喆は金允植のもとを去り、ソウルで活動を行っていた。この時期、羅喆がソウルでどのような活動を行っていたのか、詳しいことは分かっていないが、これに関して金允植の日記に注目すべき記事が掲載されている。すなわち、一九〇三年の一二月二二日の記事に、乙未事変（閔妃暗殺事件）の際に金允植が国王の勅書を偽造したという嫌疑がかけられ、金允植に追加の刑罰を加えるようにとの上疏が政府になされたことが記されている。この

知らせに接して、金允植と弟子たちは非常に慌てふためいた。羅喆を含む弟子たちはソウルの状況を調べて、電報や書簡を使って頻繁に金允植と連絡をとりあい、事の推移について知らせている。^{②7}その結果、前議官の金應連が金允植と李承五の罪を訴追するようにとの上訴を政府の中樞院に出したことがわかった。また、同年二六日から三〇日の『皇城新聞』にも関連記事が掲載され、乙未事変の逆賊に対する追加処罰として、趙義淵・俞吉濬・朴泳孝・李斗璜・李範来らの妻子をも罰するようにとの上訴が政府になされたことが報じられている。^{②8}結局、この上訴は受け入れられなかったが、この記事から、親露派が政権を掌握していた当時の朝鮮政府内において、閔妃暗殺事件に加担した開化派人士たちを徹底的に弾劾・訴追しようとする運動が続けられていたことがわかる。このような当時の政治状況を考えると、羅喆は、金允植の弟子たちと緊密な連絡を取り合いながら、智島に捕らわれていた金允植の手足となつて、その流配措置の解除と政界復帰のための活動に奔走していたものと考えられる。この問題について論じるために、以下では、金允植が流配刑に処せられることになった経緯について詳しく考察してみたい。

二、金玉均の日本亡命と大陸浪人たちとの交流

金允植が流配刑に処せられたのは、一八九五年に起こった閔妃暗殺事件に関与したというのが理由であった。そして、閔妃暗殺事件の原因の一つとなったのが、一八八四年に金玉均（一八五一―一八九四）ら急進開化派が起こした甲申政変であった。以下では主に金玉均と日本のアジア主義者たちとの交流に焦点を当てながら、甲申政変の失敗が閔妃暗殺事件にどのような繋がついていったのか考察してみたい。

名門両班である安東金氏の家門に生まれた金玉均は、一八七二年（二二

才）文科に及第した後、中央政界でエリート官吏としての道を歩み始めた。しかし、彼は開化思想家たちとの交流を通じて近代改革の必要性を痛感するようになり、多数の同志を集めて開化派（独立党）の形成を目指すようになった。金玉均の人生を大きく変えたのは、数次に及ぶ日本への遊学であった。彼は一八八二年三月に第一回目の日本視察旅行を行い、同年七月まで日本に滞在した。^{②9}この時、彼は同年六月に東京へ到着するとすぐに福澤諭吉と面会をした。彼は福澤との面談を通じて自主独立と開明進歩の必要性を悟り、これ以降、金玉均は福澤を師と仰ぎ、福澤も金の非凡なる才能に触れて援助を惜しまなかった。金玉均が福澤と初めて面会し筆談した時の様子について、福澤の弟子である井上角五郎は次のように述懐している。すなわち、「福澤は、東洋の運命は朝鮮・支那・日本の三国が連絡し、提携するのだから、遂に欧米の圧服する所となるを免れぬであろうということを書き示され：金君は大変に喜ばれ、実に三和だ、今や三和ということではなければならぬ」と語った。^{③0}金玉均はアジア主義思想の影響を受けて「三和思想」を掲げたとされるが、そのきっかけの一つが福澤諭吉との出会であったことがわかる。^{③1}実際、金玉均は自ら「三和」という号をつけて金三和と名乗ることもあった。^{③2}その後、金玉均は第二次（一八八二年九月―翌年三月）と第三次（一八八三年六月―翌年四月）の日本渡航を行った。こうして日本との結びつきを強めた金玉均は、清との宗属関係の破棄と閔氏政権打倒を目指して、朴泳孝や徐光範ら急進開化派の人士たちと共に一八八四年一月に甲申政変を起こした。^{③3}金玉均ら開化派人士たちは、日本公使館を占拠していた日本軍らを利用して閔氏一族を中心とする親清派大臣六人を殺害し、新たな政権を発足させた。しかし、新政権は清国軍に鎮圧されてわずか三日で崩壊し、ふたたび閔氏政権が復活した。

金玉均は甲申政変の失敗後、朴泳孝らと共に日本へ亡命した。しかし、

当時の日本政府は、外交上の負担として金玉均に対して非常に冷淡な対応をとった。金玉均は一八八六年六月に日本政府の命によって小笠原へ移送された。しかし、同島の気候が健康に適しないことを理由に内地帰還を申請し、これが認められたが、一八八八年七月に北海道札幌へ移送された。そして、一八九〇年一月に至って東京還住を許可された。このような日本政府の冷遇とは対照的に、民間の有志たちは金に対して様々な支援を惜しまなかった。それは金玉均の性格と人柄によるところが大きかった。金玉均は実に多才多能な人物であったが、人の心をつかむのが上手であったようである。これについて、長年間彼の同志であった朴泳孝は、「金玉均の長所は交遊である。交遊が実に上手であった。文章が巧く、詩文書画すべてが上手かった」と回顧している^{④⑤}。日本への亡命直後、最初に金玉均を支援したのは福澤諭吉であった。福澤は身寄りの無い金玉均・朴泳孝ら亡命人士たちの窮状に大いに同情して、金玉均らを三田にある自分の家に寄宿させて、数ヶ月の間彼らを保護した^{④⑥}。

その他にも、数多くの有志たちが金玉均と交流を行い、彼に救援の手を差し伸べた^{④⑦}。彼らの中には、金玉均ら亡命人士たちを利用して朝鮮へ渡り一事を起こそうとする者も少なくなかった。その代表的な人物として、自由党左派の大井憲太郎があげられる。大井は、「金玉均と交わりを結び、金の慷慨の志に動かされて援助を約する所あり：朝鮮に義拳を敢行しよう^{④⑧}」とした。大井は数十人からなる日本人壮士を自ら率いて朝鮮へ渡り、朝鮮政府の守旧派官僚を殺害し、ソウルの清国公使館を焼き討ちして清側勢力を一掃しようと企んだ。しかし、この動きは警察当局に事前に察知され、一八八五年一月に大井をはじめとする実行隊の壮士たちが逮捕された。世に知られた大阪事件である。

このように金玉均と交わって彼を支援しようとした者たちは、朝鮮や中国問題に関心を寄せるアジア主義者たちが多かった。その中でも、頭

山満と犬養毅と岡本柳之助の三名が金玉均と最も深い交際をしたことで知られている（岡本に関しては次節で詳述するので、以下では犬養・頭山との関係を中心に述べる）。犬養に関しては、次のような逸話が伝えられている。金玉均は日本亡命後、名前を岩田周作と名乗り、日本語をすぐに習得して流暢に話した^{④⑨}。ある日、犬養が金玉均を連れて上野にあった日本鉄道の社長小野義真のもとへ相談に行った。この時、小野は両名と初対面であったが、金玉均があまりにも流暢な日本語を話し、巧みにお世事を並べて饒舌にまくしたてるのに対して、犬養は訥言でぶっくら棒に話すので、小野は犬養の方に向かって「君は仲々日本語が巧いですね」と盛んに賞め、犬養のことを朝鮮人と誤解したことがあった^{⑤①}。

また、頭山満は、金玉均と最も親しい親友であった^{⑤②}。両者が初めて会ったのは、金玉均が日本へ亡命した直後のことであった。甲申政変に敗れて金玉均が日本へ亡命したことが知られると、福岡の玄洋社内では「社員を総動員して義勇軍の中心勢力となし朝鮮で事を挙げようとする声が高まった^{⑤③}。この声に押されて、一八八五年三月に頭山は神戸に滞在中の金玉均を訪ねた。頭山の回顧談によると、この時、頭山は三十歳で金玉均はその三つ四つ年上であり、金玉均が「非常な才物であるという事と野放図な所もあるが珍しい剛の者であるという事を見抜くことができ」と述べられている^{⑤④}この時、頭山は持ち合わせていた千円ばかりの所持金をすべて金玉均に投げ出して、すぐさま福岡に引返して資金の調達に取掛った^{⑤⑤}。また、朝鮮で刊行された雑誌『三千里』には、頭山自身による回顧として「金玉均ハ確カニ豪カツタネ」、「アンナニ出来ル人物ハ古今東西ヲ通シテ一寸アルマイ、何ンテモ出来タカラナ」と何回も敬服していたという記事が掲載されている^{⑤⑥}。これに関して、玄洋社側の資料にも、「朝鮮の亡命客中で金玉均は最も傑出した人物であった。才氣に富み、膽略もあり、押しも強く、そして祖国の内政改革問題や独立計画に

就ても彼が最も熱心で」⁵⁵ あったと述べている。また、赤坂嶺南坂にあった頭山の居宅には、客間に、金玉均が頭山満のために書した「貞静幽間」の額があり、床の間には、西郷南州の敬慕した大塩平八郎の軸が掛けられていた。⁵⁷ このことから、頭山満が金玉均にいかにも深く傾倒していたか窺い知ることができる。

そのために頭山は、金銭面での援助をはじめ、心身両面にわたって様々な援助を金玉均に対して行なった。⁵⁸ これに関して、玄洋社の幹部であった葛生東介（本名は玄暉、後に頭山満の片腕とも呼ばれた葛生能世の兄）は次のように述べている。すなわち、「予が金氏と相知り相交つて居る間、予は常に金氏の庇保を受ける事少くなかった。これは予のみならず、当時我國の有志家若くは書生にして、金氏と相交はるもので、金氏の庇保を受けないものは甚だ稀である。唯だ之と反対に金氏を庇保したものは一の頭山満氏あるのみ」と述べている。また、この頃の頭山に関して、興味深い話が伝えられている。甲申政変の後、日本の民間壮士の間では、朝鮮に渡って事を起こし中国の勢力を一掃しようとする声が高まったが、頭山は「慎重論を唱えて、同志の面々を慰撫し輕挙妄動を戒める傍ら、大陸経営に就ては別に根本的の方策を立て」た。⁶⁰ その方策とは、人材養成のために釜山に語学学校を設立するというものであった。すなわち、頭山は一八八六年初秋に、「釜山に日清韓三国語を教へる学校を設立し、大陸に志ある青年をして平素は語学を研究せしめ、将来清韓に事ある場合この学校を根拠地として起たしめる」という計画を立てた。麻布の龍源寺を秘密の相談所と定め、中江兆民が漢文で設立趣旨書を起草し、校名も善隣館と決定したが、金玉均も時々この議論に参加していたという。⁶¹ 結局、大阪事件が起こったために、この計画は頓挫した。

このような頭山自身による支援もあってか、玄洋社系の人士たちの中には金玉均と深く交わる者たちが多くいた。『大東合邦論』を著して東ア

ジアの連帯を訴えたことで知られる樽井藤吉も、金玉均と昵懇の仲であったことが知られている。少々長くなるが、ここで樽井の経歴を辿りながら、金玉均との交わりについて述べておこう。大和国の材木商の家に生まれた樽井は、漢学を学んだ後、西郷隆盛の征韓論に賛同し、早くから朝鮮問題に関心を寄せた。また、友人から朝鮮近海に無人島があることを聞くと、「これを占領して同志を集め、征韓の策源地とする」ために、一八七八年二月から一八八一年二月にかけて三年間、四次に亘って無人島探検を行なったが適当な島は見つからなかった。⁶² この無人島探検について、樽井は「此無人島あらば、寔に国家の大幸なり。予は平素より我國は先づ朝鮮を侵略するにあらざれば、発展の緒を開くこと能はずと思料するものなり。幸に此無人島あるに於ては、之を我党有志の梁山泊として、徐々同志を招き之を征韓策の根拠地たらしむる」と述べている。そして、この無人島探検の後、一八八二年三月に樽井は金玉均と会っている。この年の三月に金玉均は初渡日を果たし、長崎に一ヶ月滞在していた。この時、樽井は長崎で金玉均と出会い、筆談をして親交を暖めている。⁶⁴ その後、樽井は一八八二年五月に日本で初めて社会主義を掲げた政党として東洋社会党を備前島原で結成した。⁶⁵ しかし、結成後一ヶ月で解散命令を受け、集会条例違反の罪に問われて翌年に一カ年の禁固刑に処された。出獄後、樽井は福岡で開催された改進黨大会に出席して頭山と初対面し、これ以降、玄洋社の人士たちと深く交わるようになった。また、この頃、中国で清仏戦争が起こると、樽井は「福州城を乗っ取る」ために長崎から舟で中国福州へ向かい、さらに福州から上海にやって来た。そして上海の地で、樽井は金玉均が日本へ亡命したという知らせに接すると、樽井は金玉均を使って朝鮮政府を倒そうと考え、急遽日本へ帰国した。樽井は一八八四年暮れに横浜にいた金玉均を訪ねた。そして、「五百名の猛士を汽船に乗せて仁川に到り、不意に京城を襲ひ反対派の大

臣を監禁して九天直下、王命を挟んで新政を公布すれば事は直ちに成るであろう」⁶⁶ともちかけた。これは、玄洋社社員をあてにしている陰謀であったが、資金に関しては、樽井の知人で大和の山林王である土倉庄三郎に援助してもらおうと考えた。⁶⁷結局、土倉に支援を断られた上、一八八五年に大阪事件が起こって、この計画は実行に移されることはなかった。その後、一八九二年に樽井は衆議院に出馬して当選した。その代議士時代の一八九三年に樽井は『大東合邦論』を世に出した。本書の中で樽井は、日本と韓国を合わせた「一合邦」として「大東」という国をつくり、この大東国が清国と「合縦」して、西洋の列強諸国に対抗することを提唱した。⁶⁸このようなアジア連帯論は、金玉均及び彼を支援した玄洋社系人士たちとの交流の中から得られたものであったと考えられる。⁶⁹

また、後に孫文の支援者となる宮崎滔天も金玉均と深い交わりをし、彼の「心友」となった一人であった。宮崎滔天（本名は寅藏、以下では滔天とする）は兄の弥藏と共に若くして中国革命の夢を抱いたが、当初は孫文ではなく金玉均に師事し、金玉均の支援を受けて中国へ渡ろうとした。これに関して、滔天自身、金玉均のことを「私が此人とは見込んで、支那革命の志願を打ち明けた第一人〔最初の人物〕」であったと述べている。⁷⁰滔天が最初に金玉均と会ったのは一八九一年の頃、同郷の友人田尻一喜の紹介を通じてであった。田尻は当時、東京有楽町の金玉均の仮寓に居候していた。滔天は、暇さえあれば田尻のもとを訪れ、「金のお手隙を狙っては、朝鮮問題や東亜問題や人物評論を拜聴」した。⁷¹そして、一八九四年の初春、滔天は兄の弥藏と共に郷里の熊本を出て上京し、東京芝浦の旅館にいた金玉均のもとを訪ねて、ある相談（滔天はこれを「一身の大事」と記している）を持ちかけた。それは「支那に入って支那人になり済まし、一大革命を行ふて興国の氣運を煽り、祖国なる日本と根本的同盟を結んで興亜の基礎を固め」るために、「先づ支那内地に潜入して

支那の言語風俗に習熟し、立派な支那人に成り済ますまでの二人の費用を一万円と見積り、その一万円を先生（金玉均を指す…引用者）に相談して拵へて頂く」ということであった。これに対して金玉均は、「実は僕も同じような考へで近々支那へ渡る積り」であると答え、この中国旅行から戻って来たら、「頭山（満）君、福澤（諭吉）君、後藤（象二郎）君、此の三君と内々相談してることがあるから間違ひなく金が出る、其金を持つて第二の支那行をやる、実は僕も支那に永住する積りだ、亜細亜の問題は、支那の興亡によりて定まる、朝鮮畢竟何するものじや、アレは只の踏台ぢや、僕は少なくとも朝鮮と云ふ小問題は閑却して居る…安心し玉へ、一ヶ月後には実行が出来る」と述べて、宮崎兄弟への経済的支援を約束した。この時の様子については、滔天の半生記である『三十三年の夢』の「舟中の密談」の項目で詳述されている。⁷⁴

このような深い交わりを通じて、日本の大陸浪人たちは金玉均に様々な支援を行った。それは単に経済的な援助だけにとどまらず、彼の身辺警護にも及んだ。閔妃一派は、甲申政変に関与した開化派人士たちを厳しく処罰した後、事變の首謀者であった金玉均に刺客を送って暗殺を試みようとした。このような刺客たちから守るために、頭山は金玉均の身辺を気遣い、「大石良雄が吉良家の諜者に油断させた故智に倣って、従来の憂国的行動を捨て遊蕩に耽るやうにと勧告した」という逸話などが残されている。⁷⁵しかし、それにもかかわらず、金玉均は中国上海へ渡り、そこで暗殺されてしまう。金玉均が危険を顧みずになぜ上海へ行ったのかについては諸説ある。これに関して、玄洋社側の資料には、守旧派である閔妃一派と提携して朝鮮朝廷を懐柔しようとした清国の袁世凱と李鴻章が、朝鮮内の親日開化派を根底から全滅しようとした陰謀であると見なしている。⁷⁶これと同様の見方から、戦前に刊行された金玉均の最も詳しい伝記である『金玉均伝（上巻）』には次のように記されている。す

なわち、朝鮮側の実情を知悉した袁世凱と李鴻章は、「金玉均暗殺の密計を謀り、李鴻章の義子李経芳を以て東京駐劄公使として赴任」させた。李経芳は温容甘言以て金玉均を招待し、その落胆貧困の惨状に同情して、李鴻章と金玉均との面会を期待させた。その際、玄洋社側の資料では、「李経芳から」父李鴻章の力を借りて再び朝鮮政府の要路に就かせ、内政改革の志を達しさせるから一度上海まで出掛けて来い」という誘いの手紙が来たと記している。これに関して、犬養毅は次のように証言している。すなわち、「金玉均は」日本の力を借りて朝鮮の改革を断行しようとすることは到底見込みのないことだと決心して失望した。その結果李鴻章の力を借りても出来るなら年来の宿志を遂げたいものとするに至り、遂に李鴻章に手紙を送り、その結果上海に赴くことになった。また、井上角五郎は金玉均から直接聞いた話として、次のように述べている。「金玉均曰く」事情は福澤先生に詳しく申上げましたが、実は三和の主義を以て李鴻章を説かうと思ふ。私が支那に行つて李鴻章に面会が出来れば、或は面会する前に殺されるかも知れない。或は其の前に死ぬるかも知れない。或は亦面会中に殺されるかも知れない。勿論面会後には生きては居ないだろうと思つて居りますが、兎に角日本、支那、朝鮮の三国が共同一致して西洋の勢を防ぐのが目下の急務で、東洋平和の原因は茲にあるのだといふことを李鴻章に向つて説かうと思ふ」と述べている。

その後、東京駐劄清国公使として着任した汪鳳藻は、李鴻章父子の密命を受け、朝鮮人亡命者である洪鍾宇と謀つて金を上海に誘い出す計画を立てた。洪鍾宇は金玉均の友人であつたが、兵曹判書の閔泳韶から金玉均の暗殺を命じられた李晩植の委託を受けて、金玉均の暗殺を請け負つた人物である。李鴻章父子との面会のために中国行きを決意した金玉均であつたが、この頃彼は負債を抱えており中国へ渡る資金がなかつた。そこで金玉均は自ら進んで李晩植・洪鍾宇に交り进行を求め、所要の旅

費を捻出させた。こうして、金玉均は洪鍾宇と共に上海へ渡ることにした。金玉均の上海行きに対して日本の友人たちは全員猛反対をした。しかし、「恩人福澤先生の忠告を却け、親友頭山満、岡本柳之助の忠言をも聞棄てて」、金玉均は上海行きを断行した。金玉均の身辺に気を遣つていた頭山満は、洪鍾宇の素行を怪しみ、「彼奴等は唯の鼠ではない。迂闊に交りをつけて居ると九仞の功を一簣に欠くやうな事があるぞ」と注意したが、金は「僕もさう思つて居るんだが今更どうも仕方がない。虎穴に入らずんば虎児を得ずという訳だ」と言い、頭山の諫言を耳に入れず、断乎として上海行きを主張した。この時、金玉均は、李経芳に贈る土産として頭山の家にあつた家宝の刀をせがみ、頭山はこれを金に与えている。また、金玉均が中国へ渡る際、日本の友人たちは東京で送別会を開いて、金玉均に惜別の辞を告げた。その時、これが最後の別れになるであろうと予感した頭山は、一人だけ大阪まで金玉均に同行している。

その後、金玉均は神戸から舟で上海へ渡つたが、上海に到着した直後の一八九四年三月二八日に宿泊先で、今の今まで同志の如く装つていた洪鍾宇が刺客の本色を現わし、ピストルで金を射殺した。金玉均は上海で日本旅館の東和洋行に宿泊した際、宿泊帳に「岩田三和」と記帳した。彼は普段、岩田周作と名乗つたが、この時に岩田三和と記したのは、朝鮮・清国・日本の三国和同で西欧諸国の侵略を防ぎたいとの年来の願望、つまり三和主義からであつたろうと思われる。その後、金玉均の死体は清国の警務部に押収され、朝鮮からの出張員に渡された後、清国の軍艦に載せられて朝鮮本国へ送られた。一方、金玉均暗殺の報に接した日本の大陸浪人たちは、憤慨と同情の念を抱いた。金玉均と交流していた人々士たちによつて金氏友人会が組織され交詢社内に事務所が設けられ、遺骸収拾のために斎藤新一郎と岡本柳之助が上海に派遣された。しかし、金玉均の死体はすでに朝鮮仁川港に輸送された後であつた。岡本らはど

うすることもできず、仕方なく東京へ戻って来た。⁹¹ また日本の各新聞社が連合して、金玉均の遺骸処分、記念碑設立、同志の朝鮮亡命客を補助することを目的に追悼義捐金の募集が行われた。⁹² こうして金氏友人会の主催で同年五月二〇日に東京西本願寺別院で金玉均のための法会が営まれ、位牌が空しく青山墓地に埋められた。⁹³ 金玉均死去の知らせを受けた日本の大陸浪人たちは大いに悲嘆に暮れた。特に宮崎滔天は、金玉均の資金援助で中国革命への実地運動に乗出すつもりだった。そのために滔天は、金玉均の周囲に刺客が付きまといていて心を心配し、上海行きに同行することを願ひ出た。これに対して、金玉均は次のように答えている。すなわち、「百千の護衛があっても死ぬ時は死ぬ、…李鴻章が僕を騙そうと思ふて辞を卑ふして迎へる。…先方に行つて直ちに殺されるか幽囚されるれば即ち已む、五分間でも談話の時間を与ふれば僕のものだ。兎に角問題は一ヶ月で決する。それまで国に帰つて僕の電報一発で何処へでも来られるよう、兄さんと準備しておき玉へ」。⁹⁴ この言葉を聞いた滔天は、「指折り数へて上海着の電報を待つて居た。二日の後電報は来た。…『アボジシンダサイメンダン』と書いた」電報であった。⁹⁵ この時、滔天の失意は甚だしく、数日間ヤケ酒を飲み続けたほどであった。⁹⁶ そして、東京で行われた金玉均追悼大会で、滔天は金玉均と義兄弟の契りを結んだという長崎の炭鉱経営者・渡辺元の知遇を得て、渡辺の勧めで一八九五年一〇月タイへ渡つた。⁹⁷ また、頭山満に関しては、暗殺の日に金玉均が夢枕に立ったという逸話が伝えられている。頭山は花柳好きで知られ、毎夜の如く芸妓を宿に入れて床を暖めたが、その夜だけは誰も呼ばず、常宿の宿で一人きりで寝た。すると午前四時頃、浪人七八名が電報を握り、血相を変えて頭山の部屋へ入ってきた。頭山は平然として、「金が暗殺られたらう」と答えた。浪人たちが、誰か先に知らせた者がいるのかと聞くと、頭山は「金が昨夜俺に会ひに来た。俺は人を避けて逢

ふた：顔は青褪め、目は閉ぢてた。其上齒をくひしばつて居ったから、金が何を云ふたのやら些しも判らなかつた」と言つた。浪人たちが暗殺の顛末を頭山に話すと、「之は俺の所に、暗殺された事を報らせに来たのだ：上海へ行く前、俺が所へ来た時は、本物ぢつたが、昨夜は夢ぢやつたかの」と言つて黙つてしまつた。⁹⁸ このような逸話から金玉均を慕つた日本の友人たちの悔しさが如何ばかりであつたか窺い知ることができ

る。一方、金玉均の死体は朝鮮に運ばれた後、凌遲刑（首をはね、四肢を断ち、胴体を刀で切り刻む惨刑）に処された。⁹⁹ 閔氏一派が金玉均に対していかに深い憎悪心を抱いていたのか窺い知れる。この金玉均暗殺事件によつて、特に玄洋社系の大陸浪人たちは、閔妃一族に対する怨みにも似た敵愾心を抱くようになった。また、この事件の背後には清国側の陰謀があると感じられたことから、彼らの排清感情は一気に爆発した。こうして、彼ら大陸浪人たちは「金玉均の名誉回復」を悲願に掲げ、清側の勢力排除を目的に朝鮮問題により一層深く関与していった。金玉均暗殺の翌年である一八九五年に閔妃暗殺事件が起こり、その事件に日本の大陸浪人たちが深く関与したのもこのような事情からであつた。

三、閔妃暗殺事件における岡本柳之助の行動

一八九四年に日清戦争が勃発すると、朝鮮半島における政局は一変し、日本側と結び付いた開化派の勢力が急速に伸張していった。一八九四年七月に日本軍による景福宮占領下で第一次金弘集政権が成立すると、彼らは閔氏一派を排斥し、十余年間雲峴宮に軟禁されていた大院君を担ぎ出して摂政とし、甲午改革（甲午更張）とよばれる一連の近代改革を行つていった。また、一八九四年九月の平壤会戦・黄海海戦で清国軍を破つ

で戦争の大勢が決すると、同年一〇月に朝鮮公使として井上馨が赴任し、日本に亡命していた急進開化派の朴泳孝を開化派政権に加え、朝鮮政府はより親日的な色彩を帯びていった。その後、日清戦争は日本側の勝利で終わり、一八九五年四月に下関条約が締結された。しかし、ロシア・フランス・ドイツの干渉によって日本は遼東半島の返還を余儀なくされた。この三国干渉の余波によって、朝鮮半島では親露政策をとる閔氏政権が復活した。

このような不安定な政局の中で、一八九五年九月に陸軍中将の三浦梧楼が新たな駐韓公使として赴任した。三浦は日本勢力の後退を阻止するために、閔妃を殺害して大院君をもう一度政権につかせる計画を立てた。^⑩そして、金玉均暗殺によって閔妃一派に深い怨みを抱いていた在野の大陸浪人たちも、この計画に深く関与した。この閔妃暗殺計画は、駐韓公使の三浦梧楼の他、宮内顧問兼軍事顧問の岡本柳之助、日本公使館書記官の杉村濤、武官の楠瀬幸彦（歩兵中佐）らが中心となつて画策され、実行に移されたとされる。その中でも、岡本柳之助は、日本の大陸浪人たちを束ねて大院君を担ぎ出す役割を果たし、閔妃暗殺事件における核心犯の一人であった。また、岡本は金允植と非常に親しい間柄となり、後に詳述するように日本を訪問した羅喆とも交流を行った。以下では、岡本の動向に焦点を当てながら、閔妃暗殺事件の経緯について考察してみたい。

まず岡本柳之助の経歴について述べておこう。^⑪岡本は当初、軍事畑を歩んだ。彼は一八七四年（二三才）に陸軍大尉に任命され、一八七七年には陸軍少佐に任命された。この時、西南戦争などで功績をあげている。しかし、一八七八年に竹橋事件が起こるとその背後人物と目されて下野した。これ以降、在野の浪人として東アジア問題に深く関わった。岡本の経歴で特に注目したいのは、彼が早くから朝鮮に関心を抱いていた点

である。岡本は早くも一八七三年に、朝鮮の歴史・兵制・地理を調査し朝鮮方策に関する意見書を作成して同志たちに回覧している。^⑫また、一八七五年に江華島事件が起こり、翌年一月全権大使として黒田清隆が朝鮮に派遣されるとその随員として朝鮮へ渡った。^⑬

また岡本は、福澤諭吉を通じて日本遊学中の金玉均と知り合いになっている。彼の伝記によると、「明治十六年（一八八三年：引用者）八月朝鮮ノ国政ヲ革新セント欲シ全国人金玉均等ト之ヲ議シ又後藤象次郎陸奥宗光福沢諭吉松尾三代太郎等ト之カ計画ヲ為ス」とある。実際、金玉均はこの年、朝鮮の鉅山を担保として日本政府から三百万円の借款を受けるために訪日した。この資金工面に失敗して朝鮮へ帰国した金玉均は、守旧派の攻撃に遭い、「苦心焦慮、百万計画する所あり、使を岡本柳之助に馳せ来援を促した」とされる。^⑭

このような間柄であつたために、甲申政変の失敗後日本へ亡命した金玉均に対して、岡本は手厚い支援の手を差し伸べた。金玉均は日本政府の勧告によって小笠原島へ送られた後、健康を害して治療のため東京に戻つて来たが、日本政府は再び金を北海道に送ることに決めた。この時岡本は、病気で長旅に堪えられない者を強いて北海道まで送ろうとする当局の措置を見て憤慨し、時の司法大臣山田顕義を訪問して金玉均の窮状を訴えて出発延期を請い、彼を病院で療養させることにした。^⑮その後、北海道に送られた金玉均は、健康を害して再び東京へ戻ってきた。その当時、金玉均は東京麹町有楽町に住んでいたが、岡本は金のもとによく遊びに行き、麦酒（ビール）を飲んで夜遅く帰ることがしばしばであった。^⑯また岡本は、刺客に付け狙われていた金玉均の身を案じ、頭山満らと共にその身辺擁護に努めた。^⑰金玉均が上海行きを決行しようとした際も、岡本は金と小半日も激論をして彼を思い止まらせようとした。^⑱金玉均が上海で刺客の凶弾に倒れると、岡本は金と最も親しい親友として金

の遺体を回収すべく、「奮然と蹶起し、『俺が出掛けて金の骨を拾ふて来る』とて在野有志の意志を代表して上海に駆けつけ」た^⑩。金玉均の遺体が清国の軍艦に載せられて朝鮮へ運ばれた後であることを知ると、在上海日本領事に交渉して在中国の各国公使に勧告をなさしめた後、悲憤を抱きながら帰国している。

金玉均の死後、岡本は金の遺志を実現させようという思いもあって、朝鮮問題にますます深く関与していった。その際、特に注目したいのは、岡本が大院君と昵懇の仲となり、その信頼を得たことである。岡本は日清戦争が始まる前の一八九四年三月頃から、大院君のいる雲岷宮に出入して謀議を行っている^⑪。そして、同年七月に日清戦争が勃発すると、岡本は大院君を担ぎ出して親日内閣を成立させる動きに参画し、同年一二月には朝鮮政府の宮内顧問兼軍事顧問として正式に招聘された^⑫。しかし、日清戦争後の三国干渉によって、朝鮮半島における日本の影響力は弱化して、閔氏一派が再び実権を握った。日本側は朝鮮における勢力挽回を目指し、井上馨公使を更迭して、陸軍中将の三浦梧楼を新たな公使として派遣した。そして岡本は金玉均の怨みを晴らすべく、日本公使の三浦梧楼らと共に、閔妃を殺害して大院君を擁立する計画を立てた^⑬。この時、大院君と親しい間柄にあった岡本は、当時孔德里の別邸に蟄居中であった大院君を直接訪ねて、進退に悩んでいた大院君を説得し蹶起を決意させた^⑭。こうして一八九五年一〇月七日夜から八日未明にかけて、日本公使館・領事館員、日本軍守備隊、日本人顧問官、大陸浪人らは景福宮に侵入して坤寧殿で閔妃を殺害した後、その死体を焼き払うという蛮行を行った^⑮。この時、岡本は大院君を孔德里から連れ出して景福宮へと導く主導者としての役割を担った。また岡本は、朝鮮側の開化派人士たちの協力を事前に取り付けて大院君入宮に協力させる役目も果たした^⑯。当時の朝鮮では、ロシアの勢力を背景に閔氏一派が政権を掌握して

おり、甲午改革を主導してきた親日的な開化派官僚らは自分たちの身上に危害が及ぶことをおそれ、閔氏一派に対抗する方策を講じていた。岡本は事前に彼らと協議を謀って、大院君の入宮に協力させたのである。そして、閔妃殺害を黙認しそれに協力した人物の中に金允植もいた。金允植はもともとと穏健開化派として親清路線をとっていた人物であるが、日清戦争を契機に、急速に日本との関係を深めていった。先に述べたように、金允植は一八八七年五月に忠清南道沔川郡へ流配され、ようやく一八九四年に釈放となった。そして、ちょうどその直後に成立した親日的な第一次金弘集政権に登用され、一八九四年七月には外務衙門大臣に任命されて日本との外交交渉に従事した。そして、日清戦争が日本側の勝利へと傾いていく状況下で、彼は徐々に対日協調的な立場をとっていった。その際、金允植は岡本と深く交流をしている点が注目される。岡本が一八九五年に朝鮮政府から顧問官に応聘された際、朝鮮側の外務大臣として金允植が日本側全権大使である井上馨に「岡本柳之助と陸軍歩兵中佐楠瀬幸彦が軍制に熟練していると聞き、朝鮮政府は彼らを顧問として招聘したい」として交渉を行っている^⑰。このことから、金允植が岡本とすでに個人的な親交を持っており、岡本の朝鮮政策に賛意を抱いていたのではないかと考えられる。

実際、金允植は閔妃暗殺事件において日本側勢力に呼応した動きを見せている。すなわち、閔妃殺害時である一八九五年一〇月一〇日（陰暦八月二日）に、「王后閔氏ヲ廢シテ庶人トナス」詔勅が発せられたが、その署名は宮内府大臣李載冕と内閣総理大臣金弘集を筆頭に、外部大臣として金允植の名が連ねられている。また、閔妃暗殺直後に新たに組織された金弘集内閣で金允植は中枢院議長に任命され、閔氏一派の各大臣を一斉に罷免する処断に関与した^⑱。閔妃暗殺事件の後、岡本ら事件に関与した四〇名余りが日本に送還されたが、岡本が朝鮮を去る際、金允植は

送別会で岡本に特別に別れの挨拶をしている。^⑫一方、金允植は一八九六年の露館播遷の際に外務大臣職を免職され、その後、閔妃暗殺に関係した罪を問われて一八九七年に逮捕され、翌年一月に済州島へ終身流配された。それ以後、金允植は一〇年間余り流配生活を余儀なくされた。金允植は流配措置が解けた直後の一九〇七年八月に、真っ先に岡本を訪問して昔を回顧している。^⑬その後も、岡本が訪韓した際にはよく面会をしていたようである。例えば、一九〇七年一〇月に伊藤博文統監を訪れた後、日人倶楽部に行つて岡本を訪ねている。^⑭このように金允植と岡本との交流は途絶えることなく続けられた。一九一二年五月に岡本が上海で病死すると、金允植は輓章を書いて送り、哀悼の意を表している。^⑮金允植にとつて岡本は、国母（閔妃）を殺害した仇敵というよりは、むしろ、共通の政敵（閔氏一派）を排斥するために戦つた同志とも言える存在であつたのである。

四、開化派官僚の日本亡命と日本での亡命者帰国運動

閔妃暗殺事件の後、朝鮮側では、一八九六年二月に親露派とロシア公使が共謀して、高宗をロシア公使館に移すクーデターが起こつた（露館播遷）。これ以後、高宗がロシア公使館に留まつた一年間、親露派と結びついた閔氏一派が再び政権を掌握した。高宗は、閔妃暗殺事件に関与した罪で開化派官僚たちを「国賊」として糾弾し、彼らを逮捕して処刑するよう命じた。これにより、金弘集（総理大臣）・鄭秉夏（農商工部大臣）・魚允中（度支部大臣）は殺害され、兪吉濬（内部大臣）・趙義淵（軍部大臣）・張博（法部大臣）をはじめとする十余名の高官たちは日本の軍営に逃避した後、日本へ亡命した。

その後、ロシア公使館から慶運宮へ戻つた高宗は、一八九七年一〇月

に国号を大韓帝国と定め自らを皇帝とし、専制君主制の形で国政改革を行つていった。また、一九〇二年三月には、亡くなつた閔妃に対して「明成皇后」の尊号を与えた。ちなみに、長年のあいだ閔妃の宿敵となつた大院君は、大韓帝国が宣布された一八九八年の二月に雲岬宮で薨去している。また、大韓帝国政府は、過去の閔妃殺害の責任を問う形で、日本政府に亡命者たちの引き渡しを求めた。これに対して、日本側は朝鮮人亡命者たちに補助金を支給するなどの保護措置をとっており、日朝間に犯罪者引き渡しの法律が定められていないことを理由に亡命者の引き渡しを拒否した。そのために大韓帝国側は日本に刺客を送り、亡命者の殺害を試みているが、いずれの場合も失敗に終わっている。当時、日本に滞留した朝鮮人亡命政客の人数は三〇余名に達しており、日朝政府間の一大問題であつた。この問題に対して、駐韓公使の林権助は、亡命者の刑罰に対する軽減措置をとるよう朝鮮側に勧告し、朝鮮政府はこれに応じて一九〇二年九月高宗皇帝の誕生日に際して恩赦による軽減措置をとっている。^⑯

これに対して、日本に渡つた朝鮮の亡命政客たちは、朝鮮本国へ帰還し政界に復帰するために日本で様々な運動を繰り広げた。その運動とは、他でもなく、朝鮮政府の一大変革であつた。日本へ亡命した朝鮮人たちは、閔妃暗殺事件に関与した罪によって高宗皇帝から国賊として処罰された国事犯たちであつた。彼らが朝鮮政界に復帰するためには、かつてのような親日的な開化派内閣が組織される必要がある、そのためには親露派が駆逐されなければならず、場合によっては高宗皇帝の退位も想定に入れた朝鮮政界の一大変革がなければ無理であつた。そのために、彼らは、日本側の協力・支援を積極的に得ようと考えたのである。

これに関して、日本側の調査記録を見ると、当時、日本に逃れて来ていた朝鮮の亡命者グループは二派に分かれていたことがわかる。一つは、

表 1：日本に滞留した朝鮮人亡命政客の一覧

No.	姓名	当初の刑罰	恩赦による減刑	在朝当時の官職	品階、姻戚	日本政府補助金(圓)
1	李竣鎔	流終身	流 15 年	内部教辦兼親軍統衛使、内部大臣署理など	正一品 大院君の孫	100
2	趙義淵	流終身	流 15 年	軍部大臣	従一品	35
3	兪吉濬	流終身	流 15 年	内部大臣	従二品	35
4	張博	流終身	流 15 年	法部大臣	従二品	35
5	劉世南	流 2 年	放免	内部教辦	正三品	35
6	李淙遠	流 2 年	放免	觀察使	正四品	35
7	禹範善	斬首	流終身	大隊長少佐	正三品	20
8	李斗璜	斬首	流終身	大隊長少佐	正三品	20
9	李範来	流終身	流 15 年	大隊長少佐	正三品	20
10	李軫鎬	流終身	流 15 年	大隊長少佐	正三品	20
11	趙重応	流 10 年	流 5 年	法部刑事局長	正三品	20
12	李圭完	流 10 年	流 5 年	警務官、即警視	正三品、少佐	20
13	李承九	流 2 年	放免	警務官、即警視	—	20
14	申應熙	流 10 年	流 5 年	軍部秘書官	正三品、少佐	20
15	柳赫魯	流終身	流 15 年	軍部局長	正三品、少佐	20
16	趙義聞	流終身	流 15 年	隊長	正三品、少佐 趙義淵の弟	20
17	権東鎮	流終身	流 15 年	故警務使、即警視	正三品	20
18	陸鍾允	流 10 年	流 1 年	外部交渉局長	正三品	20
19	具然壽	流終身	流 15 年	農商工部主事	—	20
20	鄭蘭教	流終身	流 15 年	隊長	正三品、少佐	20
21	韓錫璐	流 10 年	流 1 年	隊長	正三品、少佐	20
22	崔敬鵬	流 2 年	放免	隊長	—	20
23	鄭鎮弘	流 2 年	放免	隊長	正四品	20
24	黄 鐵	流 10 年	流 1 年	郡守、大院君家人	正三品	20
25	尹孝定	流 2 年	流 1 年	度支部主事	—	10
26	李弘林	流 2 年	放免	書生	—	10
27	朴泳孝	流 15 年	流 10 年	内部大臣	—	0
28	高永根	流終身	流 15 年	独立協会・万民共同会	—	0
29	金俊龍	流 10 年	流 5 年	高永根の部下	—	0
30	金彰漢	流 2 年半	流 2 年半	仁川港書記官	金嘉鎮の従子	0
31	尹致昨	流 10 年	流 1 年	中枢院参書官	尹致昊の弟	0

(出典) (16)「亡命者処分ノ件」機密第 2 号、1902 年 1 月 4 日(『駐韓日本公使館記録』巻 17、2「乙未亡命者」)、(373)「本邦在留韓国亡命者ニ関シ回答ノ件」機密送第 43 号、1903 年 10 月 16 日、(374)「書簡：韓国人亡命者中一部ノ韓国勧誘ニ関スル林公使ノ書簡」(『韓国近代史資料集成』巻 2、「要視察韓国人挙動 (2)」、「要視察外国人ノ挙動関係雜纂：韓国人ノ部 (6)」)。なお、日本政府からの補助金は明治 34 年 10 月に支給された金額である。

李竣鎔(一八七〇～一九一七)を長に戴くグループであり兪吉濬・趙義淵らがこれに属し、もう一つは義和宮を長に戴くグループであり朴泳孝らがこれに属していた。この二つのグループのうち、特に前者は日本政府の要人たちの元に入出入りし、また朝鮮本国の有志たちとも気脈を通じながら活発な政治運動を展開していた。このグループが戴いた李竣鎔(表一の No.1)は、王族の一人として朝鮮末期に重要な動きを見せた人物である。以下では簡単に彼の経歴について述べておきたい。

李竣鎔は、大院君の長子である完興君李載冕の長子として、大院君の嫡孫に当たる人物である。国王の高宗は李載冕の第二子であるので、高宗の甥でもあった。大院君は嫡孫である李竣鎔を溺愛し、李竣鎔も祖父の威勢を借りて、自らを王世子と自認し、高宗にとってかわって国王となることを夢見ていた^⑩。しかし、李竣鎔は、東学乱鎮圧を名目に日清戦争が勃発した際に致命的な誤りを犯した。彼は統衛使という肩書きの下、朝鮮政府の軍事力の一部を管轄することに成功し、漢城府に親衛兵を組成するまでに至った。さらに彼は、東学党の首領であった全捧準と密通し合い、清国軍

を追って北上する日本軍の隙をついて東学軍を漢城府に入城させ、高宗を追いついて自らが王位に就くべく画策した^⑧。しかし、この動きが日本側に暴露してしまったのである。李竣鎔は政府転覆の嫌疑で一八九五年三月に逮捕され流配刑に処せられたが、すぐに特赦で放免となった^⑨。しかし、この事件により、大院君の実権は大きく削減され、李竣鎔は政界の表舞台から退出することを余儀なくされた。閔妃暗殺事件の際にも、岡本柳之助が雲峴宮を事前に訪れて謀議を行うなかで、大院君自らは一切政務にはつかず、李竣鎔を「三年間日本に留学せしめ、その材器を養成すべき事」を約束している^⑩。

この約束に従って、閔妃暗殺事件直後の一八九六年に李竣鎔は日本へ渡った。この間の事情については、菊池謙讓の著書の中に詳細に記されている。菊池謙讓は閔妃暗殺事件に関与し、広島監獄に送られた後、二年後に再び朝鮮へ渡り、十年間ほど滞在した人物であるが、彼は「私かに雲峴宮に出入し、又老雄（大院君を指す…引用者）の最も愛したる孫李竣鎔氏と交親あり、依って亡命中の氏と雲峴宮との間に介在して書信の往復、彼此の仲介執りぬ^⑪」仲であった。菊池の著書によると、「雲峴宮に退隠せる大院君は、最早世の功名を忘れたれども其愛孫李竣鎔の事は忘ること能はず。彼は自己の遺業を継ぐべく、彼の真正なる血統を承ぐべく、雲峴宮の生命を保つべく、恍惚として乙未の冬日本に送り去らしめたり^⑫」と述べている。また渡日後の李竣鎔に関しても、次のように記している。すなわち、「〔李竣鎔が〕日本に寄寓するや大院君遙かに書を日本政治家に送り彼の指導と保護を念々として推託したりき。…青年の身分にして大将の印綬を得たるが如き…又彼は酷だ乃祖の英風に似るあると称せられ王位僭奪の名義人として企望者として王宮より嫉視せられたること幾回なりしや知る可らず。彼は王妃乃祖の間に終生拭ふ可らざるの怨讐を築き、其争鬭の極屢々激甚なる変乱起りし毎に、彼は乃祖の

形となり、影となりて漢城の政界に現はれたりき、彼は半島の王座を犯せる慧星の如く不安の種なりき。果たして彼は其祖父の血脈を継ぐの英傑なる乎^⑬」と記している。さらに日本側人士の反応についても、「東京政事家は大院君の愛孫なるの故を以て、彼を遇するに王族の子を以てし、又英傑の孫なりとし、東京政府は彼の生活を助くるに相当の補助を以てせり^⑭」と述べている。実際、李竣鎔は、日本政府の周旋で一八九七年八月にヨーロッパ各地を視察する旅に出て、一八九九年一月に再び日本へ戻って来た。その後、一九〇〇年六月に安璦九クーデター事件に連累した罪が問われて逮捕令が出され、一九〇七年の純宗即位直前まで日本に留まった^⑮。朝鮮人亡命客の一派は、この李竣鎔を高宗に代わる新たな国王として押し立て、朝鮮に帰国して一気に政界復帰を図ろうと考えたのである。

そして、このグループで主導者的な役割を果たしたのが趙義淵（表一のNo.2）であった。趙義淵（一八五六―一九一五）は一八七四年に武科に及第した後、朝鮮政府の軍事関係の役職につき、一八八一年に日本で砲兵工廠その他を視察して啓発を受けた。一八九四年に日清戦争が勃発すると、大島公使と通じて日本公使館に出入りし、日本兵を景福宮に招き入れる際の中心的な役割を果たした。そして第一次金弘集政権が成立すると、壮衛士（陸軍大将に相当）に任ぜられて軍部大臣署理を兼ね、全国の軍制を統括する大権を委ねられた。そして臨時軍国機務署を創設して日本軍の進軍に全面的に協力し、同年一二月には軍部大臣に任ぜられた。また、趙義淵は一八九五年二月に国王の勅令によって特派清国戦地日陣軍隊慰問大使に任命され、政府代表として日本国兵士の慰問を行った^⑯。その時、戦地にて大本営参謀総長として出迎えた楠瀬幸彦中佐と面識を持ったと考えられる。また、一八九五年の閔妃暗殺事件の際には、朝鮮側の訓練隊を以て王宮を守備する警務使に任命され、日本人の乱入者を

王宮に入城させる決定的役割を果たした。閔妃暗殺後に組織された内閣においても、彼は軍部大臣に任命され、閔妃廃止の詔勅に軍部大臣として署名をしている。そして一八九六年の露館播遷の後、彼は閔妃暗殺事件における朝鮮側加担者の中で主犯格の扱いを受け、逮捕令が出されて高宗から処刑を命じられた。そのために国事犯として兪吉濬・張博らとともに日本へ亡命した。それ以来一〇年間日本で亡命生活を送った。

趙義淵の活動で注目すべきなのは、日清戦争時に日本軍に全面協力したこともあってか、日本亡命後も日本の軍部関係者らと交流をしている点である。一八九七年に楠瀬幸彦の斡旋で陸軍参謀次長川上操六と面識を持ち、彼を通じて名古屋・大阪・横須賀・広島などで軍事施設の視察を行い、一八九九年には北海道へ行って拓殖経営の視察なども行っている。また、一九〇二年頃には日本の陸軍参謀本部に出入りをしている。

このように日本軍部に人脈を有していた趙義淵は、大院君の嫡孫である王族の李垞と連携しながら、日本にいる朝鮮人亡命客を糾合して、朝鮮政府の変革と本国での政界復帰を目指していたのである。これに関して、日本側の記録によると、趙義淵は一九〇〇年の段階で、李垞と協力して、「本国ニ於ケル同志ヲ糾合セハ尚ホ四百人ヲ得ヘシ之ニ日本ノ応援者百人ヲ加ヘ五百人ヲ一団ト為シ以テ反对党ニ当ラハ一挙シテ目的ヲ遂行シ得ヘケン」と記されている。このことから、彼らが朝鮮政府の転覆を画策していたことが確認できる。そしてまた、趙義淵のもとには、多数の朝鮮人亡命客たちが集っていた。露館播遷後に趙義淵と一緒に日本へ渡った張博（表一のNo.4）も、この運動に積極的に関わった人物の一人である。このような状況下で、一九〇四年二月に日露戦争が勃発すると、李垞を戴いた趙義淵ら一派は、日本の軍部関係者たちと接触しながら、朝鮮人亡命客の本国帰還運動を本格的に展開していくようになるのである。

五. 日本亡命時における孫秉熙の政治活動

趙義淵らが展開した朝鮮人亡命客の糾合運動には、もう一人注目すべき人物が関与していた。東学の第三代教主として、後に天道教を創設する孫秉熙（一八六一―一九二二）がそうである。以下では、日本で展開されていた朝鮮人亡命客たちの糾合運動に、孫秉熙がどのように関わっていったのか考察してみたい。

東学農民戦争の失敗後、東学の指導者たちは山奥に隠棲して難を逃れた。一八九八年には第二代教主の崔時亨が官軍に逮捕され処刑されてしまう。崔時亨から北接大道主に任命され教権を握った孫秉熙は、朝鮮政府による弾圧を避けて忠清道に隠棲した後、一九〇一年に日本へ亡命した。彼は日本滞在中に「李祥憲」という別名を名乗った。彼が日本で仮名を使用していたことは、東学関係者にも一切明かされず、李祥憲が孫秉熙であることを知る者は、彼の腹心の数名を除いて誰も知らなかった。日本滞在中に、孫秉熙は開化思想に傾倒し、数十名の朝鮮の若者を日本に留学させるなどの事業を行いながら、東学教団の復興と本国帰国の機会を伺っていた。

日本における孫秉熙の活動で注目したいのは、日本に滞在していた朝鮮の亡命政客たちと連携しながら朝鮮政府の変革を行おうとしていた事実である。甲午農民戦争の後、東学徒たちは国賊と見なされ、朝鮮政府から禁教・弾圧の対象となった。また日本に亡命して世界の趨勢と文明開化の重要性を認識した孫秉熙は、朝鮮政府の在り方を抜本的に変革して信教の自由を獲得するしか東学の生き延びる道は無いと考えた。元開化派官僚と東学の指導者というように、両者はまったく異なる立場にあったが、朝鮮政府の一大変革を行うことでしか本国に帰還できないという点において、両者の利害は完全に一致していたのである。実際に、

孫秉熙は日本滞在中に、趙義淵・朴泳孝・樞東鎮・呉世昌といった亡命政客たちと交流しているが、その中でも特に、亡命政客の糾合運動を行っていたリーダー格の趙義淵と深い交わりをした。孫秉熙と趙義淵に関する動向に関しては、日本側の記録の中に密偵を使った多数の調査報告書が残されている。日本側の記録によると、孫秉熙と趙義淵は、本国を憂慮する心で意気投合し、「互ニ設謀シテ韓国政治ヲ改革スルニ決心」し、「日露戦争起ル前此人（孫秉熙を指す引用者）ヨリ運動費ヲ出シテ趙氏ヲ大阪ヨリ東京ニ転居セシメ」たと記している。その際、兩名は日本陸軍参謀本部の田村怡与造と通じ合っていたが、不幸にも田村は病死してしまつたと記されている。このような記録から、孫秉熙が運動資金を提供し、趙義淵が日本軍部の関係者を紹介するという協力関係が成立していたことがわかる。

また、孫秉熙は、趙義淵を通じて、他の朝鮮人亡命政客との交流も行っていた。その代表的な人物が樞東鎮と呉世昌であつた。樞東鎮と呉世昌は、後に天道教の幹部として活躍する人物であるが、彼らはもともと開化派官僚として一八九六年に日本へ亡命してきた人物たちであつた。樞東鎮（表一のNo17）に関して言うと、一九才の時に陸軍士官学校に入り、陸軍哨官・慶尚南道咸安郡守・巨文島僉使などを歴任した後、閔妃暗殺事件の關係で日本に亡命した。樞東鎮は、陸軍士官学校第一期卒業生であり、趙義淵の弟である趙義聞（表一のNo16）と同期生であつた關係もあり、趙義淵と親しい仲であつた。日本側の記録には、「吾々同志カ本国政府ヲ顛覆セントスルハ多年ノ希望ニシテ時機到来セハ或ハ貴国（日本を指す引用者）ノ援助ヲ得テ事ヲ挙クヘキ」と述べたという報告が残されている。また、呉世昌は一八九四年に内務主事となり、その後、議政府主事・工務部衙門参議・農商工部通商局長をつとめていたが、一九〇二年の兪吉濬陰謀事件の際に日本へ亡命した。この事件は、日本に亡命中

であつた兪吉濬（表一のNo3）が日本人らと共に謀して朝鮮の内政改革を陰謀した事件であるが、かつて兪吉濬の下で働いたことがある呉世昌はこの事件に関与して罪に定められ、一九〇二年七月に日本へ亡命した。日本亡命後、所持金も無く頼る術も無かつた呉世昌は、趙義淵の援助を受けて一時期彼の家に同居していた。このように樞東鎮と呉世昌は趙義淵と親しい間柄であり、孫秉熙は趙義淵を通じて彼らを知り、昵懇の仲になつていったと思われる。これ以後、孫秉熙は、趙義淵・樞東鎮・呉世昌の三名と共に、朝鮮人亡命政客の糾合運動と連動させる形で、朝鮮政府の変革運動を行つていった。

そして、一九〇四年二月に日露戦争が勃発すると、彼らは絶好の機会が到来したと考え、日本側の支援を得ながら亡命政客たちを糾合し、朝鮮政府の変革を促す運動を本格化させていった。この頃から、亡命政客たちは趙義淵を中心に頻繁に会合を重ねていった。日本側の記録を見てみると、「亡命韓人ハ日露開戦前後ヨリ互ニ相往来シ革命ノ時運到来シ韓廷当路ノモノト其位置転換ノ期遠ニアサルヲ祝スルハ一般ノ現状ニシテ就中趙義淵ヲ中心トシテ時々同人方ヘ会合スル：日露開戦ニ付テハ本国ナル親露派ヲ打破シ日本派内閣ヲ作ルヘシ」と話し合つていたとし、特に「亡命者中軍人派ニ属スル趙義淵ハ張博等ト共ニ此際帰国シテ相当ノ事ニ従ハント去ル十一日張博ハ参謀本部へ出頭又ハ兩名趙金応ヲ通弁トシテ同月同日三浦子爵ト会谈シタル」と報告している。その後も毎日のように多数の亡命客が趙義淵の自宅に集合し、「今回宣戦ノ詔勅公布トナリ日露開戦ニ至リタルニ因リ此好時機ヲ見計ヒ吾々亡命者ハ更ニ帰国ヲ迫ル考ヘナリ：日本ニシテ露ニ勝タハ本国政府ト雖トモ亡命者ニ対シ又迫害シ得サルヘシ」という話し合いをしている。彼らは、「趙義淵其他ノ亡命者会合ノ際露国ニ対スル日本海軍ノ勝利ヲ談シテ孰レモ賞賛シ而シテ吾々亡命者帰国ノ期モ遠キニ非ラスト期待シツ、アリ」とあるよ

うに、朝鮮本国への帰還のためにも日本軍の勝利を祈願し、そのために日本軍の対戦争協力を積極的に展開していこうとしたのである。

そして、孫秉熙は、趙義淵らが展開していた亡命政客の糾合運動に便乗する形で、日本軍部との関係を深めていく。日本側の記録を見てみると、日露戦争開戦直後の一九〇四年三月五日から一〇日にかけて、趙義淵が中心となって亡命政客が行った密議に孫秉熙も参加している。その期間中、趙義淵は宇佐川陸軍少将の自宅や杉村外務通商局長のもとを訪れ、孫秉熙も陸軍省に行つて宇佐川陸軍少将と面会している。特に孫秉熙については、「同人（孫秉熙を指す…引用者）カ今回軍事費トシテ一万円ヲ寄附シ赤十字社ヘ二千円ヲ寄附シタル上同人カ朝鮮国鎮南浦ノ倉庫ニ玄米六十万俵ヲ貯蔵シアルヲ売却セントスルモ此際ナレハ一応陸軍省ヘ交渉ノ上必要ノ有無ヲ確メテ後処置セントノ事ニシテ：宇佐川少将ノ電話ニ依リ陸軍省ヘ参省セリ」と記されている。また、同月九日にも、孫秉熙は趙義淵の自宅を訪れ、樺東鎮ら亡命客六名と会談した後、赤十字社を訪れている。さらに、日本側の記録には、このような趙義淵一派の動向について、次のように記している。「（趙義淵は）日露戦争ノ結果日本政府ハ韓国ノ独立ヲ維持スル態度ヲ取ルニ於テハ第一着トシテ亡命者ノ重立チタル者ヲ帰国セシメ内政外交ニ付テ刷新ヲ図ラサルヘカラストテ百方策ヲ講シタル結果李祥憲（孫秉熙を指す…引用者）ヲシテ軍資金ヲ献納セシメ且ツ軍隊ノ便宜ヲ計ラントノ口実ノ下ニ日本政府ノ欲心ヲ買ヒ以テ李ヲ介シテ其運動ヲ為」すに至つたと記している。これと関連して、「李祥憲ノ趙義淵一派ニ漸次金銭上ノ恩恵ヲ与フルハ亡命者誘出策ニシテ元趙義淵配下タリシ嚴達煥及李夏鍾ノ二人ヲ昨三十六年（一九〇三年…引用者）中韓国内府理事ニ採用セシメシハ李祥憲秘計ノ存スル事ナリ」という報告もなされている。趙義淵は元開化派官僚として朝鮮人亡命客のリーダー的存在であり、また日本の軍関係者の間にも人脈を有してい

た。彼はこれを利用して日本で朝鮮人亡命客の糾合運動を展開し朝鮮政府の变革を企てていた。一方、孫秉熙は、当時数十万の信徒を擁するといわれた東学の民衆的な組織基盤と豊かな財力を有していた。趙義淵は朝鮮人亡命客の人脈と日本陸軍へのパイプを提供し、孫秉熙は財力と東学による民衆的組織基盤を提供するという形で、互いを補いながら朝鮮政界の变革運動を展開していこうとしたわけである。日露開戦時に、孫秉熙が日本の軍人たちと接触し、日本陸軍省に一万円を寄附したことはよく知られた事実である。これに関して、天道教団側では、孫秉熙は「日露が開戦するなら、日露どの国が勝つのか知らなければならない。それを適中させた後、必ず戦勝国の側に加担し、共同出兵をしてこそ戦勝国の地位を得ることができる。その地位を得て後に講和談判に戦勝国の地位を利用して国家万全の条約を得なければならない」と孫秉熙は考え、そして日本がロシアに勝利すると予測して、日本に戦争協力をしたと説明している。しかしながら、孫秉熙による日本軍への献金は趙義淵が仲介・斡旋したものであり、朝鮮人亡命政客の帰国運動と連動して行われたものであったという事実にも留意する必要があるであろう。

六．孫秉熙と開化派亡命政客たちとの交流

日露戦争の開戦後、孫秉熙は東学教団の近代的改革に着手した。一九〇二年二月に進歩会を発足させ、李容九を会長として事務を統括させた。ちょうどこの頃、宋秉峻・尹始柄らが一進会（当初の名称は維新会）を発足させており、互いに議論しあつた末、一九〇四年一二月に合同して一進会とすることにした。この進歩会・一進会の運動をめぐることは、すでに先行研究において様々な議論がなされている。本稿では、留日亡命政客の糾合運動との連携に焦点を当てて、特に進歩会の創設について

考察してみたい。

先に述べたように、日本に亡命中の孫秉熙は一九〇四年二月に進歩会を組織させ、側近の李容九にその運営を主管させた。進歩会では、①皇室を尊重し独立基礎を確固とすること、②政府を改善すること、③軍政・財政を整理すること、④人民の生命財産を保護すること、という四綱領を制定して、東学徒たちに一斉に断髪黒衣を命じ、全国各地で示威運動を展開させた。これは独立協会の民会運動方式を導入して政府改革と国政刷新を訴えたものであり、天道教団側ではこれを甲辰開化革新運動と称している^⑧。この時、命令に従って断髪したものは二〇余万名に達した。その動向を注視していた韓国政府は、一九〇四年九月二〇日に東学を禁止し、集会を解散する措置をとっている^⑨。一方、日本陸軍の通訳官であった宋秉峻は、一九〇四年八月に独立協会の会員たちを包摂して一進会を組織した。宋秉峻は閔妃暗殺事件の際に日本へ亡命し、北海道で人參栽培をした後、京都に移って染織織物を学んだ。日露開戦に及び、大谷少将に従って朝鮮へ帰国し、軍事通訳として日本軍の機密に通じていた人物である。一進会は、駐韓日本軍の庇護下で、ソウルを拠点に断髪と国政の改革を訴えた。一進会は大衆の基盤や地方組織において脆弱であったために、進歩会の会長である李容九を説得し、表面上、趣旨が同じという事で、一九〇四年二月二日に進歩会を一進会に統合させた。

ところで、東学の民会組織として出発した進歩会の創設において、特に注目したいのは、趙義淵の朝鮮人亡命客糾合運動に深く関与していた事実である。これに関して、日本側には、進歩会が創設された時の内部事情について聴取した記録が残されている。この記録は、在全州群山分館主任の横田三郎が発信し、駐韓公使の林権助が受信したものである。一九〇四年一〇月一四日に、江景市内を巡察中の横田が東学党の集会を目撃し、二名の巡査を派遣して東学の首領から事情を聴取して記録した。

それによると、「本会ハ京城本部ニ於テハ一進会ト称シ其会頭ニ李容九副権鍾徳ヲ戴キ八道各地ノ支部ハ進歩会ト命名」したものであり、その趣意は「断髪ニ依リテ国政改革ノ標トス」ることであり、「我カ進歩会員ハ大挙京城ニ上リ表ヲ上リテ当局諸官ヲ免黜シ国政革新ヲ行ワント」し「順次会員ヲ募集シ八道同志ノ者共一齊ニ京城ニ至リ其主義ヲ行ハレサルニ於テハ直ニ現政府ヲ顛覆スヘシ」と述べている。さらに興味深いことには、当事者たちもその設立の目的をはっきりとは認識しておらず、「日本亡命韓客ノ他日漢城政界ニ立ツノ踏台トシテ此会ヲ組織シ陰ニ声援ヲ与ヘ居ルト云フ者アリ又一方ニハ往年東学党ノ余類日本ノ勢力ニ阿附シテ此間断髪ヲ行ヒ何等利スル処アル」などと、巷間には諸説紛々さまざまな噂が流れていることが記されている。また、この進歩会の示威運動は各地で展開され騒動となっていたようである。その後、横田は全州方面を視察して礪山郡衙で、「本月十一日黄登里ト称スル処ニ五六百名ノ韓人断髪シテ進歩会員ナリトテ集会演説シ居ルヲ全州觀察使ニ於テ探知シ」た。そして、「当地方ノ風説ニ於テモ亡命韓客趙義淵等其裏面ニアリテ彼等ヲ操縦スルニアレハ一二日本ノ同情ニ訴ヘントスルニ昂メ自然其主義トスル処ハ大ニ日本ニ信賴スヘシト標榜スルニアリトノ説」があることを知り、さらにその後、全州駐在古川巡査に詳細な調査を命じた。そして、同巡査より、亡命韓人の千章郁が全州在留の守永新三に宛てた私信を得た。千章郁は忠清道江景に在住した地方の名士であったが、兪吉濬が内務大臣の時に地方視察を命ぜられて好成績をあげた。それが縁となつて、一九〇二年に起こった兪吉濬の朝鮮内政改革陰謀事件に加担し、同年七月に呉世昌と一緒に日本へ亡命した人物である。日本亡命後は、呉世昌と共に、孫秉熙・趙義淵らと深く交わっている。一方、守永新三は、日本人としてこの陰謀事件に関与した協力者の一人である。両者とも孫秉熙・趙義淵ら一派の内情を熟知する者たちであり、この書簡の内容はか

なり信憑性の高いものと考えられる。その内容は、次の通りである。

此後日軍連戦連勝シテ露賊一人モ韓国ニ留ルモノナシ露公使モ徹去シ朝鮮半島日本ノ勢力中ニ包容ニ相成リ：此場合ヲ利用シテ亡命者ヲ帰国セシメ政治改革ヲ実施スル様ニ思テ居タ処今日迄テ何ノ動静モナク韓国ニ於テハ压制政治及暴虐官吏官爵売買昔日ノ如ク一事モ改革スルニハ実行無之故今年（一九〇四年…引用者）ノ六月ヨリ亦タ參謀本部ノ宇佐川氏及ヒ杉村氏及ヒ韓国事情ニ通スル当局者ヲ此ノ計劃ヲ相談シタ処当局者ノ返事ニハ東学徒ヲ起スト国内擾乱スル故当分ノ間待テ居レハ処分スル事有ルトノ話ニテ今日迄テ待テ居タケレトモ毫モ動静ナキ：今回ノ東学徒起ル事ハ手ニハ寸鉄モ持チ事禁シ只タ無刃血ノ為国心ヲ以テ京城ニ集会シテ政府ト談判シテ政治改革及ヒ民權ヲ自由ニ伸シ亦タ京城ニ政社ト云フモノ（貴国テハ衆議院ノ事ノ如シ）ヲ設立シ外国人ニハ妨害スル事厳禁トノ目的ニ御座候ヘ共小生ノ愚意ニハトテモ此事ハ成功スル事出来ヌト信シ候^⑧

このことから以下のことがかかる。すなわち、進歩会の示威運動は、自由民権運動として展開されたものであり、将来、中央政府に国会を創設することを想定していたものであった。そのために、日本に亡命していた開化派の官僚たちを朝鮮本国に帰国させ、朝鮮政府の刷新を図ろうしたのであった。このように、孫秉熙が展開した進歩会運動は、趙義淵らが展開した朝鮮人亡命政客の帰国運動と連動して行われたのである。なお、この書信には「孫、趙、呉、権ノ主謀者ハ初メヨリ此事ノ成効セナイ場合ハ一身ノ危険アル事覚悟ニテ居ル」とあり、「趙呉権三人モ自分一身ノ榮貴ナル為メニ非ス国家危亡ト人民塗炭ヲ憂慮シテ一身ヲ国家ノ為メニ犠牲シテモ人民ノ生命財産ト国土ノ保存スル事ヲ熱心熱涙ヲ以

四〇

テ運動シ」ているとし、「我政府ニハ主謀者ハ何人カ何処ニ居ルヤヲ解リマセンケレトモ貴政府ニハ当局者中三四人ハ承知致シ候」と述べられている。このことから、この運動の首謀者は、孫秉熙・趙義淵・呉世昌・権東鎮であり、さらに日本側にもこの策動について知る人物が数名いたことがわかる。また、これと関連して、日本側の記録には、「進歩会ノ総領ハ孫秉熙ト云フ人ニテ三四年前ヨリ当地ニ来リ趙義淵氏ト万事協議シテ進歩会ノ宣言書中四大綱領ト云フコト及會員ノ断髪シタコト及ヒ一切万事当地ヨリ京城ノ会長李容九ニ指揮シテ今年ノ六七月ヨリ今迄毎日電信及ヒ人ノ往復大變ニ混雜致シ候^⑨」という報告がなされている。

その後、進歩会及び一進会は、日露戦争中に日本軍を支援する活動を展開した。これは日本とロシアが雌雄を決するという国際情勢の中で、朝鮮の独立を維持するためには日本側を支援し、その庇護を受けながら機会を窺うしかないという、彼らなりの状況認識によるものであった。周知の通り、一進会は、京義線の鉄道敷設工事（一九〇四年一〇月～一九〇五年九月）に二〇余万の会員をほぼ無報酬で動員した他、日本軍のために北進輸送隊の軍需品運搬（一九〇五年六月～一〇月）を行うなど、戦争協力を惜しまなかった。一方、日本側は、日露戦争開戦時に日韓議定書（一九〇四年二月）を結んだ後、第一次日韓協約（一九〇四年八月）を締結し、いわゆる顧問政治体制を確立した。さらに、日露戦争が終結すると、一九〇五年一月に第二次日韓協約（乙巳条約）を締結して、大韓帝国を保護国支配した。その過程で、一進会を主管した李容九と孫秉熙との間に、時局に対する見解の相違が生じていった。ここで注意しておきたいのは、日本側の朝鮮支配が進行していく中で、孫秉熙を含む開化派の亡命政客たちは、あくまでも朝鮮の独立維持を目指していた点である。実際に、日本政府が第一次・第二次の日韓協約を通じて大韓帝国の外交権を侵奪していく過程で、孫秉熙らは、日本側の行為を何とか阻止しよ

うとする動きを見せている。これに関して、日本側の記録を見てみると、第一次日韓協約が締結される二日前の一九〇五年八月二〇日に趙義淵の自宅に孫秉熙と梁肅がやってきて、その後、孫秉熙・趙義淵・樞東鎮の三名が宇佐川少将の自宅を訪問している。その記録には次のように記されている。「李祥憲（孫秉熙を指す…引用者）ハ：趙義淵一派ヲ説キ：其主要トスル処ハ今後韓国ハ日本ノ保護ヲ受クルニ付テハ条件ヲ附シ永ク韓皇ノ地位ヲ保タシムルト共ニ韓民ヲシテ一日モ早ク文明的ノ行動ヲ執ラシメ独立思想ヲ起サシムルハ実ニ目下ノ急務ナルヲ以テ追テ独立協會設立ノ曉ハ一進会員ハ挙テ之レカ会員タラシメ韓国独立問題ヲ唱呼シ大ニ国民ヲ奮起セシムルノ趣意書ヲ配付セント昨今頻リニ口外シ居ルモ李（李祥憲即ち孫秉熙を指す…引用者）ノ心事ハ：右露国カ日本ニ対シ韓国ノ保護權ヲ承認スルニ至リシハ韓国ノ独立上ニ容易ナラサルノ影響ヲ及ホスモノニシテ黙止スヘキ秋ニアラスト亡命者ヲ煽動一致セシメントスル」と記している。この記録から、孫秉熙が、趙義淵らの朝鮮人亡命者糾合運動と連動しながらも、日本の保護国支配を何とか阻止しようとする動きを見せていたことがわかる。ちなみに、この頃はまだ、李容九は孫秉熙の腹心として働いており、孫秉熙は一進会の勢力を利用することができた。

一方、李容九の方は、乙巳保護条約が締結される二日前の一九〇五年一月五日に「一進会宣言書」を発表している。これは一進会の顧問であった佐瀬熊鉄が起草したものであるが、その内容は、「友邦の指導に順拠し、以て文明を進め独立を維持して可なり：外交の権を：友邦政府に委任し、其の力に依りて国権を保護するも亦、陛下大権の發進に外ならず：其（日本を指す…引用者）の指導保護に依り、国家の独立・安寧・幸福を永遠無窮に維持せん」とするものであった。このような一進会の動きに対し、朝鮮本国では、保守儒林や義兵たちを中心に反一進会・反東

学運動が展開された。この状況に危機感を抱いた孫秉熙は、乙巳保護条約で身の安全は確保できたと考え、一九〇六年二月（陰曆一月）に朝鮮本国へ帰国し、ソウルに天道教中央総部という看板を掲げて天道教を創立した。その後、本国に帰国した樞東鎮・呉世昌ら開化派の亡命政客とともに教団改革を行っていった。孫秉熙らは、東学本来の「補国安民」の趣旨に基づき国権回復と民族独立を目標としたが、これに対して、李容九と宋秉畯ら一進会派は、もはや日本側との連携無しには政治活動ができないと判断し、孫秉熙の命令を聞かなくなっていた。孫秉熙は一九〇六年九月二三日に李容九ら六二人を黜教（教団からの追放）処分に付した。一進会派として追放された六二人は、別に侍天教という教団を設立し、李容九がその教主に就任した。このように様々な思惑を抱いた政治グループが複雑に入り乱れていた時代状況の中で、羅喆は日本を訪問した。そして、趙義淵と孫秉熙らが展開していた政治運動に関与していくことになるのである。以下では、羅喆の訪日活動の内容について詳しく考察してみる。

七．羅喆の第一次訪日と民間外交

羅喆は、一九〇五年七月から一九〇九年一月の間に合計四回日本に渡って政治活動を行った。ここではまず、羅喆が行った第一次訪日活動の内容について考察してみる。

羅喆の第一次訪日活動に関しては、朝鮮側の様々な資料に関連記事が掲載されている。その中で、羅喆の友人でもあった鄭喬が著した『大韓季年史』に最も詳しい記事が残されている。その内容を要約すると以下の通りである。羅喆が最初に日本を訪問したのは一九〇五年七月のことであった。当時、日露戦争が日本側の優勢で終局を迎え、戦争処理を行

う講和会議がアメリカのポーツマスで開かれようとしていた。そのことを知った羅喆と呉基鎬は、この講和会議に朝鮮から使節団を派遣することを李夏榮外部大臣に建議した。しかし、李夏榮はこれを許可しなかった。そこで羅喆らは、講和会議に参観するために自ら渡米することを試み、外部（当時の外務省）に旅券の申請をした。しかし、李夏榮の非協力と日本公使林権助の妨害によって適わなかった。そこで羅喆は、呉基鎬・李沂・尹柱賛らの同志と共に、ひとまず日本へ渡り、日本からアメリカへ向かう計画を立てた。羅喆ら一行は一九〇五年七月二六日にソウルを出発した。

日本へ到着した彼らは米国行きを目指した。しかし、当時の日本では朝鮮人のアメリカ渡航を認めていなかった。彼らは仕方なく東京に滞在して日本政府の動向を探ることになった。羅喆らは八月に日本総理大臣・枢密院長・貴族院・衆議院及び大隈重信に書簡を送り、東洋の大勢や日韓関係について説いた。しかし、一九〇五年九月五日にポーツマス条約が締結され、日本は大韓帝国に対する優越権をロシアから承認された。その後、日本が朝鮮を保護国とする乙巳条約（第二次日韓協約）が締結されようとした。その直前に、羅喆らは日本の各種新聞を通じて、条約締結のために伊藤博文が特派大使となつて朝鮮へ渡ることになったことを知った。羅喆は、乙巳保護条約が締結される直前の十一月三日に伊藤博文へ書簡を送り、日本が朝鮮の独立を侵害することは即ち東洋の平和を妨害することであると訴えた。さらに、彼は天皇にも書簡を送つて、日清戦争および日露戦争の際に天皇が発した詔勅で「朝鮮の独立」を謳ったことを述べながら、日韓両国間の信義を守るように訴えた。羅喆が日本の政治家たちに書簡を送つて朝鮮の国権回復を訴え、乙巳保護条約締結を阻止しようとしたことは朝鮮の新聞にも報道された。それまで羅喆は無名に近い運動家であつたが、これによって彼は朝鮮の独立運動家たち

の間で一躍有名となった。

しかし、朝鮮の一民間人に過ぎなかった羅喆らの訴えが聞き入れられるはずはなかった。同年一月一七日に乙巳保護条約が締結されたことを聞き知った羅喆ら一行は、互いに慟哭し合い、数日間食べ物が何も喉に通らないほどであつた。その後、羅喆らは政治家の松村雄之進と面会した。松村雄之進は東洋平和論を説き、伊藤博文による乙巳保護条約締結を「王道ではなく霸道である」と歎きながら、羅喆らに対して、「韓国はただ自励自強すべきであり、自立自由となるには必ず天が助けてくれるだろう」と慰めた。こうして羅喆ら一行は翌一九〇六年二月に失意のうちに帰国した。以上が『大韓季年史』に記されている内容である。

一方、日本側当局が密偵を使つて行つた調査報告書には、それとは異なるより詳細な行動記録が残されている。日本側の記録によると、羅喆・呉基鎬・梁瀟の三名が、「表面上本邦ノ制度文物視察ノ為メト称シ其内実亡命者趙義淵・張博等ト密会ノ為メ在東京李祥憲ノ招ニ依リ」日本へ渡つたと記されている。その際、一九〇五年七月二六日に羅喆・呉基鎬・梁瀟の三名がまず日本へ出発し、次いで同年九月に李沂と洪弼周がその後について出発し、日本で合流したと報告されている。先に述べた通り、李祥憲は東学の第三代教主孫秉熙のことであり、趙義淵と張博は一八九七年に日本へ亡命した開化派官僚たちである。つまり、羅喆は、東学の教主であつた孫秉熙の招待を受けて、日本に亡命していた元開化派官僚の趙義淵・張博らと会うために日本へ渡つたというのである。ここで注目したいのは、羅喆と共に日本へ渡つた梁瀟という人物である。彼は梁漢默（一八六二—一九一九）のことであり、羅喆と同じく全羅南道海南出身の東学（天道教）徒であつた。梁漢默は、一八九四年に度支部主事となつた後、綾州税務官をつとめた。その後、一九〇二年頃に日本で孫秉熙・樵東鎮・呉世昌らと出会い、進歩会の創立に参画した。しか

し、彼は一進会の運動には関わらず、独立協会の会員であった改新儒林の李備・尹孝定らと共に、一九〇五年五月に憲政研究会を組織した。この憲政研究会は、親日路線を強めた一进会に対抗して設立された愛国啓蒙団体であり、一年後の一九〇六年四月に大韓自強会として拡大・再編された団体である。そしてまた、羅喆の第一次訪日旅行に同行した李沂・洪弼周も、梁漢黙と同じ全羅南道出身者であり、憲政研究会・大韓自強会のメンバーであった。羅喆の第一次訪日旅行において、同行者の呉基鎬・李沂・洪弼周らを含め、孫秉熙のグループに面会をさせようとしたのは、おそらくこの梁漢黙であったと考えられる。日本側の記録を見ると、羅喆ら一行は、同年一〇月九日から一二日まで東京を離れて千葉県北条町を訪れているが、その理由は「李峻鎔ヲ訪問セルモノ」と報告されている^⑤。先に述べた通り、李峻鎔は大院君の嫡孫である王族として、趙義淵らが朝鮮人亡命者グループの長として戴いた人物である^⑥。このことから、羅喆の日本訪問が、李峻鎔・趙義淵・孫秉熙らが推進していた朝鮮人亡命客による朝鮮政府の変革運動と合流するために行われたものであったことがわかる。

これに関して、ちょうど羅喆ら一行が日本を訪問していた頃の記事として、日本側の記録には次のような興味深いものが残されている。すなわち、乙巳保護条約が締結される二・三日前の一九〇五年一月一四日から一五日にかけて、「韓国一进会地方会長以下十二名人京麻布区我善坊町三十八番地李祥憲（孫秉熙を指す…引用者）方へ止宿セリ滞在ハ一週間位ノ予定ナリ」と報告されている^⑦。この時、一进会地方会長の李容九をはじめ、一進会の錚々たるメンバーが孫秉熙の自宅に宿泊している。また、同月二一日と二六日にも、一進会員らが孫秉熙の自宅に宿泊している^⑧。さらに、「李祥憲（孫秉熙を指す…引用者）方滞在中ノ一進会員李容九ノ一行ハ…李祥憲同伴ニテ亡命韓人趙義淵方ヲ訪問^⑨」したとあるよう

に、一进会会長の李容九が孫秉熙に連れられて趙義淵の自宅を訪問しているのである。日本側の記録には、この時、孫秉熙・趙義淵ら開化派亡命者と李容九ら一進会員たちがどのような会話をしたのかは記されていない。ただ、ちょうどこの頃、一九〇五年一月五日に李容九らは、日本に保護国請願を求める内容の「一进会宣言書」を発表している。これに對して、天道教団側の資料には、孫秉熙は緊急に李容九を呼び、宣言書の発表に對して嚴重に諫めたとされている。これに對して、李容九は「大韓をして日本の保護を受けさせてから徐々に完全独立をしようという時宜から出たものである」と言う、孫秉熙は「保護を受けようとするならば独立を棄てなければならず、独立をしようとするれば保護を棄てなければならぬ。どうして保護という名のもとに独立をしようとするのか」と歎いたとされる^⑩。また、日本側の記録の中で、一九〇五年一月二八日の記事には、一进会員のメンバー十余名の動向を記す中に、洪弼周と呉基鎬の名前があげられ「洪弼周・呉基鎬ノ兩名ハ去ル二十三日帰国ノ途ニ就キタルモ呉基鎬ハ来月十五日頃再ヒ渡来ノ筈ナリト云フ」と記されている（ちなみにそこには羅喆の名前はない）。このように、乙巳保護条約の締結を挟んだ前後数日間の時期に、李容九ら一进会の幹部陣が日本の孫秉熙の自宅に総動員していた。まさにこのような時期に、羅喆は、孫秉熙の招待を受けて日本へ渡り、この一进会の動きの中に関わっていたのである。

また、羅喆ら一行が朝鮮人亡命客のリーダー格であった趙義淵・張博・李峻鎔らと接触した事実にも注目すべきであろう。先に述べたように、ちょうどその頃日本では、趙義淵・張博ら一派が李峻鎔を戴いて朝鮮人亡命客を糾合する運動を展開し、さらにその運動と連携しながら、孫秉熙が東学系の民間団体である進歩会・一进会を通じて朝鮮政府の変革を図ろうとしていた。そして、日露戦争の進展とともに第一次日韓協約が

結ばれ、さらに朝鮮の外交権を奪う第二次日韓協約（乙巳保護条約）が締結されようする過程で、彼らは日本側勢力に協力しつつも、何とかして朝鮮の独立を維持しようと試みた。朝鮮側の資料によると、羅喆の訪日目的は乙巳保護条約の締結阻止にあったとされるが、羅喆はただ日本政界の要人たちに書簡を送って条約締結の反対を訴えただけではなく、趙義淵・張博・孫秉熙らが日本で展開していた朝鮮政府の変革運動と連携しながら、乙巳保護条約の締結阻止を試みようとしたのではなかったかと考えられる。

そしてまた、羅喆がこれら朝鮮の亡命政客たちと接触したのには、他にも目的があったと考えられる。それはまさに、流配の身となっていた金允植の解放と政界復帰であった。実際、この時期の金允植の日記を見ても、次のような興味深い記事が記されている。すなわち、一九〇五年八月一五日の条を見ると、金允植のもとに一進会会員の梁柱永がやって来て、一进会会長の朴仁和の書簡を手渡しながら、来たる八月一八日に行われる一进会の記念式会に参加を要請したことが記されている。この時、金允植は流配の身であるとしてこれを断っている。その翌々日の一七日の条には、一进会の創立一周年記念を祝して全国各地で宴席が設けられ、咸平・務安・智島においても百余名の人々が陸続と一进会に入会し、村で記念の宴会が行われたことが記されている。^⑧このことから、金允植が一進会の会員たちと連絡を取り合う関係であったことがわかる。また、一进会の代表格である宋秉峻は次のように語っていたとされる。すなわち、「現今韓国の大改革を執行するに足るべき人物に三人あり。曰く金允植、曰く李逸植、曰く李完用なり。姑く三人を品隲すれば、金允植は寛厚の君子にして、内外に信用せられしこと開国以来比類なし、明治二十九年外部大臣たりしとき、閔妃を廢する詔を草せしを以て貶せられて済州島にあり。信用上よりすれば此人に若くものなし」と

四四

語っていた。さらに、注目したいのは、ちょうど羅喆が日本を訪問していた時期に、日本側が朝鮮政府に金允植の解放を訴えていた点である。すなわち、一九〇五年八月三一日の条を見ると、日本公使の林権介が金允植に特赦を与えて朝鮮政府の枢要に任命するように要請しているのである。^⑨結局、この上奏はかなえられなかったが、この前後の記事内容を考慮すると、日本に亡命していた元開化派官僚や一进会の会員たちが、日本の要人たちに金允植の解放を働きかけていた可能性は大きいと考えられる。^⑩日本に亡命した朝鮮の開化派官僚も済州島・智島へ流配された金允植も、もともとは閔妃暗殺事件への関与という共通の罪によって朝鮮政界から追放されたものであった。そのことを考えると、趙義淵らが日本で展開していた朝鮮人亡命客の糾合運動は、金允植の政治的解放運動と繋がっていたと考えられる。そしてまた、趙義淵が展開していた朝鮮人亡命客の糾合運動が、孫秉熙らの進歩会・一进会運動と連動して行われていた事実を考えると、一进会の会員たちが金允植の解放運動に関与していたと考えてもおかしくはない。今回の羅喆の訪日滞在は、約六ヶ月にも及ぶものであり、その間、乙巳保護条約の締結反対運動だけをしていただけではないであろう。羅喆らは裏で金允植の政治的解放のための運動をしていたものと考えられる。しかし、その活動は功を奏しなかったようである。これに関して、金允植の日記を見てみると、金允植は一九〇六年一月二四日に羅喆と呉基鎬から手紙を受け取っている。そこには、資金が欠乏して羅喆らが帰国できず、東京に留まっている旨が記されており、それに対して金允植は、彼ら一行の情勢が憂慮すべきものであると記している。^⑪このことから、金允植が、羅喆らの日本行きに関して周知しており、運動のための資金が尽きてしまったにもかかわらず、日本で何の成果もあげられなかったことがわかり、その状況を非常に憂いたことが窺える。

八・羅喆の第三次訪日と大陸浪人たちとの交流

第一次訪日活動を終えて帰国した羅喆は、その後、再度日本へ渡っている。この第二次訪日に関して、日本側の調査報告書には記録がまったくない。しかし、羅喆の親筆履歴書には「四三六三年（西暦一九〇六年、引用者）丙午五月十二日再往日本九月五日三往日本…」と記されている。ここに記された五月一二日は陰暦であるので、陽暦に換算すると七月三日となり、同じく九月五日は陰暦であり陽暦に換算すると一〇月二二日となる。従って、この履歴書によると、羅喆は一九〇六年七月三日に第二次訪日旅行に出かけ、同年一〇月二二日も第三次訪日旅行に出かけたことになる。これに関して、金允植の『統陰晴史』を見てみると、一九〇六年七月九日（陰暦五月一八日）に羅喆の妾が亡くなり羅喆は身を託すところがなく孤独になったと記されており、さらに、一九〇六年九月二七日（陰暦八月一〇日）には、羅喆が日本から帰国したことを知らせる書簡を受け取ったという記事が記されている。以上の記事を総合すると、一九〇六年七月三日に第二次訪日旅行に発った後、妾が死去したために、急遽九月二七日に帰国し、葬儀などをとりおこなった後、すぐに一〇月二二日に第三次訪日旅行に旅立ったものと考えられる。羅喆の第二次訪日活動に関して、朝鮮側の資料にも日本側の資料にも記録がないのは、羅喆が日本へ到着するやいなやすぐ朝鮮へ帰国したために、日本では何の行動も行わなかったからであると考えられる。

その後に行った、羅喆の第三次訪日活動に関しては、朝鮮側の記録と日本側の記録ともにその足跡を詳しく記録している。両者の記録とも、羅喆の訪日目的は、日本の政治家たちと面会して、乙巳保護条約の撤廃を談判することであったと記している。以下ではまず朝鮮側の記録について述べた後、日本側の記録について見てみたい。

羅喆の第三次訪日活動に関しても、朝鮮側の資料の中で、『大韓季年史』が最も詳細な記録を残している。その内容を要約すると以下の通りである。一九〇六年一〇月に、羅喆・呉基鎬・康基煥は日本で国会が開かれることを知り、日本の対韓方針について調べるために日本へ渡ることと決めた。訪日の費用は康基煥が出した。羅喆・呉基鎬・康基煥は一九〇六年一〇月二〇日に東京へ到着した。羅喆ら一行はまず松村雄之進を訪問した。その後、松村の勧めによって岡本柳之助と頭山満に会い、世界の大勢や東洋の時局情勢について論じた。特に松村は羅喆や呉基鎬と意気投合し、互いに肝胆相照して話し合った。松村は羅喆と呉基鎬に言った。「前年に行われた伊藤博文の対韓政策には疑念が無いわけではない。しかし、今日もう既に確立してしまったものであり、韓国人にはどうすることもできない。私は二君の才能と志を甚だ惜しむ。この非常の時に当たっては、非常の権力を用いるべき」である。このように述べた後、松村は韓国統監府顧問である内田良平に紹介すると申し入れた。これに対して、羅喆と呉基鎬は、「吾等は功利を求めて富貴に垂涎するものではない」としてこれを固辞した。これに対して、松村は彼らのことを「堂々たる義士」とであると評した。その後、伊藤博文が韓国から東京へ戻って国会に参加したが、その際、李址鎔が韓国から報聘大使として招聘され、韓国皇帝の親書が日本の天皇に伝えられた。日本の各新聞では、伊藤博文の功を称え、韓国の内政と外交はこれで進歩すると報じられた。羅喆らはこれを見て、「日本の勅約によって外交権を奪われた今日において、親善・内政を論じるのは自亡自滅も甚だしい」として号泣した。こうして、羅喆らは一九〇六年二月二五日（陰暦一月一〇日）に何の成果も得られないまま帰国の途に就いた。以上が『大韓季年史』に記された羅喆の第三次訪日活動の概要である。

一方、日本側の調査報告書にも、羅喆の第三次訪日活動に関する記録

が残されている。まず、統監府側の記録には、羅喆の第三次訪日の理由を次のように記している。すなわち、羅喆は乙巳保護条約の締結によって「三千里ノ疆土遂ニ日本ノ有タラントスルノ趨勢アルヲ以テ之ヲ救済スルノ道ニ窮スルノ余リ再ヒ日本ノ志士ニ頼リ其政策ヲ一変セシメントシ三十九年九月更ニ日本ニ航シ岡本抑之助・松村雄之進・内田良平等ヲ訪ヒ自分等國ヲ思フノ衷情ヲ訴ヘタルモ時機ニアラスト為シ何等ノ得ル所ナク快々トシテ空シク帰途ニ就ケリ」と記している。一方、密偵を使った調査報告書の内容は、朝鮮側の記録と若干異なるものとなっている。以下、朝鮮側の記事と異なる部分を中心にとめてみると次の通りである。第三次の訪日は羅喆・吳基鎬・康達天の三名で行われ、羅・吳の二名は觀光のため、また康達天は商業視察のためと称して、一九〇六年一月一〇日に東京に至り、麹町区富士見町一丁目松葉館に投宿し、同月一五日に三名は相携へて千葉県北条に滞在する李竣鎔を訪問し、一七日に東京へ戻った。その後、同月一九日に康達天が帰韓の途について、羅・吳の両名はそのまま日本に残った。ここでは、羅喆らが再び、王族の李竣鎔のもとを訪問している点が注目される。

その後、羅喆と吳基鎬の両名は一月二九日に岡本柳之助を訪問して終日談話を交わした。羅喆と吳基鎬は、「自分等ハ元韓國外部大臣金允植ノ門弟ナリ願クハ面会ヲ容レラレタシト申入レタ」ところ、「金允植ハ岡本カ十年以前渡韓ノ際知人ナルヲ以テ直チニ面会シタ」。羅喆らの日本語が不十分であったために筆談を交わしたが、筆談では時間がかかるので、岡本は後日通訳を連れてくるように申しつけた。その二・三日後に、羅喆は通訳を連れて岡本を再訪し、朝鮮の独立問題について話し合った。岡本は彼等に対し「韓國独立ノ事ニ就テハ明治六年頃ヨリ自分等カ企望シタル処ナルモ種々ノ障害アリテ目的ヲ達セス」とし、「其後日露ノ關係上止ムヲ得ス韓國ヲ保護國トシタ」とし、「到底貴國目下ノ状態ニテハ独

立ヲ望ムカ如キハ不可能ナル事柄」であり「伊藤統監カ将来貴國ヲ永遠ニ維持スル方針トシテ種々ノ政策ヲ講セラレツ、アル上ニ就テハ諸君等モ大ニ感謝セサル可カラス」と述べた。これに対して、羅喆らは「日本カ再ヒ露國或ハ清國ト戦端ヲ開ク暁ニ於テ韓國力貴國ニ反抗セハ如何セラル、ヤト反問」すると、岡本は「日本ハ韓國ノ如キハ毫モ眼中ニ置カス唯々韓國ヲ独立若クハ吾保護國トナスハ寧ロ日本ノ自衛」であると言いい、「諸君ニシテ自國ヲ思フハ自分等モ大ニ同情ニ堪ヘサル処ナルヲ以テ将来ハ大ニ講学ノ途ヲ開クヲ必要トスル旨」を示した。これに対して、羅喆らは敢えて反論をせずに退却した。さらに、日本側の記録には、彼らが「岡本ニ面会ヲ求メタル目的ハ岡本ハ現内閣ト反対ノ意思ヲ懷キ居ルモノト想像シ多少同人ノ力ヲ頼ミトシ再ヒ独立ノ道ヲ開カントノ意志ニテ来訪シテルモノニシテ伊藤統監目下ノ對韓政策ニ就テハ将来韓國ニ大不利益ヲ来スノミナラス自然日本ノ属邦ナルヲ氣遣ヒ今回渡来シタルモノ」であると記している。以上が、日本側の報告書に記されている内容である。

朝鮮側と日本側の記録に若干の違いがあるものの、いずれの資料においても、第三次訪日の際に羅喆が頭山満・岡本柳之助・松村雄之助ら日本の大陸浪人たちと面談をした事実を伝えている。この第三次訪日が行われた時期は、すでに乙巳保護条約が締結された後であり、日本の朝鮮支配が日々強化されつつあった時期であった。このような状況下で、羅喆は日本の在野で活躍していた大陸浪人たちを通じて、日本の朝鮮政策を変換させ、朝鮮の国権回復と民族独立を維持しようと試みたわけである。このように、羅喆が日本の大陸浪人たちと面会することができたのは、岡本との面談内容からも分かる通り、師である金允植の交友関係を通じてであったと考えられる。実際、羅喆が日本で面談をした人士は、すべて金允植が親しくしていた玄洋社系の大陸浪人たちであった。先に

述べたように、岡本柳之助は頭山の玄洋社グループに連なる人士であり、閔妃暗殺事件の主犯格であった。彼はまた、閔妃暗殺事件において行動を共にしたこと、金允植と昵懇の間柄であった。また、岡本は朝鮮の若者に対して親近感を抱いていた。玄洋社側の資料をみると、岡本は「明治十六（一八八三）年に渡来せる朝鮮留学生十七名が学資杜絶して進退に窮せし時…之を自宅に引取って保護を与ふる等徐ろに機会の熟するを待った」と記されている。このような過去の経緯もあって、岡本は羅喆らの面談要請に快く応じたものと思われる。

また、松村雄之進も玄洋社系の人士であった。松村雄之進は、一八七一年に長州藩の名士大楽源太郎を暗殺した罪で、禁獄七年の宣告を受け広島島の監獄に服役した。日清戦争時には、陸軍省雇となつて台湾に渡り、一八九六年台湾総督府が開設されると新竹支庁長・雲林支庁長に任ぜられて開拓事業に従事した。その後、一八九七年には北海道宗谷支庁長に任用され三年間つとめた。一九〇二年には福岡県選出の衆議院議員となつたが議会の解散に遭い、それ以来、議院政治家の道を断念し、民間の志士として国事に奔走した。松村は頭山満の玄洋社グループに連なる人物であり、羅喆が松村と面会できたのも「金允植―岡本柳之助―松村雄之進」というラインを通じてであつたと考えられる。松村は羅喆と意気投合したようであり、羅喆の第一次・第三次・第四次の訪日活動の際に面会を行っている。特に第四次訪日の際に、羅喆は松村の全面的な支援を受けている（これに関しては後で詳述する）。

このような金允植の人脈を通じて、羅喆がわざわざ日本の大陸浪人たちと接触しようとしたのは、彼らが所謂「アジア主義」の思想を唱道していたからだと考えられる。これに注意しておきたいのは、羅喆およびその同志である呉基鎬・李沂らは、旧韓末に展開された愛国啓蒙運動に従事しており、開化思想を受け入れて、日本と中国と朝鮮の連帯

を目指すアジア主義（朝鮮側では「東洋主義」と称した）の思想に賛同していた点である。羅喆は、日本の対韓政策を非難してそれに反対する運動を展開していたが、それは朝鮮の保守儒林たちが衛正斥邪思想を唱えて頑固な排日主義を訴えたのとは本質的に異なるものであった。羅喆はむしろ文明開化の重要性を認識し、アジアにおける日本の政治位置を考慮しつつ、日本の支援を受けながら朝鮮の独立を図っていくしか方法はないと考えていた。羅喆が日本の批判をしたのは、日本が表面的にはアジア連帯を唱えながらも、実際にはそれを実行に移していないことに苛立ちを感じたからであった。これに関して、統監府文書には、「羅寅永・呉基鎬ノ二名ハ：東洋ノ平和ヲ保チ韓国ノ独立ヲ全フセンカ為メ日清韓鼎立協同シ以テ対外ノ策ヲ樹ツルノ意見ヲ懷抱シ往年漢城ノ政界ニ露国ノ勢力全盛ヲ極メタル時ノ如キ憤慨ニ堪ヘサルモノアリ日露釁ヲ醸スヤ日本ノ宣戦ハ韓国ノ独立ヲ保障スルニ在ルヲ以テ只管日本軍ノ戦勝ヲ祈リタリ」と記している。また、羅喆の第一次訪日の目的についても、「東洋平和ノ為メ日清韓三国同盟及韓国ニ対シ善隣ノ交誼ヲ以テ其独立ヲ扶助スヘシトノ意見書ヲ携ヘ各大臣ヲ歴問」するためであつたと記している。②。実際、第一次訪日活動の際に、羅喆らが日本の政界人に送った書簡は、すべてアジア主義の立場から、日本と朝鮮の対等な連帯と朝鮮の自主独立を訴えるものであった。

しかし、羅喆がアジア主義による日韓の連帯という理想を日本の大陸浪人たちにいくら説いても、日本帝国主义による朝鮮支配の趨勢を止めることはできなかった。確かに、羅喆が面会した岡本柳之助や松村雄之進を含め、頭山満や内田良平は当時の日本を代表するアジア主義者たちであった。しかし、当時の日本の日本の大陸浪人たちは、日本政府とは一線を画す行動をとっていたとは言え、彼らが主張したアジア主義とは、日本を盟主としてアジア諸国が一丸となり欧米列強に対抗するという内容の

ものであり、それは日本帝国主義によるアジア支配を民間の立場から下支えするものに他ならなかった。このことは、羅喆が接触した玄洋社系の人士たちが、この時期に実際にとった行動からも明らかである。とりわけ玄洋社系人士の中で黒龍会を主管していた内田良平は、この時期、日本の朝鮮支配を加速化させる動きを展開していた。一九〇五年十二月に韓国統監府が設置されると、内田は朝鮮の国情調査などの名目で統監府の顧問として招聘された。翌一九〇六年一月には一進会の顧問に就任し、李容九や宋秉畯らを懐柔して一進会を親日団体に作りかえ日韓併合の素地を作った。また松村雄之進は、内田良平が一九〇九年一月に結成した朝鮮問題同志会に参加している。^{②③}この会は、対露同志会の会員たちを中心に結成されたものであり、日韓合邦を日本の世論に喚起することを目的とするものであった。一九〇九年十二月三日には東京で八〇〇名の参加者のもとに朝鮮問題有志大会を開き、対韓問題の根本的解決（すなわち日本への主権譲渡）を訴えている。^{②④}これに関して、内田ら大陸浪人たちは、樽井藤吉の『大東合邦論』などを根拠に、日本と韓国の対等な合邦（いわゆる「政合邦」）による「日韓合邦」を唱えていたとされる。しかし、一九〇七年六月にハーグ密使事件が起こったが、その際に玄洋社の人士たちは、頭山満らを先頭にして「この機に乗じ朝鮮問題の根本的解決を図るべし」と主張し、日本政府に次の様な建議書を督促した。その建議書の内容は、「第一条、韓国皇帝をして主権を我帝国に禅譲せしめ日韓両国を合併すること。第二条、韓国皇帝をして其位を皇太子に譲らしめると同時に其統治権を我帝国に委任せしむること」というものであった。

さらに、この頃の頭山満の動きについて見てみると、彼は亜細亜義会というアジア主義団体の設立に関与している点が注目される。この団体は、犬養毅・頭山満・大原武慶・河野廣中・中野常太郎・山田喜之助・

青柳勝敏の七名が発起人となって一九〇九年六月に設立されたもので、『大東』という機関誌を発行した。またこの団体は、日本のアジア主義者とムスリムの連帯を主導した中野常太郎が、一九〇九年に来日したトルコ系タール人のアブデュルレシト・イブラヒムを頭山満や犬養毅らに紹介したのが契機となつて発足されたものである。^{②⑤}この団体は「全アジアの一致団結」を目的としたものであり（「亜細亜義会設立主意」による）、『大東』という機関誌を発行した。この雑誌の名称は、樽井藤吉が『大東合邦論』で提示した「大東国」を意味するものであると思われる。しかし、その内容を見てみると、「皇国日本は亜細亜の盟主」であり、清国は欧米に頼るのではなく日本と連盟をすべきであり、「清国にしてよく大覚醒せんか南亜細亜、中央亜細亜、西亜細亜の各邦は亦之に応ぜむ：機熟せば我邦は盟主と為つて天下に号令せん：起てよ亜細亜十億萬の民衆、覚醒せよ亜細亜十億萬の民衆」と訴えている。また、「我皇国は：世界に無比な神聖なる神国にして万世一系の皇統たる天皇の御意に即かせ玉ふ有難き玉の如き結構なる清き国」であると主張し、一九一〇年の韓国併合に関して、「我が天皇陛下の御盛徳に由つて遂に韓王の請願を容れさせ玉ひ、朝鮮を併合し、日韓一国と為り：親しく我が天皇陛下の臣民として、その天覆地載の餘慶に頼ることを得さしめ給へり」とし、「日韓併合して：我日本は大陸に頭部を出しぬ：日韓併合は我邦神代以来の問題を解決した」と述べている。

また、金允植の親友であり、羅喆が渡日の際に頼った岡本柳之助に関しても事情は同じであった。当時の岡本は、政界での活動を活発に行つてはおらず、宗教に傾倒していた。もともと岡本は仏教に関心を持っており、^{②⑥}一八八五年に仏教の衰頹を憂いて、日蓮宗大僧正新居日薩のもとに師事し仏教研究に従事した。また同年に教報社を設立して日蓮宗教報を発行し仏教の宣伝流布を図り、翌一八八六年には仏教挽回のための意

見書を作成して日蓮宗各派管長に提出した。^⑧さらに岡本は、一八九八年に新井日薩らと図って宗教調査を行い、翌年に国会で審議されていた宗教法案を否決させ、『政教中正論』を著して同志に配布した。^⑨彼の主張は、本地垂迹説の立場から仏教と神道を融和すべきであるというものであった。『政教中正論』でも、神仏分離令によって「本地垂迹神仏不二の深奥なる教理」を排斥したとして、政府の宗教政策を批判している。^⑩また、岡本は同年（一八九九年）五月に自ら大会長として全国仏教大会決議案を起草している。そこでは、「皇祖皇宗ノ道義ヨリ之ヲ論ズレバ則チ忠道個人ノ安心ヨリ之ヲ觀ズレバ則チ日本魂ニシテ実ニ国家ノ進歩平和ノ源泉ナリ：仏教各宗ガ我日本ノ国体ト合用シテ国家ノ進歩平和ノ功績ヲ奏シタル」というように、日本の「国体」と合致し「日本魂」を根本とする仏教の振興を訴えている。岡本の晩年には、自宅に「三種の神器を如來が捧げて居る像」を飾り、「日本は神国である。一系の天皇榮え在してこそ仏教も行はれる」と主張していたとされる。^⑪

このような事実からも分かる通り、玄洋社系の人士たちが主張するアジア主義とは、天皇を奉戴した皇国日本がアジアの盟主となってアジアを一つに統合するというものであった。周知の通り、もともと玄洋社は西郷隆盛の征韓論を受けて大陸進出を主張し、金玉均が暗殺されると、彼らはその怨みを晴らすべく「日韓合邦」を最終目標として、朝鮮半島における日本の帝国主義支配を拡充させる運動を展開した。一介の民間人の立場から朝鮮の国権回復と自主独立を目指した羅喆の訴えが、このような日本のアジア主義者たちに聞き入れられることはなかった。むしろ、羅喆らの行為は、日本の大陸浪人らの興亜主義運動に懐柔される機会を提供することにもなりかねないものであった。その意味で、羅喆のといった行動は、あまりにも非現実的で樂觀的な行動であったと言わざるを得ないであろう。

九．羅喆による乙巳五賊暗殺未遂事件

第三次訪日活動を終えた羅喆は、乙巳保護条約締結に賛成して認可した五大臣の暗殺を画策した。その五大臣とは、李完用（学部大臣）、朴斉純（外部大臣）、李根澤（軍部大臣）、李址鎔（内部大臣）、権重頭（農商工部大臣）の五人のことで、当時の朝鮮人たちの間では「乙巳五賊」と呼ばれていた。羅喆は同志たちを糾合して、この乙巳五賊（完国五大臣）を一気に暗殺する計画を立て、周到な準備のもとにそれを実行に移したが未遂に終わった。この事件は、当時の朝鮮政界を震撼させた事件であり、各種の資料に詳しい記録が残されている。^⑫それらをもとにこの事件の概要をまとめると、次の通りである。すなわち、五大臣の暗殺に際して、羅喆はまず同郷の全羅道出身の憂国志士たちを中心に自新会を設立し、二〇〇余名の会員を募って団結を図った。また、趣旨書・愛国歌・同盟書・斬奸状などを作成して、嶺南地方と湖南地方の同志たちに配布し、決死隊員を募集した。挙事の日時を一九〇七年三月二十五日午前一〇時とし、各大臣が出仕する途上で一斉に暗殺を図ることにした。当日、決死隊員たちは、まず中署寺洞で人力車に乗って通行した軍部大臣権重頭を発見し拳銃を発射したが、命中させることができなかった。その時、隊員の一人がその場で日本巡警に逮捕されてしまい、その後、政府転覆の罪名で一九名が続々と逮捕された。同志たちが次々と逮捕されるのを見るに堪えかねず、羅喆は自ら自首し、結局一〇年の流刑を宣告されて、智島に流配されることになった。

この事件については、数多くの先行研究の中で詳細に論じられているので、本稿では詳述を避ける。ただ、従来の研究で看過されてきた事実について述べておきたい。それは、羅喆がこのような暗殺計画を立てたのは、単純な反日感情や一時的な義憤によるものではなく、日本の保護

国支配という当時の政治状況を考慮した上で、現政権とは異なる新政権を樹立しようと企てたものであった点である。これに関して、統監府文書には次の様に記されている。すなわち、「羅・呉ノ徒固ヨリ：韓国ノ独立ハ之ヲ他強国ノ擁護ニ待タルヘカラサルヲ知ルト共ニ日本現下ノ地位ハ戦捷当然ノ結果ナルヲ知ル故ニ濫リニ日本ニ反抗スルモノニ非ラサル」とし、彼らがこのような計画を立てたのは、「現政府ヲ覆シ新タニ組織シタル政府ヲ以テ独立ノ事ニ当ラシメン」とするものであったと記している。

さらに、この記録で注目すべき点は、「羅・呉ノ云フ処ニ依レハ彼等尚ホ大勢ヲ曉ラス兵力ヲ以テ日本ニ抗セントスルノ無謀ナルヲ論シ且二千万同胞ノ血憤ハ彼レ五賊ヲ屠ルニアリ現閣臣ノ存在ハ結局韓国ノ独立ヲ阻碍ストハ日本ノ志士尚ホ之ヲ謂ヘリ即チ現政府ヲ殲サントスル所以ナリ」と報告されている点である。つまり、日本の志士たちが「現大臣の存在は韓国の独立を阻害するものである」と主張しており、羅喆らが現政府の打倒を謀ろうとした理由もそこにあると云うのである。ここで言う日本の志士とは、頭山滿らを中心とする玄洋社系の大陸浪人を指すと考えられる。先に述べた通り、羅喆は五大臣暗殺未遂を行う直前に日本に渡って、玄洋社系の人士らと面談を行っている。また、羅喆の第三次訪日の期間が一九〇六年一〇月から一二月二五日にかけてであり、五大臣暗殺の計画日時が一九〇七年三月二五日であった。このことを考えると、羅喆が第三次訪日の際に、日本の大陸浪人たちに五大臣暗殺計画の相談を持ちかけていたことは十分に考えられる。当時の朝鮮政府は、朴斉純が総理大臣をつとめていたが、この朴斉純内閣は非常に脆弱であった。特にその頃、政治的な一大勢力として成長していた一進会は、この内閣に一進会員が参画できなかったことに不満を持っていた。実際、一進会は一九〇七年五月二日に非常に激烈な政府弾劾文を出した。²³⁾その

結果、朴斉純内閣はどうすることもできず、同年五月二〇日に総辞職した。²⁴⁾それに次いで登場したのが、李完用内閣であった。その際、一進会の宋秉峻が李完用を総理とすることを伊藤統監に建言し、これを実現させている。²⁵⁾その結果、宋秉峻は農商工部大臣として入閣した。また、これにより一進会員の多くが地方観察使などの官職を得て出世していった。このように、朝鮮政府により強力な親日内閣をつくろうとしていた日本側にとつて、羅喆が計画した乙巳五賊暗殺は、まさに諸手をあげて歓迎すべきものであったはずである。羅喆から乙巳五賊暗殺計画の話を持ちかけられた玄洋社系の大陸浪人たちは、それに賛同の意を表明し、暗黙裏に支援の意志をあらわしたのではないかと考えられる。

その他にも、この暗殺計画には不可解な点が数多くある。そのひとつに、閔衡植が羅喆に資金を提供した事実があげられる。閔衡植は閔氏政権の代表格であった閔泳徽の養子に入った人物である。²⁶⁾彼は大富豪の子として『朝陽報』発行の際に資金援助したり諸学校へ寄附金を送ったりしていた。一九〇七年の頃、彼は学部協辦に任命されていたが、その時に羅喆・呉基鎬らの五大臣暗殺計画に賛同し多額の資金を提供した。²⁷⁾次の疑問点は、羅喆が売国五大臣の一人である朴斉純をよく知る間柄であったことである。朴斉純（一八五八―一九一六）は金允植と同門である朴洪寿の息子であり、金允植の後援のもとに外交官として立身した人物であった。その縁で、羅喆は朴斉純の家に頻繁に出入りしていた。²⁸⁾羅喆の第一次訪日活動の際も、乙巳保護条約が締結されることをあらかじめ察知した羅喆は、当時外務大臣であった朴斉純に「首を切られても協約には同意するな」という急電を送っている。²⁹⁾現段階では、これらの疑問について解明することは出来ないが、羅喆が企てた五大臣暗殺計画は、日本側に対する抵抗運動ではなく、朝鮮政界の一大変革を目指したものであったことが窺われる。そして、その一大変革とは、他でもなく、師

である金允植を政界復帰させるためのものであったと考えられる。^⑤しかし、乙巳五賊暗殺計画は失敗に終わり、朝鮮政界の変革はおろか、警察に逮捕されて裁判にかけられ、智島へ流配される刑が宣告されてしまったのである。

しかし、その直後、羅喆が思いもしなかった形で、朝鮮政界の状況を一変させる大事件が起こった。一九〇七年六月に高宗がオランダのハーグで開催された万国平和会議に密使を送り、自国の外交権回復を訴えるという事件が起こったのである。このハーグ密使事件によって、高宗は退位に追い込まれ、新たな日韓協約（第三次日韓協約）が一九〇七年七月に締結された。この条約により、日本は朝鮮のあらゆる行政権・指揮権を掌握し、軍隊も解散させられ、純宗が新たな皇帝として即位した。こうして高宗の親政が終焉したことにより、閔妃暗殺事件などによって流配・亡命を余儀なくされていた開化派人士たちの解放と政界復帰がかなうこととなった。金允植について見てみると、李完用親日内閣に農商工部大臣として入閣した宋秉畯の勧告により、「七〇才以上の高齢者に対する釈放処置」によって、一九〇七年六月に流配の身から解かれた。^⑥ちなみに、日本に亡命していた趙義淵・張博ら元開化派官僚たちも、一九〇七年八月に朝鮮へ帰国した後、特赦によってその罪を解かれ、朝鮮政界へ返り咲いている。

彼らは朝鮮政界に復帰した後、それまでの鬱憤を晴らすかのように、日本側勢力に迎合してその庇護を受けつつ、自らの政治的地位を上昇させていった。金允植もその例外ではなかった。金允植は流配から解かれて上京した直後、一九〇七年八月に岡本柳之助のもとを訪れて旧交を暖めている。^⑦また、純宗の即位の時に高宗の第七子であった李垠（英親王）が皇太子となったが、当時一〇才であった彼は、一九〇七年一二月に伊藤博文統監の招きによって日本へ留学した。その際、皇太子の日本滞在

において礼遇を受けたことに対して、朝鮮側から伊藤統監に礼状が送られているが、その送信者が「金允植・兪吉濬・趙義淵・張博」となっていることが注目される。^⑧この留学は、韓国皇太子（英親王李垠）を日本に人質として渡すようなものであったが、それを斡旋したのが、金允植をはじめとするかつての亡命開化派人士たちであったことが確認できる。その後、金允植は一九〇八年に中樞院議長に任命され、韓国政府から勲一等太極章を授与された。また、一九〇八年二月には甲申政変と乙未事変の亡命者たちの集まりである講旧会を発足させて、自ら会長をとめている。そして、一九〇八年八月に金允植は勅命によって皇太子の日本留学の状況を視察したが、その際、日本政府から勲一等を与えられ旭日大綬章を下賜された。^⑨この時、日本陸軍の東京砲兵工廠などを参観している。また、一九〇九年にも皇太子を慰問するために伊藤博文と日本へ同行し、そこで日本政界人と親交を結んで帰国した。このような事実から、金允植と伊藤博文との間柄が非常に深いものであったことが窺える。実際、一九〇九年一〇月に伊藤博文が暗殺されると、金允植は韓国の元老代表として伊藤博文の会葬に参席するために渡日している。その他にも、金允植に関する朝鮮側の新聞報道を見てみると、伊藤統監のために歓迎会を設け、福島中将の歓迎会を開くなどの行為が頻繁に掲載されている。また、一九一〇年の韓国併合時にはその功労が認められて子爵の爵位を授与され、同年一〇月には中樞院副議長に任命された（病气によって辞退した）。一九一五年には日本帝国学士院の会員となり、一九一六年には経学院大提学に就任している。^⑩

金允植以外にも、日本へ逃れていた亡命政客たちは、朝鮮に帰国した後、華々しい出世を遂げている。例えば、李垠は一九〇七年七月に帰国した後、従一位永宣君に冊封されて勲一等を特叙され、同年一月には陸軍参将に任命された。^⑪また、趙義淵も一九〇七年八月に帰国した後、

同年一〇月に宮内府特進官、一九〇九年四月に表勲院總裁などを歴任し、一九一〇年に崇政大夫従一品に昇り勲一等に叙され太極章を授与された。一九一〇年六月には日韓の親睦を図る韓日立志会を組織し、韓国併合時には男爵の爵位を授けられて、朝鮮總督府中樞院顧問に任命されている。さらに、一九一二年八月には韓国併合記念章を授与され、同年九月の明治天皇喪礼には朝鮮貴族代表として参席している。また、張博（張錫周）は一九〇七年に宮内府特進官に任命されて正二品に叙された後、一九〇九年に帝室會計監査員卿・勅任官一等に任ぜられた。韓国併合時には男爵の爵位を授与され、一九一二年に中樞院顧問に任命されている。

金允植及びそれに連なる開化派官僚たちのこのような日本側への接近と政治的地位の向上は、金允植の弟子であった羅喆にも大きな影響を及ぼした。羅喆は、現職の大臣五人もの暗殺を企てるという重罪を犯したにも拘わらず、流配の刑が実際に執行されることはなかった。金允植の記した日記の記録によると、羅喆は一九〇七年七月八日に十一年の流配刑の判決を宣告されたにもかかわらず、同月一三日に保釈され自宅に帰還している。これに関して、羅喆は病気の症状が極めて重く身動きがとれない状態であったと記されている。このことから、病気が保釈理由であったと考えられる。さらに、同年十一月には純宗皇帝によって、拳兵犯と強盗犯を除くすべての囚人と流配人を釈放するという大赦の勅令が出され、これにより羅喆も流配の罪から解放された。

一〇．乙巳保護条約締結以降における愛国啓蒙運動の展開

その頃の朝鮮では、西洋の学術思想を学んで国権回復のための実力を養成しようという愛国啓蒙運動が展開されていた。この運動は、出身地

が同じ民間の知識人たちが集まって学会を組織する形で進められた。第二次日韓協約（乙巳条約）によって日本の保護国となった朝鮮において、この学会は一種の政治結社としての役割を果たしていた。流配から解放された羅喆は、全羅道出身者たちが集まって一九〇七年七月に結成された湖南学会に入会した。湖南学会には、羅喆の訪日旅行に同行した同志たちも加入している。例えば、李沂は、湖南学会の教育部長編輯部長をつとめ、機関誌である『湖南学会月報』に「一斧劈破」などの論文を掲載し、旧学を信奉する儒林たちを批判しながら新学問の受容を訴えた。

その他、呉基鎬・尹柱瓚・梁漢默も湖南学会の会員となっている。

そして、各種の愛国啓蒙団体の中で、最大規模のものが大韓協会であった。大韓協会は、一九〇六年に設立された大韓自強会が統監府によって強制解散させられた後、同学会の幹部たちによって一九〇七年一月に結成された団体である。乙巳保護条約の締結後、日本側から経済的な支援を受けつつ対日協力を前面に打ち出した一進会が最も大きな政治勢力となっていたが、大韓協会はこの一進会に対抗することのできる政治勢力となった。これに関して、統監府側の記録には、「純然タル政党政派トシテ公然政治運動ヲ為スハ右大韓協会及ヒ一進会ノ両会ナル」として、一進会と大韓協会を朝鮮における二大政党と見なしている。もともと大韓協会の母体となった大韓自強会（その元は憲政研究会）は、教育振興と殖産興業によって国権回復を図ろうとする愛国啓蒙団体であり、親日的な一進会とは信条を異にする人士たちが集まって組織された団体であった。そしてまた、大韓協会は、天道教が背後で支援を行っていた団体でもあった。天道教から一進会派が分裂した後、東学の信徒たちが一進会（待天教）側に数多く流れていき、その勢力は日増しに増大していった。これに対して、天道教教主の孫秉熙は、大韓協会を支援することで、李容九・宋秉畯らの一進会派に対抗しようとしたのである。ちょうどこの

頃、日本亡命中に東学（天道教）の信徒となった開化派人士たちが朝鮮へ帰国した。呉世昌は一九〇六年に帰国し、中枢院副参議となったがすぐに辞め、権東鎮も一九〇七年に帰国した後、中枢院副参議に任ぜられたが二ヶ月後に辞め、天道教の教務に従事していった。その傍らで、彼らは大韓協会に加入し、愛国啓蒙運動に積極的に参与していった。そして、孫秉熙は、大韓協会に入会した権東鎮・呉世昌らを積極的に支援し、自らも天道教の教主として大韓協会に経済的な援助を行ったのである。これに関して、日本側の資料には次のように記されている。

天道教主孫秉熙ハ前年一進会ノ設立ト共ニ教徒ヲ多ク同会ニ奪ハレタルヲ以テ常ニ一進会ニ対シ不満ヲ懷キ居リシカ幸ニ教徒権東鎮・呉世昌・李秉昊等カ大韓協会ニ入会シ専ラ同会ヲ援助シ居レルヨリ：一進会ヲ滅亡セシメントテ京城及地方ノ天道教徒ヲ全部大韓協会ニ入会セシメ一進会ノ侍天教ニ於ケル如ク天道教ヲ大韓協会ノ主教トシ大韓協会ノ地盤ヲ堅固ナラシムルコトニ力メ居レリ^⑧

実際、大韓協会は一九〇七年一月一日に一〇名の発起人によって設立されているが、その中に権東鎮・呉世昌の名前がある^⑨。また、発足時の役員構成をみると、総裁・閔泳徽、会長・張博、副会長・呉世昌、総務・尹孝定、評議員・張志淵・権東鎮・洪弼周となっている^⑩。このように大韓協会の会長には日本亡命時に孫秉熙と朝鮮政府の变革運動を行った張博がつとめ、副会長は呉世昌、評議員の一人に権東鎮の名が連ねられている。このうち、張博・呉世昌・尹孝定・権東鎮らが日本に亡命していた人士であることから、日本亡命派が結集した政治結社であったことがわかる。また、「孫秉熙ハ大韓協会々館建築費トシテ白米参百石ヲ同会ニ寄附セリ」という記録も残されている。このように、天道教が

背後で支援していたこともあり、大韓協会は一進会との対抗姿勢を先鋭化させていった。これに関して、大韓協会の機関誌である『大韓協会会報』には、日本人が刊行する雑誌『朝鮮』に「一進会と大韓協会」という標題で掲載された文を掲載している。その一部を抜粋すると以下の通りである。

一進会は親日派と称して統監政治の走狗と文明鼓吹の先駆として自任する者であり、大韓協会は韓国自強を標榜して韓国独立の題目を立てる者である。しかるに一進会を以て親日派と称するならば大韓協会は排日派と称するのも無理はない。：前者は会員が百万と称するが実際の人数は僅かに一万を超えず、後者は会員一万と称するがその実数は一万を超え、会員の実態は大韓協会が一進会に遙かに勝る数を有している。特に主義と精神と気魄で競争するならば、到底一進会はこれに及ばない^⑪。

また、大韓協会には、羅喆の訪日旅行に同行した人物たちも加入していった。例えば、第一次訪日旅行に同行した洪弼周（一八五七―一九一七）は、上に記したように、大韓協会の発起人として名を連ねて同会の評議員をつとめ、一九〇九年十二月には大韓協会の会報編輯所長をつとめた人物である^⑫。ちなみに、洪弼周は、羅喆に同行して日本へ渡った際、当時日本に滞在中であった梁啓超を訪問し交流を行っている^⑬。また、梁漢黙も大韓協会に加入した。先に述べたように、梁漢黙は、羅喆の第一次訪日旅行に同行し、羅喆ら一行を孫秉熙らと面会をさせた人物である。天道教が創設された後、梁漢黙は、教主の孫秉熙を補佐して教団の近代化に尽力した。梁漢黙が著述した『東経演義』は、東学の根本經典である『東経大全』を西洋哲学の観点から体系的に解釈した注釈書として知

られている。彼は一九〇八年に天道教中央総部玄機司長をつとめ、孫秉熙中心の教権体制を確固たるものとした。^⑤その一方で、梁漢黙は愛国啓蒙運動にも従事した。一進会と対抗するために、憲政研究会や大韓自強会の創設に関与した後、大韓協会が結成されるとその会員となった。^⑥また、全羅道出身であった梁漢黙は、湖南学会にも所属し議員をつとめた。^⑦一九〇八年一月一日に湖南学会で臨時総会が開かれた際には、臨時会長として推戴され、教育方針について演説している。^⑧先に述べたように、湖南学会には、羅喆をはじめ、羅喆の周辺にいた同志たちが所属していた。このことから、羅喆は、孫秉熙の天道教勢力と結びついた大韓協会側の陣営に属していたことが確認できる。

しかし、日韓併合に向けての動きが加速化する時代状況の中で、政治団体の大同団結運動が起こり、一進会と大韓協会、そして朝鮮半島北部で勢力を持っていた西北学会の三党が提携することとなった。これは、民族独立と国権回復を唱えていた大韓協会と西北学会の勢力を一進会に吸収するために、一進会の李容九・宋秉峻らが画策したものであった。^⑨これが、日韓併合へ向けての土台となっていく。実際、その後、一九〇九年一月四日に一進会が、韓国皇帝及び曾禰荒助統監・李完用総理大臣に日韓合邦請願書を提出することになるのである。これに対して、一九〇九年一月二月に天道教徒の李在明が、李完用総理の殺害を試みて襲撃した事件が発生した。これは、天道教総務の梁漢黙と同書記の呉尚俊が背後で教唆したものであった。^⑩これに関して、日本側の記録には、「孫秉熙ノ教主タル天道教総務梁漢黙ハ同教カ一進会ノ異名同体トモ称スヘキ侍天教ノ圧迫ヲ受ケ久シク萎靡不振ノ苦境ニ沈淪シタルヲ憤慨シ之ニ打撃ヲ加フルニアラサレハ遂ニ天道教ノ發展ヲ見ルヘカラスト思惟シ：李在明ハ当時一進会カ大韓協会ト聯結シテ益々韓国ノ不利ナル行動ニ出ツルヲ予想シ：之（梁漢黙の教唆を指す引用者）ヲ諾シテ其目的ヲ達スル

ニ必要ナル同志ノ糾合兇器ノ準備等ニ着手セリ」と記されている。^⑪

このように、民間の政治結社として一進会と大韓協会が激しく対立する政治状況の中で、羅喆は大韓協会側の立場に立ち、自らも湖南学会の会員として愛国啓蒙運動に従事していった。その最中に、羅喆は、一九〇八年一月に日本へ渡り、翌年の一月まで三ヶ月にわたって日本に滞在した。この第四次訪日の際は、羅喆がそれまで悲願としてきた金允植の政治的解放はすでに達成されていた。それにもかかわらず、羅喆はなぜ長期間にわたって日本に滞在したのか。以下では、羅喆の第四次訪日活動の足跡を辿りながらその目的が何であったのか考察してみたい。

一一・第四次訪日における羅喆一行の活動

羅喆の第四次訪日活動に関しては、朝鮮側にも記録が残されているが、日本側の方により詳細な記録が残されている。この時期の羅喆は、韓国の現職五大臣の暗殺を企てた要注意人物として日本側当局から厳しい監視を受けており、そのために密偵を使った詳細な報告文書が残されている。以下では、主に日本側の記録を通じて、羅喆の第四次訪日の足跡を辿ってみたい。

日本側の記録によると、羅喆の第四次訪日は、羅喆・吳基鎬・李健・鄭薫模の四名で行われたと記されている。^⑫この時の羅喆一行の足跡を時系列に沿って一覧表にまとめてみると、次の通りとなる。

表 2：羅喆一行の第四次訪日活動の足跡

年月	日付	行動内容
1908 年 11 月	12 日	一行 4 名が東京麹町区富士見町にある旅館松葉館に投宿
	13 日	羅喆と呉基鎬の両名が韓国人亡命者の陸鍾允を訪問
	16 日	羅喆・呉基鎬・李健の 3 名が松村雄之進を訪問
	17 日	羅喆と呉基鎬の両名が古市公威工学博士を訪問
	18 日	羅喆が頭山満を訪問
	19 日	羅喆・呉基鎬・鄭薫模の 3 名が再び松村雄之進を訪問
	22 日	申厚永・魚永善の両名が来訪。柳承欽より来信あり。
	23 日	鄭薫模が本郷区金助町 21 番地亀井方へ移転
	24 日	松村雄之進が来訪し、約 3 時間にわたって対談
	29 日	羅喆が鄭薫模・李永錫と同伴外出。羅喆と呉基鎬の両名が古市公威工学博士を訪問。近隣の青山医学博士を紹介され、診察の結果、糖尿病と診断される。
1908 年 12 月	1 日	羅喆が大学病院に入院しようとするが、病室の都合で延期。羅喆は一時、芝区桜田町 14 番地の清光館に投宿。呉基鎬と李健の両名が新橋発の汽車で帰国の途に就く。
	4 日	鄭薫模が羅喆を訪問
	6 日	夜、羅喆が陸鍾允を訪問
	7 日	鄭薫模と李永錫の両名が長谷川大將を訪問。帰途に羅喆のもとを訪れ、羅喆を大学病院に連れて行く。羅喆はこの日から大学病院青山内科二等 13 号室に入院する。
	18 日	鄭薫模が戸主亀井（韓国留学生鄭鳳鎮の異名）と共に麹町区二番町 10 番地に移転
1909 年 1 月	31 日	羅喆が大学病院を退院し、本郷区森川町 1 番地にある下宿屋蓋平館に止宿。松村雄之進がその幹旋を行う。
	13 日	羅喆は古市公威を訪問し、饗応を受けて帰宿
	14 日	李永錫が来訪して対談中、松村雄之進の妻が来訪。羅喆と相談の上、宿料 27 円 40 銭を松村に支払い、午後 7 時に松村宅に移る（この頃、鄭薫模が帰国の途につく。日時は不明）。
	18 日	羅喆が李永錫を通訳として末松子爵を訪問
	26 日	羅喆が午後 3 時 30 分新橋発で帰途に就く。

（出典：『韓国近代史資料集成』巻 3、「要視察韓国人挙動（3）」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂：韓国人ノ部（8）」にある「韓人ノ行動」関連記事を参照）

さらに、日本側の記録によると、「羅ハ鄭薫模・李健ノ二名カ多少ノ資産アルニ乗シ之ヲ利用シテ運動費ヲ支出セシメ獵官ノ目的ヲ達セン」と記されている。このことから、今回の訪日旅行の費用を出したのが鄭薫模と李健の二名であり、彼ら一行の訪日目的が何らかの官職を得るためであったことが窺える。実際、羅喆ら一行は日本に到着するとすぐに日本に滞在中の朝鮮人士たちと面会しているが、日本側の記録には、その時に「獵官」の話し合いがなされたと記されている。すなわち、羅喆ら一行は、十一月一二日に東京に到着して旅館に投宿した後、その翌日に朝鮮人亡命者である陸鍾允のもとを訪問した。羅喆はこの時、「陸鍾允宛金議長ノ依頼書ヲ差出」したが、その依頼書の内容は「羅寅永・呉基鎬等ハ当時口糊ニ窮セル為メ其他ニ向ヘリ応分ノ幹旋ヲ頼ム」というものであった。また、羅喆と陸鍾允の二人の関係について、日本側の記録には「羅ト陸ハ最モ親密ニシテ丁年時代ハ共ニ現中枢院議長金允植書生タリシ事アリ」と記されている。当時、金允植はすでに流配を解かれ、朝鮮の中央政界で高級官僚として再び活躍をしていた。それに対して、この頃の羅喆の様子は、わずか数間ほどの茅葺きの家に住み、周囲は他人の家の花園に囲まれるというみすばらしい有様であった^⑤。金允植が自分の門下生に、弟子である羅喆のために仕事の幹旋・便宜を依頼することは十分に考えられることである。余談であるが、この後の一九一二年一月に、羅喆の息子が善隣商業学校三年生となった際、家が貧しくて学校に通うことができずにいると、金允植は自分の家に羅喆の息子を宿泊させて通学をさせている^⑥。このような事実からも、金允植が、羅喆の経済状況を非常に気にかけていたことがわかる。ところで、この陸鍾允（表一の No.18）は、兪吉濬・趙義淵・張博らと共に日本へ亡命した開化派人士であり、かつて外部交渉局長をつとめていた人物であった。陸鍾允は日本に亡命した直後から趙義淵と行動を共にして、本国帰国のための様々

な運動を展開していた。^⑧ 羅喆はそれまでの訪日において、李垞鎔・趙義淵・張博らと面識を持っており、彼らと同じグループに属していた陸鍾允と比較的接触しやすい立場にあったと考えられる。しかし、日本側の記録によると、この時、陸鍾允は羅喆らに「到底日本ニ於テハ好結果ヲ奏スヘキ見込ナキヲ以テ帰国ノ上運動スル方可然ト勸告」^⑨している。

さらに日本側の記録を見てみると、羅喆ら一行の中で、特に鄭薫模が就職活動を積極的に行っていたことがわかる。日本側の記録には、鄭薫模の訪日目的に関して、「鄭薫模ハ来朝ノ目的ヲ或者ニ語リテ曰ク自分ハ元郡守ヲ勤メ正三品タリ自分カ職ヲ失ヒタルハ韓国現政府カ日本政府ノ趣旨ヲ奉シテ執レル政策ノ結果ニ外ナラス故ニ此際日本政府ノ政策ニ反対スル日本人ニ執リ以テ官職ヲ得ンカ為メニ外ナラス」^⑩と記している。さらに、「鄭薫模ハ：李永錫カ目下東洋拓殖会社ノ役員タラントテ運動中ナルヲ以テ其目的ヲ達スルヲ待チ同人ノ周旋ニテ自己モ亦其役員タランコトヲ望ミ其成否ヲ待ツ為メ暫時滞京」^⑪しているとある。また、これと関連して、次のような報告もなされている。すなわち、「李永錫ハ韓国大邱西門内ノ者ニシテ父李漢朴ハ韓人中比較的有福ニシテ東洋拓殖会社ヘ売付クヘキ目的ニテ数多ノ土地ヲ買入レ其売却ヲ計ルニ便宜上李永錫ヲ拓殖会社社員タラシメン為メ来朝セシメタルモノノ由ニテ本人ノ止宿セラル戸主伊藤藤治郎ハ韓国ニ出張所ヲ有セル土木請負業橋本組ノ雇人ナリ」^⑫。先に述べた通り、鄭薫模は今回の訪日旅行に際して資金提供を行っていたようであり、その金額はかなりの額に上ったはずである。訪日に際して、鄭薫模が高位高職を得るための運動を積極的に行ったことは十分に考えられる。また当時、拓殖会社の創設は、愛国啓蒙運動に従事した人々たちの間でも大きな関心が持たれていた。例えば、羅喆やその同志らが深く関わった湖南学会では、機関誌に拓殖会社に関する記事を掲載している。^⑬ また、大韓協会では、拓殖会社に関して専門的に研究する委員

として、呉世昌・権東鎮・呂炳鉉の三名が選ばれ、その法律を機関誌に掲載している。そして、韓国政府に質問状を送ったり、日本の大蔵省に送った質問に対する回答を委員の権東鎮が説明をしたりしている。^⑭ このことから、羅喆の周囲でも、拓殖会社に関する利権に関して並々ならぬ関心が持たれていたことが窺える。

ところで、東洋拓殖会社への就職を画策中であると記されている李永錫は、羅喆をよく知る人物でもあった。日本側の報告書には、「李永錫曰ク一四歳ノ時日本ニ来リ其後明治大学ヲ卒業シ昨年（一九〇七年）を指す（引用者）韓国帰国ノ際京城ニ於テ羅寅永ト懇意トナレル」^⑮と記されている。また他の記録文書によると、李永錫は「閔元植が頭山満に託した苦学生であった」とも記されている。^⑯ また、今回の訪日において、羅喆は一月一日に頭山満を訪問して面会をしているが、それも李永錫の紹介によるものであったと記されている。^⑰ 李永錫は、「羅ハ人格高ク最モ温厚篤実ノ君子ニシテ質実ナル韓人ノ多クハ同人ヲ崇拜シ同情ヲ寄スルノ傾アリ」^⑱と述べていることから、羅喆に対してかなり信頼の念を抱いていたことがわかる。

さらに日本側の記録によると、羅喆ら一行が東京に到着して五日後の一月一七日に、羅喆と呉基鎬の二名が古市博士なる人物のもとを訪問したことが記されている。^⑲ これに関しては、別の記録に「李永錫カ古市博士ヲ知ルニ至リシハ李カ曾テ頭山満ノ書生タリシ当時古市博士カ屢々頭山方ニ出入セシニ因ル」^⑳と記されている。このことから、羅喆らを古市博士に紹介したのが李永錫であり、さらに李永錫が古市と知り合いとなつたのも頭山満を通じてであったことがわかる。ところで、ここに記されている古市博士とは、当時工学博士であった古市公威（一八五四―一九三四）のことであったと考えられる。古市はフランス留学で工学と理学を修めて帰国した後、主に土木工学の分野で活躍し、日本近代工学の

基礎を築いた人物である。それではなぜ、羅喆は古市との面会を試みたのか。その理由について探るために、以下では古市がいかなる人物であったのか、彼の経歴について考察してみたい。

古市公威は、一八八六年に帝国大学工科大学（東京大学工学部の前身）の初代学長に就任して學術研究を行う傍ら、内務省土木局の局長として全国の河川治水や港湾修築等の事業に携わり、日本の土木行政全般を主導した。彼はまた、鉄道行政にも深く関与し、鉄道事業の分野で朝鮮や中国と深い関わりを持った。彼は一九〇三年三月に日本の国有鉄道網を管轄していた鉄道作業局の長官に就任したが、当時は日露開戦準備のために朝鮮半島の京釜（ソウル―釜山間）鉄道の敷設が喫緊の課題として持ち上がっていた。そのために古市は鉄道作業局長を辞し、一九〇三年一月に京釜鉄道株式会社総裁に任命されて朝鮮へ赴任した。彼は辣腕をふるって僅か一年間で京釜鉄道を開通させることに成功した。また、日露戦争が終結して韓国で統監府政治が始まると、一九〇六年六月に統監府の鉄道管理局長官に任命され、京釜鉄道全線の買収、および京城・義州間、馬山・三浪津間の鉄道を移管させる事業を行った。^⑧ こうして朝鮮における鉄道整備の事業を完了させた後、古市は一九〇七年六月に日本へ帰国した。

このように朝鮮の鉄道事業に関与する中で、古市は中国を含む東アジアの鉄道事業に大きな関心を持つようになった。そして、一九〇五年一月に日本鉄道界の権威者たちと共に東亜鉄道研究会を創立し、古市はその理事をつとめた。^⑨ この研究会は東アジアの鉄道経営に関して諸般の調査と研究を行うことを目的としたが、当初の事業として清国の鉄道の視察と調査を行った。^⑩ さらに、一九〇七年四月には洪沢栄一らの勧誘によって、対清経済事業の調査を目的とする日清起業調査会が設けられた。同会を通じて一九〇九年に粵漢鉄道工事引受に関する調査を行い、当該

事業に関して資本を供給することを目的とするシンジケートの性質を有する一会社を設立することを申し合わせ、同年八月に興亜興業株式会社が設立された。その際、古市は社長に就任し、一九一八年に同社を辞任するまで、清国における鉄道・電燈・紡績など実業に関する幾多の借款契約の締結に尽力した。^⑪ また、古市に関しては、南満洲鉄道に関する興味深い逸話が伝えられている。古市が統監府鉄道管理局長をつとめていた一九〇六年の六月末から七月初め頃、古市は東京に出て参謀本部に伯爵児玉源太郎大将を訪問し、中国問題について議論した。その時、話が鉄道問題に及んで、児玉は古市を南満洲鉄道の初代総裁になるように勧めた。しかし、古市はこれを辞退して、満鉄初代総裁としては後藤新平が最も適任であると進言した。これを聞いた児玉は、当時、台湾総督府民政長官として台湾に赴任していた後藤に電報を打って東京に招聘して話を勧めた。^⑫ こうして結局、後藤が満鉄初代総裁に就任したが、その後、古市はしばしば満洲に直接赴き、従来の研究成果をもとに満鉄の将来に関する意見を後藤総裁に述べて参考に供されたとされる。

以上のような古市の経歴を考慮すると、羅喆ら一行の中で特に鄭薫模が東洋拓殖会社の役員となることを目論んでいるという日本側の報告記録は、かなり信憑性の高いものであったと考えられる。これに関して、先に述べたように、古市は一九〇五年に東亜鉄道研究会を創設して、中国大陸における鉄道経営に大きな関心を寄せていた。その際、古市は、同会の理事長として、清国に駐在あるいは旅行した鉄道関係者から現地状況の詳細に聞き出し、これを本会后援者および出資者に報告して参考資料に供した。また、清国の関係有力者が来日した際には必ずこれを歓迎して、諸般の便宜を与えて相互意見の疎通を図ったとされる。^⑬ また、古市は京釜鉄道敷設を速成で完成させ、さらに朝鮮半島の鉄道会社を買収して統監府に移管する事業に成功した功績が認められて、満鉄の初代

総裁にも拔擢されようとしたこともあった。古市の鉄道経営構想の中には、朝鮮半島の鉄道網と南満州鉄道を連結させ、中国大陸へ進出するための鉄道網を整備しようとする考えがあったと思われる。このように東アジア全域の鉄道経営及びそれと関連するインフラ整備事業に大きな関心をもっていた古市は、頭山満の知り合いからの紹介ということもあり、一介の民間人にすぎなかった羅喆との面会に快く応じたものと考えられる。

一二 第四次訪日における羅喆の病氣治療

前節では、第四次訪日の際に羅喆が古市公威と面会した事実について述べた。その際、第四次訪日旅行の費用を出した同行者の鄭薫模の就職活動を支援するためであった点について述べた。しかし、羅喆が古市と面会を試みたのは、ただそれだけの理由だけではなかった。羅喆は一九〇八年一月一七日に古市のもとを訪れた後、一月二十九日にも李永錫を連れだつて古市のもとを再訪している。これに関して、日本側の記録を見ると、次のような注目すべき事実が記されている。すなわち、「羅ハ昨今罹病ニ付同博士ノ紹介ニテ近隣ニ住セル青山医学博士ノ診察ヲ乞ヒタシト懇請シタルニ古市博士ハ之レヲ諾シ直ニ青山博士ニ交渉診察ヲ受ケシメタルニ糖尿病ト診定入院治療ヲ要ストノ事」と記されている。つまり、李永錫と羅喆が古市博士を訪れたのは、羅喆の病氣治療のために適当な専門医を紹介してもらうためであった。実際、日本側記録には李永錫の証言として「羅ノ渡来セルハ単ニ糖尿病ヲ治療センカ為メニシテ他意アルニアラス」と記されている。これに関して、羅喆が深刻な病氣を患っていたことは、第四次訪日以前の記録にも記されている。例えば、金允植の日記を見ると、乙巳五賊暗殺未遂によって羅喆が

流配刑を宣告された頃（一九〇七年七月）には、病氣のために身動きがとれないほどの状態となり、一九〇八年に入ると病状がさらに悪化した様子が記されている。このことを考えると、羅喆の訪日目的が糖尿病の治療であったとする日本側の記録はかなり信憑性の高いものであったと思われる。

ところで、羅喆が診察を懇願したという青山医学博士とはどんな人物だったのだろうか。それは、当時、東京帝国大学医学部教授であった青山胤通（二八五九―一九一七）のことであったと考えられる。青山は一八八七年にドイツ留学から帰国した後、東京帝国大学医科大学の内科教授に就任し、医学博士となった後、東京帝国大医科大学校長、伝染病研究所所長などを歴任した。また、青山の第一の趣味は囲碁であった。その熱中ぶりは「三度の食事も忘れる程夢中になる」くらいであり、一生を通じて彼の最大の道楽が囲碁であった。名士仲間の碁友としては、大隈重信や犬養毅などがいたが、大隈とは毎週一回必ず碁を打つ間柄であった。なお、青山の囲碁好きに関しては、次のような興味深い逸話が残されている。すなわち、「留学から帰リたてには、金玉均の宿に犬養、頭山、赤羽等の豪傑や本因坊秀栄などが集まるので、先生（青山胤通を指す。引用者）は屢々碁打ちに出掛けた」。よく夜更けまで碁に熱中し、まだ自動車も電車もない時であったから、金玉均の泊まっていた東京ホテルから小石川にある自宅まで歩いて帰ることがよくあった。その時は、「家で一時間か二時間寝て直ぐ大学へ出勤し、終日欠伸ばかりして何を講義したか解らぬようなことも往々あった」と伝えられている。この逸話で注目したいのは、青山が頭山満や金玉均と囲碁を打ち合う間柄であったことである。これに関しては、頭山満も大の囲碁好きであったことが知られている。頭山に関する伝記によると、頭山は、十三才の時から近所の碁打ちに可愛がられて、囲碁を教えてもらった。その後、頭山は「英雄

の閑事」として囲碁を好み、「頭山満と謂へば、囲碁を想起し、囲碁と云へば、頭山を連想する位の碁好き」であった。また頭山は、碁打ちが披露会をする際に十二分の支援をするなど囲碁界に尽力し、「明治碁界の恩人と言ってもよい」ほどであった。一例をあげると、本因坊秀栄を名人にしたのも頭山の力が大きかった。当時、六十年間名人が絶えていたのを、頭山の主唱で八段の秀栄を名人に推薦したのであった。なお、頭山の伝記類の中には、頭山が青山と碁を打ち合ったことを記しているものもある。そしてまた、金玉均も碁を趣味としたことで知られている。これに関して、犬養毅は、「金玉均は…引用者）日本に来てから熱心に碁を研究し…名人の指南を受けて遂に素人放れのした技倆になった」と述べている。ここでいう名人とは、頭山が支援した本因坊秀栄のことである。秀栄は会った瞬間から金玉均に傾倒していった。秀栄は金玉均の碁の師となり、東京の金玉均の仮宅にもしばしば出かけて碁を囲んでいた。また金玉均は、秀栄の後に坊家を襲名した本因坊秀哉とも特に親しかった。秀哉は一九歳の時に上京し、「当時亡命中の金玉均の勧めに従って本因坊秀栄の門に入り、三十五歳の時に至って坊家を襲名した。金が小笠原諸島に隠れていた時、秀哉は遙かに金氏を訪ねて滞留数旬、日夕金と対局して彼が亡命の非情を慰撫」したという話が伝えられている。このように無類の囲碁好き仲間として、青山と頭山らが金玉均の泊まっていたホテルに集合し、当時を代表する名士らと徹夜で囲碁を打ち合っていたのである。寝食を忘れるほど囲碁に熱中していた青山にとって、それは終生忘れることの出来ない思い出であったはずである。

そのような囲碁仲間である頭山の紹介ということもあってか、青山は羅喆に対して非常に誠意のある対応をとっている。日本側の記録によると、羅喆は青山の診察を受け、「羅ハ翌（二月引用者）一日大学病院ニ入院セシカ全治退院迄二ハ三週間ノ見込ミナリ」と診断された。この大

学病院とは、東京帝国大学医科大学付属病院のことであったと推定される。その後、羅喆は二月一日にいったん大学病院に行ったものの、病室の都合が悪かったために四・五日のあいだ入院を見合わせることとし、臨時に芝区桜田町一四番地にある旅館清光館に投宿した。そして、二月七日に羅喆は、大学病院青山内科二等一三号室に入院した。予定にはなかった羅喆の入院治療によって、一行の帰国日程に問題が生じた。一行の中で、呉基鎬と李健が先に日本を発って帰国の途につき、羅喆と鄭薫模の二名が日本に滞留することとなった。この時、鄭薫模が日本に留まったのは、先に述べた東洋拓殖会社の役員斡旋の件に関して、その結果がどうなるか待ったためであったと考えられる。その後、羅喆は二十五日間入院生活を続けた後、二月三一日に大学病院を退院した。羅喆が退院したのは、「其病症ノ糖尿病ニシテ全治迄二ハ永キ日子ヲ要スルヲ以テ寧口退院静養スルニ若カスト医師ヨリ勧告ヲ受ケタ」からであった。その後、羅喆は一九〇九年一月一日に古市公威のもとを訪問し、半日に及ぶ饗応を受けている。さらに、羅喆は松村雄之進の家で静養した後、一九〇九年一月二六日午後三時三〇分新橋発の列車にのって帰国の途についた。

以上、第四次訪日における羅喆の足跡について辿ってみた。羅喆の行動で特に注目したいのは、彼が東京に到着して間もない五日後に古市のもとを訪問し、さらに古市との面談で青山医学博士の診察を受けることを懇願している点である。このような行動を見てみると、羅喆が渡日前にかなり綿密な計画を立てて、日本で糖尿病の治療を行おうとしていたことが窺える。当時の医学水準を考えると、糖尿病は現代の癌と同じく、死に至る可能性の高い難病であった。そのために、羅喆は、朝鮮よりも西洋医学の発達していた日本で、糖尿病の治療を行おうとしたものと考えられる。

そして、この第四次訪日においても羅喆の病氣治療を大きく助けたのが松村雄之進であった。実際この日本滞在中に、羅喆ら一行は特に松村と頻繁に会っている。まず羅喆ら一行は東京に到着した後、その四日後の十一月一六日に稿反物二反と西洋菓子一折をわざわざ購入し、それを手土産として松村の自宅を訪問した。^⑤これに対して、松村自身も、羅喆一行を手厚くもてなしている。また、十一月二四日には、松村が羅喆一行のもとを訪れて約三時間にわたって長談義をしている。^⑥この五日後に羅喆が古市のもとを訪問して青山医学博士を紹介してもらっていることから、この時はおそらく、羅喆の病氣治療について話をしていたのではないかと考えられる。その後、羅喆は大学病院に入院し、二月三一日に退院して本郷区森川町一番地の下宿屋蓋平館に投宿しているが、その下宿も松村雄之進が斡旋を行ったものであった。^⑦そして、一九〇九年一月一日には、松村の妻が下宿先の蓋平館にやって来て、羅喆と相談の上、宿料二七円四〇銭を松村が支払い、その日の夕方に松村の自宅へ移っている。^⑧おそらく羅喆が下宿先の宿泊料を支払うことができず、松村がその代金を代わりに支払い、そのまま羅喆を自宅に引き取ったのではないかと思われる。その後、一月一日から帰国の途につく一月二六日まで、羅喆は松村の自宅に宿泊して世話を受けている。

このように松村は羅喆ら一行と特別に深い結びつきを持っていた。そのため松村は、誰よりも詳しく羅喆ら一行の訪日目的について把握をしていたようである。これに関して、日本側の記録には、松村自身から聞き取りをしたものとして次のような証言を残している。すなわち、今現在、朝鮮各地で民乱が起り騒擾を起こしているが、その原因は韓国政府が採用した巡査が被差別部落民出身者で残虐な取り締まりを行っているからであり、羅喆はこの問題を改革して「韓国人民ノ生命財産ヲ保護スルノ策ヲ講」じるために、今回日本の有志者と協議を行おうとした。

これに対して、「韓国駐劄軍司令官長谷川大将ノ如キモ其意ヲ諒シ」ており、また日本の有志者たちも羅喆に同情してその志を理解した。しかし「彼レ（羅喆を指す引用者）ニ反対スル一進会ハ同人ニ対シ誣罔ノ説ヲ放チ世人ヲシテ其真意ヲ誤解セシメ居レリ」と記している。この証言の中で、一進会が羅喆の行動を妨害していたとされるのは、羅喆が一進会と対立した大韓協会側の陣営に立っていたからだと考えられるが、ここで注目したいのは、この事実を松村が詳しく把握していた点である。このことから、羅喆が松村に対して自分が置かれている境遇など様々な事柄を打ち明けていた事実が確認できる。

そして、松村が羅喆らに対して行った様々な支援は、何か政治的な目的があったというよりは、純粹に彼の好意によるものであったと考えられる。これに関して、松村の死後に編纂された彼の伝記の中に「松村先生を憶ふ」（井出俊雄著）という回顧録が収められている。^⑨それには松村の人生経験について、大略次のようなことが書かれている。すなわち、松村は代々神官をつとめた家柄であったことから、もともと宗教に関心があった。彼は、一八七一年一八才の時に国事犯として捕縛され、取り調べの際に、股の肉と骨とが引き裂かれるような言語に絶する過酷な拷問を受けた。そのまま七年間の禁固刑を宣告され、広島監獄に繋がれた。一間四方の牢屋に押し込められ、獄中で『王陽明学』を読みながら、静坐を行って耐え抜いた。この静坐による鍛練のおかげで、臍下丹田が凝り固まって大きくなったほどであった。若い時からこのような苦勞をしたためか、松村は平素から非常な敬神家で、毎朝洗面後は直ちに縁端に出て柏手を打って太陽を拝し次に神仏を礼拝した。精神身体鍛練に意を注いで英雄伝や偉人伝の読書を楽しみとし、禪に関心を寄せ、ついには浅草広徳寺の勝峯大徹老師に相見してその居士となった。また、松村は幼少の頃から武田範之と知り合いの仲であった。^⑩武田範之は、松村

と同じ久留米の出身であり、子供の時から松村の家によく遊びに来ていた。当時（一九〇六年頃）の松村の自宅には、武田範之の書いた門表が掲げてあり、二階の客間にも秘蔵である武田範之の筆跡が掲げてあった。

さらに、井出俊雄による回想録では、次のような興味深い逸話が紹介されている。すなわち、松村は「真に逆境の浪人」であったために、様々な人士が彼のもとを訪ねてきた。中国革命家の孫文や朝鮮の金允植一派の志士、それから宮崎滔天などの大陸浪人たちも訪ねて来た。松村は、当時まだ若かった井出に対して、「私は何等の野心も無い。唯書生を養うて梁山泊を起して見たい。若い時は大分書生を養い又世話もしたこともあった」と語っている。ここで「朝鮮の金允植一派の志士」とは、他でもなく、羅喆や呉基鎬のことを指していると思われる。松村が羅喆らに対して様々な支援を惜しまなかったのも、彼自身と同じく在野の志士として逆境に立ち向かっているその姿に共感を覚えたからではなかったろうか。特に拷問の後による脚の不調を抱えていた松村は、糖尿病という不治の病を患い、その治療のために異国の地にやってきた羅喆の姿に接して、深い同情心を抱いたものと思われる。

おわりに

以上、本稿では、旧韓末期における羅喆の政治活動の中で、四回にわたって行われた訪日活動の内容について考察した。羅喆が行った四回の訪日の期間は、第一次訪日（一九〇五年七月～一九〇六年二月）、第二次訪日（一九〇六年七月～一〇月頃）、第三次訪日（一九〇六年一〇月～一二月）、第四次訪日（一九〇八年一月～一九〇九年一月）であり、その滞留期間を合計すると一年二ヶ月余りに及ぶものであった。羅喆の訪日活動のうち、第二次訪日旅行は途中で打ち切られたものであった。これを除くと、第

一次・第三次・第四次の訪日活動の目的はそれぞれ異なるものであった。本稿の考察結果をまとめると、以下の通りである。

まず、第一次訪日活動の目的は、乙巳保護条約の締結を阻止するためであった。これに関して、先行研究では、羅喆が乙巳保護条約締結に反対する書簡を日本政府関係者に送ったことだけが論じられていた。これに対して、本稿では、羅喆が、東学（後に天道教）教主である孫秉熙の招きを受けて、日本で朝鮮人亡命客の糾合運動を展開していた趙義淵・張博・李峻鎔らと接触した事実を明らかにした。当時、孫秉熙は、民間団体（進歩会、後に一進会）を組織して東学教団の近代改革運動を行っており、趙義淵らが展開していた朝鮮人亡命客の糾合運動と連携しながら、朝鮮政界の変革を目指す計画を画策していた。その一方で、日露戦争に乗じて第一次日韓協約が結ばれ、さらに乙巳保護条約（第二次日韓協約）が締結されようとしていく状況を目の当たりにして、彼らは日本側の勢力との連携を維持しつつも、日本による保護国支配を何とか阻止し朝鮮の独立を維持しようとする運動を行っていた。羅喆は、このような運動に連なり、乙巳保護条約締結の阻止を図ろうとしたと考えられる。また、羅喆がこの運動に関与しようとしたのは、ただそれだけの理由ではなかった。当時日本に亡命していた朝鮮人亡命客の多くは、閔妃暗殺事件に関与した元開化派官僚たちであった。彼らの政界復帰は、流配によって智島に囚われの身となっていた金允植の政治的解放にも繋がることであった。羅喆は、趙義淵や孫秉熙らが展開していた朝鮮人亡命客の糾合運動に連なることによって、金允植の流配解放と朝鮮政界への復帰を目指そうとしたのだと考えられる。

次に、第三次訪日活動の目的は、乙巳保護条約を撤廃して朝鮮の独立を維持することを日本側に訴えるために行われた。これに関して、先行研究では、朝鮮の国権回復と民族独立を達成するために、羅喆は日本政

界の要人たちと会って民間外交活動を展開したと説明されている。しかし、その実態は、金允植の人脈を通して、玄洋社系の大陸浪人たちと面会したにすぎなかった。その際、羅喆が主張したことは、アジア主義の立場からの東洋三国連帯論であった。羅喆は、日清・日露戦争を通じて列強として台頭した日本側勢力の実力を認めながらも、アジア諸国の中で最初に近代化に成功した日本が率先して、朝鮮・中国の独立を支援し、近代化への支援を行った上で東洋三国が対等な連帯を図るべきであると主張した。一方、玄洋社系の大陸浪人たちが唱道したアジア主義とは、天皇を戴いた神国日本がアジアの盟主となって君臨し、西洋の覇道文明国に対抗する道義的な王道アジアを建設するといったものであった。このような人々に、羅喆が訴えた朝鮮の独立維持の主張が通じるはずはなかった。その意味で、羅喆が日本で行った政治活動とは、日本政界の要人を通じた民間外交と言うにはほど遠いものであったと言えるだろう。

さらに本稿では、羅喆の第四次訪日の目的が病氣治療であったことを明らかにした。羅喆が第一次から第三次にわたる訪日活動の目標としてきた金允植の政治的解放は、この時点ですでに達成されていた。羅喆の第四次訪日は、彼本人の個人的な理由が主な目的であったと考えられる。羅喆は持病として糖尿病を患い、訪日の際に日本での治療を受けようとしたのである。その際、松村雄之進ら大陸浪人たちが羅喆に個人的な支援をした。それは、政治的な利害関係によるものというよりは、個人的な友情によるものであったと考えられる。

羅喆の訪日活動に関して、従来の研究では、日本の帝国主義支配に對抗して朝鮮の独立と国権回復を訴えるためであったと考えられてきた。これに関して、確かに羅喆は、日本において乙巳保護条約の締結反対運動を行い、またその傍らで乙巳五賊暗殺を行おうとした。しかし、それらの行動は、羅喆の師であった金允植の流配措置の解放と政界復帰運動

の一環として行われたものであった。少なくとも、それは、朝鮮民族全体の立場を代表した抗日運動などではなく、むしろ、閔妃暗殺事件によって朝鮮政界を追われた親日開化派集団という特定の政治集団の利益に連なる行為であったという点に留意する必要があるであろう。また、羅喆の訪日活動における大きな特徴は、玄洋社系の大陸浪人たちと頻繁に面会を繰り返している点にある。しかし、玄洋社系の大陸浪人たちが、一介の民間人にすぎなかった羅喆との面会に応じたのも、羅喆が金允植・趙義淵・李垞鎔といった亡命開化派に属する人物であったからだと考えられる。朝鮮半島における日本の権益を拡大・伸張させるための足掛かりを求めていた日本の大陸浪人たちにとって、親日的な亡命開化派は非常に利用価値の高い集団であったのである^⑩。以上の事実を総合すると、羅喆の訪日活動の目的が、日本帝国主義に対抗するための民族独立運動の一環として行われたとする従来の通説は、再考の余地があると言えるだろう。

最後に付言すると、羅喆が糖尿病であったという事実は、その後の彼の活動を考える上で非常に重要である。周知の通り、第四次訪日活動を終えて帰国したすぐ後、一九〇九年二月五日（陰暦一月一日）に、羅喆は檀君教（大倮教）という宗教団体を創設している。本稿で考察した通り、羅喆はもともと政治に強い関心を持つ活動家であり、宗教とはあまり関係の無い人物であった。このような人物が、檀君教という宗教教団を新たに設立したのは、健康上の理由によるものではなかったかと考えられる。当時、糖尿病と言え、死の宣告を受けたのにも等しい難病であった。このような深刻な持病のために、羅喆は自己の死を覚悟しながら、政治運動から宗教活動へと方向転換をしたものと考えられる。

また、檀君教（大倮教）の創設という観点から見ると、羅喆が行った第四次訪日活動は特に重要な意味を持つものである。この第四次訪日旅行

には、羅喆のほか、鄭薫模が同行している。鄭薫模は、一九〇九年二月に羅喆と共に檀君教の創立式（教団では「重光」と称した）を行った後、翌年の一九一〇年に羅喆が教団名を大倣教と改称した際、檀君教をそのまま乗って分派した人物である。それ以降、植民地朝鮮において、鄭薫模の率いる檀君教は大倣教と並ぶ檀君系教団となっていた。しかし、その分派の経緯を詳しく調べてみると、檀君教の中に一進会と連なる親日派の人物たちが多数おり、羅喆ら主流派と激しく対立をしていたことがわかる。この対立は、羅喆の第二次訪日における一進会系人士たちとの交流や、第四次訪日における鄭薫模の親日的な「狎官」活動が発端となったと考えられる。しかし、もはやこれについて論じる紙幅の余裕がないために、この問題については別稿にて詳しく論じることにした。

注

- ① 檀君教の創設に関しては、拙稿「韓末における檀君教の『重光』と檀君ナショナリズム」（『朝鮮学報』第一八〇輯、二〇〇一年七月）を参照。檀君教は韓国併合が行われた一九一〇年に教団名称を「大倣教」に変更した。以下、本稿では、「檀君教（大倣教）」と表記する。
- ② 羅喆に関する大倣教側の資料として以下のものがある。『大倣教重光六十年史』（大倣教総本司、一九七一年）の「大倣教略史」（二五〇～六頁）、金教献編・尹世復訳『弘巖神兄朝天記』（大倣教総本司、一九五四年、二〇〇二年復刻版）、申哲鎬『韓国重興宗教教祖論…弘巖羅喆大宗師篇』（韓国新宗教研究院、一九七九年）。以下、本稿では『大倣教重光六十年史』を『六十年史』と略称する。
- ③ 韓国政府は、羅喆に対して一九六二年に建国勲章・独立章を授与した。一九九三年七月には国家報勲処によって「今月の民族独立運動家」に選定された。その選定理由として、①一九〇六年の乙巳五賊暗殺計画、②一九一〇年の大倣教創設、③一九一六年の九月山三聖祠における殉死があげられた（国家報勲処ホームページ「나라사랑광장」「이달의

독립운동가」http://www.mpya.go.kr/narasarang/month_hero_list.asp参照）。さらに、二〇〇二年には韓国政府から「独立運動の父」と命名され、二〇〇五年九月には韓国文化体育観光部によって「今月の文化人物」に選定された。

④ 二〇〇一年八月二五日に、宝城文化院の主催で「弘巖羅喆の精神—現代の照明」というテーマで学術大会が開催された。二〇〇二年には「弘巖先生の崇高な民族精神と魂を継承発展させ、愛国愛族精神の学習の場所」を提供するための事業計画が立案された。これに沿って、宝城郡は二〇〇六年から羅喆の生家復元事業を推進し、二〇一三年に羅喆の故郷である筏橋邑七洞里錦谷村に生家が復元された。

⑤ 毎年、羅喆の命日である九月二二日（陰暦八月二五日）に羅喆先生追慕会が開かれている。二〇一三年九月二二日には同事業会の主管で、「独立運動の父羅喆先生の逝去九七周年」と題して、宝城郡主と宝城郡議会議長列席のもとに盛大な追慕会が開催された。また、その翌月には、全南順天報勲支庁と全羅南道教育庁の後援で「弘巖羅喆先生の精神回復ゴールデンベル大会」が筏橋高等学校で開催されている。

⑥ 「国学研究所、弘巖羅喆一〇〇周年追慕学術会議開催」『통일뉴스』二〇一六年五月八日付（<http://www.tongilnews.com/news/articleView.html?idxno=116553>）。これに先だって「国学研究」第一九輯（国学研究所、二〇一五年）に、金東煥「弘巖羅喆 죽음의 대倣教적意味」、신은용「弘巖羅喆研究一〇〇年の成果와課題」、이승호「弘巖羅喆과 한국철학—『神理大全』에 관한 철학的小考」などの論文が発表された。

⑦ 「羅喆先生の人生と精神」宝城郡ホームページ連載「『신아일보』二〇一五年二月二八日付（<http://www.shinailbo.co.kr/news/articleView.html?idxno=483069>）。

⑧ 정찬주『檀君의 아들: 独立運動의 大夫、檀君思想의 實踐者 弘巖羅喆先生 이야기』（작가정식、二〇一六年）。

⑨ 朴永錫「大倣教의 民族意識과 民族独立運動」『日帝下 独立運動史研究』（二潮閣、一九九三年）、朴烜「羅喆의 人物과 活動—大倣教創始以前—」『中心으로』『滿州韓人民族運動史研究』（二潮閣、一九九一年、二五六～七一頁）、朴性寿「独立運動의 아버지: 羅喆」(북캠프、二〇〇三年)などがある。

⑩ 朴烜「羅喆・金教猷・尹世復」(東亜日報社、一九九二年)、金東煥「己酉重光の民族史的意義」(『国学研究』第一輯、国学研究所、一九八八年)、金東煥「弘巖羅喆の思想と独立運動方策」(『韓国独立運動史研究』第一輯、韓国民族運動史学会、二〇〇二年)。

⑪ 日本外務省外交史料館所蔵『不逞団関係雑件鮮人ノ部・鮮人ト宗教』を原文掲載した『韓国近代史資料集成(三八)・宗教運動篇』(国史編纂委員会編、二〇〇二年)が韓国で刊行されたが、その中に羅喆関連の記事が収録されていることが明らかとなった。二〇〇一年以前に行われた羅喆研究では、この資料についてまったく言及されていない。また、二〇〇二年以降に発表された研究においても、羅喆の抗日民族主義的な側面を重視する研究では、この資料を無視している。筆者はかつて、(社)国学研究所の依頼を受けて、この資料の韓国語翻訳を行った。佐々充昭訳注「要視察外国人挙動関係雑纂(八)における羅喆関連記事」(『国学研究』第八輯、二〇〇三年一月、三八三〜四〇三頁)を参照。なお、現在では、韓国の国史編纂委員会が提供している「韓国史データベース」(<http://db.history.go.kr>)で、この資料を含め、旧韓末から植民地期までの歴史資料を網羅的に検索できるようになっている。本稿でも、この韓国史データベースを利用した。

⑫ 趙峻熙「日本속의 国学聖地을 찾아서」(『알소리』第一号、한뿌리、二〇〇六年、二四〜五九頁)、趙峻熙「大倭教重光聖地 東京蓋平館과 北村翠雲亭에 대한 宗教地理學的考察」(『国学研究』第八輯、国学研究所、二〇〇三年一月)。筆者は二〇〇四年一月に趙峻熙・吳英燮の両氏および社團法人国学研究所と共同で羅喆の訪日活動の足跡をたどる調査を行った(『宗教新聞』第一四三五号、二〇〇五年一月五日付、第一六面「弘巖が泊まったタタミ部屋旅館、太栄館(原文韓国語)」を参照)。

⑬ 吳英燮「大倭教創始以前 羅寅永의 民族運動」(『韓國民族運動史研究』第三九輯、韓國民族運動史学会、二〇〇四年六月、二一〇〜二二一頁)。

⑭ 以下、羅喆の経歴に関しては、先の脚注にあげた関連論著を参照した。なお、職歴や就労年などに関して論著毎に若干の違いが見られるが、本稿では一九一六年に九月山三聖祠で自決した際に書き残された羅喆の親筆履歷書に依拠した。この履歷書は、申哲鎬、前掲『韓国中興教祖論・弘巖

羅喆大宗師篇』に附録一六「履歷書」として掲載されている。

⑮ 一九〇九年二月に檀君教(大倭教)を創設した際に「喆」と改名し、「弘巖」という号を使用するようになった。本稿で考察対象とする旧韓末期には「羅寅永」と呼ばれていたが、本稿では羅喆の名前で統一する。

⑯ 族譜として、羅俊洙編輯『羅州羅氏松島公派譜』(羅性均発行、太陽社、一九九七年)が公刊されている。同書の四六頁に羅喆の経歴が記されている。

⑰ 羅喆が謳った即興詩とは「新燕詩」というもので、羅喆の困窮した状況を金允植に訴える詩であった。金允植はこの詩を読んで称賛し、自分の家に来るように誘った(申哲鎬、前掲『韓国中興教祖論・弘巖羅喆大宗師篇』九六〜七頁)。この逸話は、白崗趙肇韓(上海臨時政府國務委員、朴正熙大統領顧問、順天出身国会議員を歴任)と孤松金一洙(羅喆の孫婿)の証言による。かつて順天地方の老儒学者たちはこの新燕詩を吟じて羅喆の逸話に花を咲かせたという(同書、一一四頁)。

⑱ 金允植に関しては数多くの先行研究があるが、紙幅の制約のために詳述を避ける。彼の経歴に関しては主に、権錫奉「金允植全集解題」(韓國学文献研究書編「金允植全集(一)」)亜細亜文化社、一九八〇年、五〜一八頁)を参照した。

⑲ 『高宗実録』卷二四、高宗二四(一八八七)年五月二十八日甲申条。『高宗時代史』第二集、高宗二四(一八八七)年五月二十八日条。

⑳ 申哲鎬、前掲『韓国中興教祖論・弘巖羅喆大宗師篇』三〇頁。

㉑ 「羅文卿(寅永)及甲年自京来、文卿為我孤寂共住計也」(『統陰晴史(上)』卷八、建陽二年丁酉二月二十八日条、国史編纂委員会、一九六〇年、四一九頁)。

㉒ 『統陰晴史(上)』卷八、光武元年丁酉二月二日条、四四五頁。

㉓ 「羅文卿(寅永)使喚奇童随到、金寿南・曹錫亨・柳千万・趙雲成等出来、飯罷發行、終身之流、生還無期、兄弟子姪臨岐訣別、其情景不堪道也、垂淚相別、惟祝保重而已」(『統陰晴史(上)』卷八、光武元年丁酉二月二十八日条、四四七頁)。

㉔ 『統陰晴史(上)』卷八、光武二年戊戌二月十三日条、四五二頁。

㉕ 『統陰晴史(上)』卷八、光武二年戊戌二月十六日条、四五二頁。

- ②⑥ 『続陰晴史(上)』巻八、光武二年戊戌六月二六日条、四八〇頁。
- ②⑦ 『続陰晴史(上)』巻九、光武三年己亥一月一三日条、五〇一頁。
- ②⑧ 「余於丁酉冬、以罪長流濟州、今為五年、羅記注寅永本名斗永、今改寅永字文卿、号経田、棄家來随、与同患難：与余為十一人、日夕相従、或飲酒・賦詩、以散羈愁」(『続陰晴史(上)』巻一〇、光武五年辛丑二月一九日条、五四九頁)。
- ②⑨ 「文卿(羅寅永)於去年臘月十九、遭其夫人之喪、自京転便聞之、素知文卿内助甚賢、有桓孟之德、家雖貧寒、子女皆過年、未成娶、然安貧無戚戚之色、文卿随我五六年、拋其家事、而恃有賢内、不以家事為念、今聞此報、其情理之悲絶、家事之蒼茫、令人酸鼻、勢將從速還家、撫存諸孤、而大洋隔之、船便難得、可悶可悶」(『続陰晴史(上)』巻一〇、光武五年辛丑四月一八日条、五五八頁)。
- ③⑩ 『続陰晴史(上)』巻一〇、光武五年辛丑六月一〇日条、五八七頁、および、同六月一九日条、五八九頁。
- ③⑪ 『続陰晴史(上)』巻一〇、光武五年辛丑二月六日・八日条、六一一頁。
- ③⑫ 『続陰晴史(下)』巻一〇、光武六年壬寅一月九日条、三二頁。
- ③⑬ 例えば、『続陰晴史(下)』巻一〇、光武七年癸丑一月八日条(三六頁)、同九月二六日条(五八頁)、光武八年甲辰一月二二日条(一一七頁)などを参照。
- ③⑭ 「呂島謫客徐養泉(周輔)書、自木浦転到、今月初三出也：文卿(羅寅永)間見新生孫兒感、又以身病家故、尙未得抽身云」(『続陰晴史(下)』巻一〇、光武七年癸丑九月九日条、五六頁)。
- ③⑮ 『続陰晴史(下)』巻一〇、光武七年癸丑三月一二・一三日条、四一・二二頁。
- ③⑯ 呉瑛燮、前掲「大倭教創始以前羅寅永の民族運動」二〇七頁。
- ③⑰ 『続陰晴史(下)』巻一〇、光武七年癸丑二月二三日条、六五頁。
- ③⑱ 『続陰晴史(下)』巻一〇、光武七年癸丑二月二五日条、六五頁。
- ③⑲ 金玉均の第一次訪日の時期については諸説あるが、本稿では、琴秉洞『金玉均と日本―その滞日の軌跡』(緑蔭書房、一九九一年、五一頁)に従った。

- ④⑩ 井上角五郎『金玉均君に就て』(中央朝鮮協会、一九三七年、七頁)。
- ④⑪ 金玉均の三和思想は、駐日清国外交官であった黄遵憲の著書『朝鮮策略』で説かれた日清韓連盟論と福澤諭吉の開明独立論の影響によるものであったとされる。古筠記念会編『金玉均伝(上巻)』(慶応出版社、一九四四年、一三頁)。なお、本書を編纂した古筠記念会は井上角五郎らが設立したものであり、本書は金玉均五〇周忌を記念して出版された。本書の巻頭には「金玉均伝」と大書された頭山満の題簽と、宇垣一成・頭山満・尹致昊の題字が掲載されている。
- ④⑫ 井上角五郎、前掲『金玉均君に就て』一〇頁。
- ④⑬ 甲申政変に関しては、金玉均自ら政変の顛末を叙述した『甲申日録』(韓国学文献研究所編『韓国近代思想叢書』金玉均全集、亜細亜文化社、一九七九年に所収)を参照。
- ④⑭ 田保橋潔『近代日鮮関係の研究(下)』(朝鮮総督府中枢院、一九四〇年、一六七頁)。
- ④⑮ 韓国学文献研究所編、前掲『金玉均全集』の李光麟『金玉均全集』解題」五頁。
- ④⑯ 石河幹明『福澤諭吉伝』巻三(岩波書店、一九三三年、三四六・七頁)。
- ④⑰ 金玉均は日本政界の多彩な人士たちと交流を行った。琴秉洞『日本人の朝鮮観―その光と影』(明石書店、二〇〇六年)によると、本稿でとりあげた人物たち以外にも、榎本武揚(七九頁)、板垣退助(八八頁)、須永元(一一六頁)らが金玉均と交流して彼の立場に賛同を示し、さらに尾崎行雄(二四三頁)は金玉均の朝鮮近代化構想に大きな期待を寄せたとされる。
- ④⑱ 前掲『東亜先覚志士記伝(上)』の一〇「大井憲太郎一派の大阪事件」九三頁。
- ④⑲ 「金氏我国に來りてより、斬髮に和服に操語も亦頗る慣熟し、全然邦人に異ならず。平素着する羽織の定紋は、水に旭日を浮へたる者なり：水上の旭日は、朝日鮮やかなりと云ふの意にて、飽くまで朝鮮を身に引受て、事を仕遂くるの決心を示すものなり」(松本正純『金玉均詳伝』厚生堂、一八九四年、一三九・一四〇頁)。
- ⑤⑩ 葛生玄暲編輯兼発行『金玉均』(民友社印刷、一九一六年)「付録」の犬

養毅談「朝鮮第一の人物」(四〇頁)を参照。なお、本書は、金玉均の死後二十三周忌に配布するために、福澤諭吉の「京城乱始末記」と岡本柳之助の「日韓交渉之真相」をもとに編述されたものである(本書「例言」による)。

⑤1 金玉均と頭山満の関係については、勝生能久『東亜先覚志士記伝(上)』(黒龍会出版部、一九三六年)の八「金玉均と朝鮮改革運動」と一「頭山満を繞る対韓計画」、同『東亜先覚志士記伝(下)』「金玉均」の項目(六六二～二頁)に詳しく記されている。

⑤2 前掲『東亜先覚志士記伝(上)』一一八頁。

⑤3 西尾陽太郎解説『頭山満翁正伝(未定稿)』(葦書房、一九八一年、一一八頁)の(其二)「金玉均との交遊」(昭和十八年二月一九日速記)。葛生玄暉、前掲『金玉均』「付録」の頭山満談「噫噫金玉均」四一～二頁。

⑤4 玄洋社社史編纂会編輯兼発行『玄洋社社史』(一九一七年、二四六～七頁)。

⑤5 消息「三風月記、頭山満의金玉均이약이」(『三千里』第七卷第九号、一九三五年一〇月、五五頁)。

⑤6 前掲『東亜先覚志士記伝(上)』一二二頁。

⑤7 吉田俊男『天下の快傑・頭山満』(成功雜誌社、一九二二年、一九〇頁)。

⑤8 頭山翁談話「金玉均と金策」(前掲『東亜先覚志士記伝(上)』一四一頁)に詳しい。

⑤9 藤本尚則『巨人頭山満翁』(文雅堂書店、一九四二年、三三三頁)。

⑥0 前掲『東亜先覚志士記伝(上)』一二〇頁。

⑥1 前掲『頭山満翁正伝(未定稿)』一二二頁。藤本尚則、前掲『巨人頭山満翁』一八九～一九一頁。

⑥2 田中惣五郎『東洋社会党考』(一元社、一九三〇年、六五～六頁)。

⑥3 樽井藤吉『自記実歴』(田中惣五郎、前掲『東洋社会党考』六六頁)。

⑥4 琴秉洞、前掲『日本人の朝鮮観―その光と影』九七頁。

⑥5 田中惣五郎、前掲『東洋社会党考』六頁。

⑥6 同右、一六三頁。

⑥7 同右、一六四頁。および、前掲『東亜先覚志士記伝(下)』二八二頁。

⑥8 森本藤吉著述兼発行『大東合邦論』(一八九三年)の「国号釈義」(五

頁)、「聯合方法」(一二七頁)、「論清国宜与東国合縦」(一三二頁)を参照。

⑥9 『大東合邦論』の序文によると、本書は刊行の九年前、即ち一八八四年にすでに著述されていた(前掲『大東合邦論』序、七頁)。この頃、樽井藤吉は金玉均を支援するための資金を援助してもらうために頭山と面会した。その後、彼は玄洋社を訪れて『万国公法』を学んだ。そこで、「瑞西の中邦は、普王の領土でありながら猶且つ瑞西聯邦の一に加わって居る」という章を読んで、「朝鮮は中国に臣事して居るものの、日本と聯邦になることは一向差支へない」と考えた。「この日鮮聯邦論こそは、後の樽井の著『大東合邦論』の基因を為すもの」であった(田中惣五郎、前掲『東洋社会党考』一六六～七頁)。

⑦0 宮崎滔天「朝鮮のぞ記」(『宮崎滔天全集』巻四、平凡社、一九七三年、三五九頁)。

⑦1 宮崎滔天「金玉均先生を懷ふ」(『宮崎滔天全集』巻四、平凡社、一九七三年、二八一頁)。なお、「金玉均先生を懷ふ」は、大正五(一九一六)年の金玉均二十三回忌に際して滔天が記した一文で、葛生玄暉、前掲『金玉均』(一九一六年)の中に掲載されたものである。

⑦2 同右、二八一～二頁。

⑦3 同右、二八三頁。

⑦4 「余叩頭感謝して酒盃を献ずれば、彼受けて之を飲み、且つ自ら大声を発して朝鮮歌を誦し、又余に命じて詩を吟ぜしむ。偶魚躍つて舟中に入る。彼喜んで曰く吉兆なりと。因て捕へ祝して海に投ず。中宵月傾き風起るに及んで、共に月明の詩を唱へて帰る」と記している。宮崎滔天『三十三年の夢』一九〇二年(『宮崎滔天全集』巻一、平凡社、一九七一年、六二頁)。

⑦5 前掲『東亜先覚志士記伝(上)』一二四頁。金玉均のこの醜態のために、長年来の友人であった朴泳孝は金玉均と絶交したとされている。

⑦6 前掲『玄洋社社史』四三二～三頁。

⑦7 古筠記念会編『金玉均伝(上巻)』(慶応出版社、一九四四年、一五頁)。

⑦8 前掲『東亜先覚志士記伝(上)』一二八頁。

⑦9 一八八六年六月頃に別の刺客である池運永による金玉均暗殺企図事件

が起こった。この時、池運永が携帯していた書類の中に、李鴻章が金玉均を捕らえよと書かれたものがあるという噂が流れ、金玉均は李鴻章に宛てた手紙を記した。この書簡（『与李鴻章書』）は実際に送られることはなかったが、同年七月一日付の『東京日日新聞』に掲載された。その内容は、朝鮮を中立国として、中国と善隣関係を結ぶことによって欧米各国と対抗しようとするものであった。「…借日本之兵力此固出於事勢之迫不得已焉、玉均粗知天下大勢利害之關係、貴国東亞之大局、与我国有自然唇齒之勢、玉均豈以渺然一身、故生罅隙於其間之理哉…閣下何不推尊大清国皇帝陛下、為天下之盟主、布公論於欧米各大国、与之連統立朝鮮為中立之國、作万全無危之地、閣下繼以老練手段、尽善隣友睦之誼、固結輔車之盟、以展東亞之政略、則此不独朝鮮之幸、恐亦為貴国之得策…」(韓国学文献研究所編、前掲『金玉均全集』一五一～二頁)。この書簡は、鈴木省吾編『朝鮮名士金氏言行録』(博文堂、一八八六年、一二四～八頁)にも掲載されている。

⑧0 葛生玄暉、前掲『金玉均』三七頁。

⑧1 井上角五郎、前掲『金玉均君に就て』二八～九頁。

⑧2 葛生玄暉、前掲『金玉均』二八頁。

⑧3 田保橋潔『近代日鮮關係の研究』(朝鮮総督府中樞院、一九四〇年、一七九頁)。

⑧4 古筠記念会編、前掲『金玉均伝(上巻)』一五頁。

⑧5 前掲『東亜先覚志士記伝(上)』一二七頁。

⑧6 古筠記念会編、前掲『金玉均伝(上巻)』四七頁。

⑧7 これに関して頭山は次のように述べている。「金は『李経芳に何か土産を持って行きたいが何もない、君の秘蔵の刀を呉れ』と申出た。所が此刀といふのは三条小鍛冶の鍛へた尤物で手放す事が出来なかつたから、きつぱり断りをいふてやると、金は益々せがんで来る。…僕が『やらんといふに二言はない。夫程欲しければ盗んでいったらよろう』と云ふと、彼は『そんなら盗んで行く』と云つて…持つて行つた。…李経芳に贈る刀も身をだに護る用を為さずして哀れな死に様を遂げた」(同右、四七頁)。

⑧8 金玉均暗殺の話は、前掲『東亜先覚志士記伝(上)』(一三三～四頁)、前掲『玄洋社社史』(四三一～四頁)、田保橋潔『近代日鮮關係の研究』(朝

鮮総督府中樞院、一九四〇年)の第二章「金玉均暗殺事件」(一三五頁)に詳述されている。

⑧9 松本正純『金玉均詳伝』(厚生堂、一八九四年、一三七頁、一四五頁)。

井上角五郎、前掲『金玉均君に就て』二頁、三〇頁。

⑨0 琴秉洞、前掲『金玉均と日本―その滞日の軌跡』七六一頁。

⑨1 前掲『玄洋社社史』四三五頁。

⑨2 明治二七年四月五日付で時事新報社を筆頭に毎日新聞、読売新聞など一五の新聞社が連名で募集した(松本正純『金玉均詳伝』厚生堂、一八九四年、一三・一六頁)。

⑨3 後に、犬養毅、頭山満らの支援で東京の青山霊園の外人墓地に金玉均の墓が建てられた。

⑨4 宮崎滔天「金玉均先生を懷ふ」(前掲『宮崎滔天全集』巻四、二八三頁)。

⑨5 同上、二八四頁。アボジは朝鮮語で父という意味であるが、金玉均の愛称でもあった。「アボジは阿父師なり、金君に対する尊称なり」(宮崎滔天『三十三年の夢』、前掲『宮崎滔天全集』巻一、六二頁)。

⑨6 上村希美「宮崎兄弟伝…日本篇(下)」(葦書房、一九八四年、二五八頁)。

⑨7 榎本泰子「宮崎滔天―万国共和の極楽をこの世に」(ミネルヴァ書房、二〇一三年、四七頁)。

⑨8 吉田俊男、前掲『天下の快傑…頭山満』一四八～九頁。

⑨9 「金の屍体は同年四月一日楊花鎮に於て之を寸断し、その首と四肢とは獄門に梟し、その他は漢江に投じて魚腹に葬らせ、梟首の場所には札を立て『謀叛大逆不道罪人玉均、当日楊花津頭不待時凌遲処斬』と記し、残忍無情言語に絶する惨刑に処した」(前掲『東亜先覚志士記伝(上)』一三四頁)。

⑩0 福澤諭吉のグループも、金玉均暗殺の背後に李鴻章の画策があったと見ていた。これに関しては、当時外務次官をしていた林董の著書『後は昔の記』を引用しながら、「即ち此報の天津に達するや、李鴻章は朝鮮国王に向つて祝電を發し、一方北洋艦隊の靖和号に天津に居た朝鮮官吏を乗込ませて上海に急派し、金の死体を收容し、刺客洪鍾宇をも同乗せしめて、これを朝鮮政府に引渡した。これに拠つて見れば、金を上海に誘出してこれ

を斃したのは決して朝鮮人の企のみでなく、其首謀者は李鴻章其人であり、しかも多年に亘る組織的計画の下に行はれた」ものであると述べている（石河幹明、前掲『福澤論吉伝』巻三、三九三頁）。

⑩① 三浦は閔妃に関して次のように述懐している。「王妃は女性としては実に珍しい才のある豪らい人であった。王妃は国王の椅子の裏の襖を開け、其処から口を出して、国王に何角と指図をするので、実質上の朝鮮国王は此王妃だと謂っても好いのである」（三浦梧楼述『観樹將軍回顧録』政教社、一九二五年、三二四頁）。

⑩② 岡本柳之助の著作として以下のものがある。岡本柳之助述、平井晩村編『風雲回顧録』（武俠世界社、一九一二年）、岡本柳之助著、井田錦太郎編『岡本柳之助論策・附小伝』（田中三七発行、一八九八年）、岡本柳之助編『日魯交渉北海道史稿』（風月書店、一八九八年）、岡本柳之助著『政教中正論』（村上書店、一八九九年）。本稿では、岡本の経歴に関して、『風雲回顧録』、『岡本柳之助論策・附小伝』の「小伝」、前掲『東亜先覚志士記伝（下）』『岡本柳之助』の項目を参照した。

⑩③ 前掲『岡本柳之助論策・附小伝』「小伝」一七五頁。

⑩④ 同右、一七六頁。

⑩⑤ 同右、一八一頁。

⑩⑥ 葛生玄暁、前掲『金玉均』八頁。

⑩⑦ 葛生玄暁、前掲『金玉均』二七頁。前掲『東亜先覚志士記伝（上）』

一二三頁。

⑩⑧ 葛生玄暁、前掲『金玉均』「付録」の岡本恕子談（岡本柳之助未亡人）

「金玉均氏と岡本柳之助」四八頁。

⑩⑨ 前掲『東亜先覚志士記伝（上）』六六二頁。

⑩⑩ 葛生玄暁、前掲『金玉均』「付録」の岡本恕子談（岡本柳之助未亡人）

「金玉均氏と岡本柳之助」四八頁。

⑩⑪ 前掲『東亜先覚志士記伝（下）』一八七頁。

⑩⑫ 菊池謙讓『大院君伝』朝鮮最近外交史、附王妃の一生（日韓書房、

一九一〇年、一頁）。

⑩⑬ 岡本柳之助述、前掲『風雲回顧録』二七二頁。

⑩⑭ 日本側の記録には次のように記されている。「此事件ノ主謀者ハ三浦公

使ニテ大院君ト同公使トノ間ヲ周旋シタルハ岡本柳之助ト察セラル」（二）「王妃弑害事件ニ関スル小村ノ措置及状況報告二」一八九五年一月一七日「駐韓日本公使館記録」巻七、五「機密通常和文電報往復（一二）」（第二冊）。

⑩⑮ （六）「朝鮮政況報告ニ関スル件」、一八九四年二月二十八日（駐韓日本公使館記録）巻五、六「内政釐革ノ件（二）」。

⑩⑯ この事件のことを朝鮮側では乙未事変と称する。乙未事変に関して、朝鮮側の資料では、『高宗時代史』『高宗実録』『高宗実録』『承政院日記』『日省録』の高宗三二（一八九五）年八月二〇日戊子条に記事が載せられている。本稿では、特に以下の資料を参照した。（一）「明治廿八年十月八日王城事変ノ顛末ニ付具報」機密第三六号、一八九五年一月七日（駐韓日本公使館記録）巻八、四「各領事館其他往復（二）」。また、玄洋社側の記録として、前掲『東亜先覚志士記伝（上）』の「閔妃事件」（五一頁）がある。

⑩⑰ 岡本柳之助述、前掲『風雲回顧録』（二六七頁）、前掲『岡本柳之助論策・附小伝』の「大院君入闕始末」（一四〇～八頁）、前掲『東亜先覚志士記伝（下）』『岡本柳之助』の項目（二八八頁）に詳しい。

⑩⑱ （二〇）「大院君入闕ノ顛末」内信、一八九四年七月三十一日（駐韓日本公使館記録）巻一、九「諸方機密公信任（二）」。

⑩⑲ （二四）「軍務顧問官岡本柳之助楠頼幸彦応聘依頼（一）」照会第二号、一八九五年二月二日（駐韓日本公使館記録）巻五、一〇「顧問官進退及本邦人雇聘」。

⑩⑳ 「朕其ヲ庄抑センカ為メ：宗廟ニ誓告シテ曰ク后嬪宗戚ハ国政干渉スルヲ許サスト：王后閔氏ヲ廢シテ庶人トナス：開国五百四年八月廿二日奉」。前掲『岡本柳之助論策・附小伝』の「大院君入闕始末」に掲載された「詔勅」（二四六～八頁）を参照。

⑩㉑ 前掲『岡本柳之助論策・附小伝』一四四頁。

⑩㉒ 彼らは日本に送還された後、一八九六年一月に広島裁判所の予審において全員無罪となった。「明治廿八年（一七二二、一七二九、一七六六、一九七二号）予審終結決定書」（前掲『岡本柳之助論策・附小伝』一九四～二〇三頁）参照。その判決文では岡本に対して、「一同ハ柳之助ヲ総指

揮者トシ孔德里ニ到リ李周会ノ一行ト共ニ翌（十月：引用者）八日午前三時頃大院君ノ輜輿ヲ擁シテ出発シタリ而シテ被告柳之助ハ其際表門前ニ一同ヲ集メ入城ノ上狐ハ臨機処分スベシト号令シテ王后陛下殺害ノ事ヲ教唆シ未タ其事実ヲ知ラサリ被告益太郎数名ヲシテ殺害ヲ決セシメ」（同書、二〇一頁）たとしているが、証拠不十分のために「各被告人総テ免訴、放免」（同書、二〇三頁）と宣告された。

⑫③ 『統陰晴史（上）』巻七、高宗三十二年乙未九月一日条、三七九頁。

⑫④ 『統陰晴史（下）』巻一二、隆熙元年丁未八月二十九日条、一二〇頁。

⑫⑤ 『統陰晴史（下）』巻一二、隆熙元年丁未一〇月七日条、一二六頁。

⑫⑥ 『統陰晴史（下）』巻一四、壬子五月二日条、三六七頁。

⑫⑦ 日本に滞留した朝鮮人亡命客の当初の刑罰と、一九〇二年に減刑された内容に関しては、「表一：日本に在留した朝鮮人亡命客の一覧」を参照。

⑫⑧ 義和宮（一八七七～一九五五）は、高宗の第五子で名を李垺といった。一八九一年に義和君に封じられ、一九〇〇年には義王（義親王）に昇封された。一九〇〇年に米國に留学し、一九〇五年四月に帰国して赤十字社の総裁となった。韓国併合後は、公族に列せられ、一九一一年に陸軍中將となつてゐる（牧山耕蔵編輯兼発行『朝鮮紳士名鑑』一九一一年、一一～三頁）。

⑫⑨ （二〇五）『日本滞留韓人亡命者ノ性向報告』機密受、一八九七年七月二二日（『韓国近代史資料集成』巻一、「要視察韓人挙動（二）」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓人ノ部（二）」、三「本邦渡来朝鮮人ノ動静探偵方ノ件」）。

⑫⑩ 大院君と李垺との関係については以下を参照。（一四）『朝鮮政況ノ報告第二』機密第二二七号、一八九四年二月二八日（『駐韓日本公使館記録』巻五、五「機密諸方往（二）」）。

⑫⑪ 「東学党ノ件ニ就テモ…大院君、李垺ハ嘗テ陰二人ヲ遣ハシテ同党を煽動シタルハ蔽フベカラザル事実ナリ」、井上馨「朝鮮改革ノ至難ニ付具申」（伊藤博文編、平塚篤校訂『朝鮮交渉資料（下巻）』秘書類纂刊行会発行、一九三六年、三四三頁）。

⑫⑫ 木村幹『高宗・閔妃』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年、二二一～二頁、二二三頁）。

⑬③ この事件の経緯は以下に詳しい。（一三）『大院君李垺ノ陰謀ニ関スル顛末報告』機密第四八号、一八九五年五月九日（『駐韓日本公使館記録』巻七）。

⑬④ 菊池謙讓、前掲『大院君伝』二二七頁。

⑬⑤ 同右、二頁。

⑬⑥ 同右、二四七頁。

⑬⑦ 同右、二四七～二四八頁。

⑬⑧ 同右、二四九頁。

⑬⑨ 『親日人名辞典（親日問題研究所人名篇三）』（民族問題研究所、二〇〇九年）の「李垺の項目」（一五三～四頁）参照。

⑬⑩ 趙義淵の経歴については、前掲『東亜先覚志士記伝（下）』「趙義淵」の項目（二二八頁）を参照。

⑬⑪ 「勅旨軍務大臣趙義淵日本国兵士労問来往間軍務協弁権在衡署理大臣事務総理大臣奉勅」（『官報』開国五〇四年二月一六日付）。

⑬⑫ 二八、三、六「朝鮮ヨリ戦地派遣ノ官吏ノ慰問ノ件」明治二八年三月六日、大本営参謀長楠瀬中佐、防衛省防衛研究所『陸軍省大日記』、日清戦役、大本営電報綴、「着電綴（八）」、国立公文書館「アジア歴史資料センター」（<https://www.jacar.go.jp/>）を参照（レファレンス番号：C0606097700）。この時、衣服・防寒服・食糧・日用品その他慰問物資が日本軍へ送り届けられた。

⑬⑬ 前掲『岡本柳之助論策…附小伝』一四三頁。

⑬⑭ 同右、一四八頁。

⑬⑮ 「今回ノ事変ハ…大院君及三浦公使ノ共謀ニ基キ…其関係者ハ朝鮮人中ニモ現軍部大臣趙義淵・訓練隊大隊長禹範然・李斗璜ヲ始メ其他大小ノ人員数多有之」（前掲（二）「明治廿八年十月八日王城事変ノ顛末ニ付具報」機密第三六号、一八九五年一月七日）。

⑬⑯ 反民族研究所編『親日派九九九人（二）』（돌베개、一九九三年、一五六頁）「趙義淵」の項目、および牧山耕蔵、前掲『朝鮮紳士名鑑』「男爵趙義淵」の項目（一五五～六頁）を参照。

⑬⑰ 「韓人亡命者趙義淵陸鍾允ノ兩人過般大坂ヨリ上京以来屢参謀本部ニ出入シ」（四四）「亡命者趙義淵等企画ノ件」機密送第六二号、一九〇二年

九月二三日、『駐韓日本公使館記録』卷一七、二「乙未亡命者（一・二）」。
 (148) (八一)「大阪滞留趙義淵・李軫稿・孫宏善・崔万淳ノ動靜報告」秘甲第三三〇号、一九〇〇年九月一〇日（『韓国近代史資料集成』卷二、「要視察韓國人挙動（二）」、「要視察外國人ノ挙動關係雜纂・韓國人ノ部（五）」）。
 (149) 張博（一八四八～一九二二）は一九〇九年三月に張錫周と改名している。彼は甲午改革時の一八九四年に法務大臣をつとめた。一八九六年に日本へ亡命した後、趙義淵の側近格として行動を共にしている。

(150) 「東学徒ノ大先生李祥憲ト云フ人カ三四年前ヨリ日本ニ渡リ大阪ニ滞在シテ普通ノ韓人ト交際シテ居リマシタケレトモ其人ノ東学ニ關係アル事ハ一人モ知人ナシ：李祥憲ト云フハ偽名ナリ本名ハ孫秉熙ト云フテ崔法軒ノ首弟子東学ノ伝鉢大先生ナリ：此人ハ姓名變更シテ内地ニ潜伏シ：」（二）「進歩會員ト称スル韓民集合ノ件ニ関スル具報」一九〇四年一〇月一五日、『駐韓日本公使館記録』卷二二、一二「馬・釜・木・群往来」の別紙「上件ニ関スル忠章ノ探查内容」。

(151) 「韓人ハ今テモ此人ノ行跡ヲ疑フケレトモ当地ニテハ李△△ト称スル故孫△△ナル事ハ知ルモノハ五六人アルノミナリ」（前掲（二）「進歩會員ト称スル韓民集合ノ件ニ関スル具報」一九〇四年一〇月一五日）。

(152) 「（孫秉熙は：引用者）亦タ京都ニハ韓國学徒三十余人ヲ携帯シテ各學校ニ入学シテ此等学徒ノ学資モ弁済シ学徒ノ身分モ監督シテ居ルニ付キ」（前掲（二）「進歩會員ト称スル韓民集合ノ件ニ関スル具報」一九〇四年一〇月一五日）。「孫秉熙ハ：先年本邦ニ渡航シ李祥憲ト改名シ韓國学生四五十名ヲ募集シテ學校ヲ設立シ數年間教育ニ従事シ居リシカ」（七三）「孫秉熙ニ関スル件」顧秘第三〇号、一九〇六年一月二九日、『駐韓日本公使館記録』卷二四、六「顧問警察事故報告」。

(153) 吳知泳著・梶村秀樹訳注『東学史』（平凡社、一九七〇年、二九五頁）。
 (154) 前掲（二）「進歩會員ト称スル韓民集合ノ件ニ関スル具報」一九〇四年一〇月一五日。

(155) これに関して、天道教側の資料には次のように記されている。すなわち、権東鎮と趙義淵の両名は、当時日本の陸軍參謀総長である田村怡与助と通じており、孫秉熙に田村を紹介して次のような策略を企てた。それは「日本の兵隊を商人に変装させて、秘密裡に各地の不通商港に入潜入させ

た後、吾が道儒（東学徒を指す：引用者）がこれに応じて京城を襲撃すれば、親露党を滅除することができ、親露党が壊滅すればロシアの勢力は必ず孤立する。この時に数十万の道儒が共にロシア人を攻撃すれば、ロシアは必ず敗れる」というものであった。これに対して、田村は非常に喜び、その計略を行おうと固く誓った。孫秉熙は弟の孫秉欽を本国に派遣して、全国の東学徒たちにその趣意を伝え、一挙蜂起の準備を行わせた。しかし、一九〇三年八月三日に孫秉欽が急疾のために釜山で没し、翌々日の五日に田村が没したために、この計画は霧散した。以上、李敦化編述『天道教創建史』天道教中央宗理院、一九三三年、三三頁（韓國学文献研究所編『東学思想資料集（貳）』亜細亜文化社、一九七九年、二二頁）を参照。これらの記事から、日露戦争に際して趙義淵と孫秉熙らが東学徒を蜂起させ、日本軍を背後から支援する計略を立てていたことが窺える。

(156) 権東鎮「韓末人物의 回想, 생각나는 대로 넷사람들」(『三千里』第六卷第五号、一九三四年五月、一〇二頁)。

(157) (五四)「韓國亡命者ノ談話：権東鎮ノ動靜」乙秘第四七八号、一九〇〇年八月三十一日（『韓国近代史資料集成』卷二、「要視察韓國人挙動（二）」、「要視察外國人ノ挙動關係雜纂・韓國人ノ部（五）」）。

(158) 『統監府文書』卷八、三「韓官人ノ経歴一般」、一〇四「吳世昌」。

(159) (三〇)「亡命者俞吉濬ノ使喚ニ係ハル陰謀暴露ノ件ニ関スル具申」機密第六二号、一九〇二年五月二日（『駐韓日本公使館記録』卷一七、二「乙未亡命者（一・二）」）。

(160) (二九六)「吳世昌・千章郁・崔德・権東鎮・陸鍾允ノ大阪訪問報告」特甲第三九八号、一九〇二年七月一五日（『韓国近代史資料集成』卷二、「要視察韓國人挙動（二）」、「要視察外國人ノ挙動關係雜纂・韓國人ノ部（六）」）。

(161) 「孫秉熙は：引用者 韓國各地ニ弟子八十万人程ト持ち居り候：目下ハ東京ニテ洋製室大家舎ニ住居シテ毎日趙氏（趙義淵を指す：引用者）・吳氏（吳世昌を指す：引用者）・権氏（権東鎮を指す：引用者）三人ト往来シテ万事相談ニ有之候」（前掲（二）「進歩會員ト称スル韓民集合ノ件ニ関スル具報」一九〇四年一〇月一五日）。

(162) (四四)「韓人動靜：趙義淵・李容翊・朴泳孝・李祥憲・金寬鉉ノ動靜」甲秘第四一号、一九〇四年三月一五日（『韓国近代史資料集成』卷三、「要

視察韓国入挙動(三)、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓国人ノ部(七)」など関連記事が多数ある。

- ¹⁶³ (一二)「亡命韓人ノ動静」甲秘第一七号、一九〇四年二月二五日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓国入挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓国人ノ部(七)」)。

- ¹⁶⁴ (一九)「亡命韓人ノ動静(其二)」甲秘第一九号、一九〇四年二月二〇日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓国人ノ部(七)」)。

- ¹⁶⁵ (二二)「李斗璜・李軫鎬・崔廷徳・李祥憲・朴泳孝等ノ動静報告」特甲第一一〇号、一九〇四年二月二二日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓国人ノ部(七)」)。

- ¹⁶⁶ (三八)「韓人動静・趙義淵・張博・李祥憲・金俊龍・劉世南・李容翊ノ動静」甲秘第三五号、一九〇四年三月九日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓国入挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓国人ノ部(七)」)。

その他の記録にも、「日露開戦ノ同時此人(孫秉熙を指す…引用者)ハ軍資金壹万円献納シ亦タ赤十字社ニモ三千円寄附シテ松方組ヨリ招見後褒状ヲ下賜ニ相成候」(前掲(二))「進歩会員ト称スル韓民集合ノ件ニ関スル具報」一九〇四年一月一五日とある。

- ¹⁶⁷ (三九)「韓人動静・李祥憲・樵東鎮一行ノ動静」甲秘第三八号、一九〇四年三月二一日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓国入挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓国人ノ部(七)」)。

- ¹⁶⁸ (二二七)「李祥憲ニ関スル情報照会依頼」甲秘第一九四号、一九〇四年八月二九日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓国入挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓国人ノ部(七)」)。

¹⁶⁹ 当時の孫秉熙がかなりの財力を有していたことについて次の様に記されている。「李祥憲始ノ名李圭完(或ハ云孫時秉)：第一同人ハ巨額ノ資金ヲ有シ且ツ之ヲ韓国有爲ノ子弟教育費其他有益ノ事業ニ投資シテ更ニ吝ム色ナキ」(一二三四)「李祥憲ノ身元及挙動ニ関シ回申」機密第八五号、一九〇四年九月七日、(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓国入挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓国人ノ部(七)」)。

- ¹⁷⁰ 「韓人李祥憲ハ：今回軍事費トシテ壹万円ヲ献納セシ」(一一〇)「韓人ノ

動静・李祥憲・徐熙淳ノ京都往来」高甲第一〇二号、一九〇四年二月二二日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓国入挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓国人ノ部(七)」)。

- ¹⁷¹ 前掲『天道教創建史』三二頁(『東学思想資料集(貳)』一一〇頁)。

- ¹⁷² 前掲『天道教創建史』五〇頁(『東学思想資料集(貳)』二二八頁)。

- ¹⁷³ 前掲『天道教創建史』四五頁(『東学思想資料集(貳)』二二三頁)。

- ¹⁷⁴ 「宮廷録事」『旧韓国官報』第二九三八号、光武八(一九〇四)年九月二二日(『韓国学資料叢書』巻一三、亜細亜文化社、一九七三年、八三〇頁)。

- ¹⁷⁵ 前掲(三〇)「亡命者兪吉濬ノ使噤ニ係ハル陰謀暴露ノ件ニ関スル具申」機密第六二号、一九〇二年五月二日。

- ¹⁷⁶ (二)「進歩会員ト称スル韓民集合ノ件ニ関スル具報」一九〇四年一月一五日(『駐韓日本公使館記録』巻二二、一二「馬・釜・木・群往来」の別紙「上件ニ関スル忠章ノ探查内容」)。

- ¹⁷⁷ (五)「亡命韓人千章郁件」機密第一号、一九〇五年一月一〇日(『駐韓日本公使館記録』巻二六、一二「各館来機密」)。

- ¹⁷⁸ これに関して、合同一進会が組織された際に行つた日本側の調査記録には次の様に記されている。「会員(合同一進会を指す…引用者)ノ重ナルモノハ韓国ノ独立保全ヲ図ル為メニハ軍事外交財政等凡テ同盟国ノ援助ヲ得ルニアラサレハ之レヲ達成スル能ハサル事ヲ知得シ居ル」(二三四)「一進会現況ニ関スル調査報告」韓駐参第五九八号、一九〇四年一月二二日、『駐韓日本公使館記録』巻二二、七「陸海軍往復…一進会」。

- ¹⁷⁹ 林鍾国著、反民族問題研究所編『親日派』(お茶の水書房、一九九二年、一〇五頁)。

- ¹⁸⁰ (二二四)「韓人李祥憲及趙義淵一派ノ動静」甲秘第二七六号、一九〇五年八月二六日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓国入挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂・韓国人ノ部(七)」)。

- ¹⁸¹ 葛生能久著『日韓合邦秘史(上)』(黒龍会出版部、一九三〇年、二三、四頁)。

¹⁸² 呉知泳、前掲『東学史』(二九九～三〇二頁)を参照。

¹⁸³ 以下は、『大韓季年史(下)』巻八、光武十一年丁未三月条(二二四～六頁)の内容を要約した。

¹⁸⁴ 呉基鎬(一八六五～一九一六)は、羅喆と同じ全羅南道の出身であり、羅喆と一心同体の如く常に政治活動を共にした人物であった。呉基鎬は都合三回に及ぶ訪日旅行にすべて同行し、一九〇九年二月の檀君教(大倭教)創設にも参与している。なお、羅喆の同志たちに関しては、拙稿「韓末における檀君教の『重光』と檀君ナショナリズム」(『朝鮮学報』第一八〇輯、二〇〇一年七月、三七～四一頁)を参照。

¹⁸⁵ 羅喆が日本政府に送った書簡の内容については、『大韓季年史(下)』巻七、光武九年乙巳十一月条(一六一～二頁)を参照。

¹⁸⁶ 伊藤博文へ宛てた書簡については、『梅泉野録』巻四、光武九年乙巳条、「伊藤博文에게 보낸 李沂 등의 上書」(三四四～五頁)、「与伊藤博文書」(『六十年史』二六～七頁)に掲載されている。

¹⁸⁷ 日本天皇へ宛てた上書については、『梅泉野録』巻四、光武九年乙巳条、「李沂 등이 倭皇에게 上書함」(三四三～四頁)、「上日皇疏」(『六十年史』二五～五頁)に掲載されている。

¹⁸⁸ 『続陰晴史(下)』巻一一、光武九年乙巳九月一六日条、一五三頁。

¹⁸⁹ 「寅永：以憂國爲己任、及赴日本東京、致書于政府及各省、又上書于日皇、所論謹嚴明快、謄報於各新聞、天下始知我韓之有人」(『大韓季年史(下)』第八卷、光武十一年丁未七月二九日条、二四六頁)。

¹⁹⁰ 「日本民党松村雄之進、主東洋平和之論者也、聞伊藤博文之勸調五約、喟然歎曰：時來相慰曰、凡爲國之道有二、曰王曰霸、今伊藤對韓之策、則非王非霸、其能長久而成就乎哉、其爲韓者惟當自勵自強、自立自由、則天必眷佑矣」(『大韓季年史(下)』第八卷、光武十一年丁未三月条、二二五頁)。

¹⁹¹ (二〇五)「要視察韓人渡航ニ関スル件」・羅寅永・呉基鎬ノ渡日」機密第一四号、一九〇五年七月二六日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓人挙動(三)」)、「要視察外國人ノ挙動關係雜纂」・韓人ノ部(七)」。『続陰晴史』にも、羅喆の第一次訪日に関する記事が記されている。それをみると、「郵便見羅文卿(寅永)二十一出書、海鶴・一史・小南(李

沂・尹柱瓚・呉基鎬)与文卿上書政府：政府不応：不得已往日本東京：綾州人梁漢默亦同行」(『続陰晴史(下)』巻一一、光武九年己巳八月一日条、一四八頁)とある。このことから、梁瀟とは梁漢默のことであったことがわかる。

¹⁹³ 「全羅南道天道教教徒梁漢默：」(『大韓季年史(下)』巻九、隆熙四年庚戌八月条、三八八頁)。

¹⁹⁴ (二二〇)「韓人ニ関スル件」・羅寅永・金英鎮・金俊龍ノ動靜」甲秘第三三四号、一九〇五年一〇月一三日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓人挙動(三)」)、「要視察外國人ノ挙動關係雜纂」・韓人ノ部(七)」。

¹⁹⁵ 大院君と李垞鎔は、日清戦争の際中に東学農民軍と密通していた。これに關して菊池謙讓は、「雲岬宮と東学本部の間に於ては秘密の往復頻々たり」(菊池謙讓、前掲『大院君伝』一六四頁)、「東学の教徒を煽動して王妃及其党与を絶滅せんと企てたりしは大院君の目的なり」(同書、一九三頁)と述べている。日本に亡命する以前から、李垞鎔と東学教徒との間には何らかの連絡ルートがあったものと思われる。

¹⁹⁶ (二二三)「韓国一進會員ノ入京」甲秘第三七〇号、一九〇五年一月一六日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓人挙動(三)」)、「要視察外國人ノ挙動關係雜纂」・韓人ノ部(七)」。

¹⁹⁷ (二二六)「韓人ノ来往」一進會員林礼渙一行及柳赫魯：兪吉濬ノ動靜」甲秘第三九三号、一九〇五年一月二八日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓人挙動(三)」)、「要視察外國人ノ挙動關係雜纂」・韓人ノ部(七)」。

¹⁹⁸ (二二四)「韓人ニ関スル件」・朴泳孝・李容九・義和宮ノ動靜」甲秘第三七七号、一九〇五年一月二〇日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓人挙動(三)」)、「要視察外國人ノ挙動關係雜纂」・韓人ノ部(七)」。

¹⁹⁹ 前掲『天道教創建史』五三頁(『東学思想資料集(貳)』二二二頁)。

²⁰⁰ (二二六)「韓人ノ来往」一進會員林礼渙一行及ヒ柳赫魯：兪吉濬ノ動靜」甲秘第三九三号、一九〇五年一月二八日(『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓人挙動(三)」)、「要視察外國人ノ挙動關係雜纂」・韓人ノ部(七)」。

²⁰¹ 『続陰晴史(下)』巻一一、光武九年己巳八月一五日条、一四九頁。

- 『統陰晴史（下）』巻二一、光武九年己巳八月二七日程、一四九頁。
- 203 前掲『日韓合邦秘史（上）』二五頁。
- 204 「三十一日：趙秉鎬爲參政、日公使林樞助陸奏、余有才可任樞要、請特赦用之」（『統陰晴史（下）』巻二一、光武九年己巳八月三一日条、一五一頁）。
- 205 玄洋社側の資料には、次のように記されている。「彼が後年済州島に終身刑の配流を蒙つてゐる際、外部大臣の朴泳孝は林樞介公使に『予にして若し済州にある金允植先生を救い出し得たなら、何物の犠牲も辞する所ではない。目下の我が地位を賭しても金允植先生の配流を釈かんことを切望する』と切々の情を訴へたと云われている」（前掲『東亜先覚志士記伝（下）』七九九頁）。このような記録からも、日本における朝鮮亡命客の帰国運動と金允植の流配解放運動は同列に扱われていたことが窺える。
- 206 「二十四日：羅文卿（寅永）李小南（吳基鎬）書自不浦來、方留東京、一月七日發書也、乏資不能帰、李海鶴（沂）則先作戴星之行云、諸人情勢可悶」（『統陰晴史（下）』巻二一、光武一〇年丙午一月二四日程、一七〇頁）。
- 207 申哲鎬、前掲『韓国新興宗教教祖論：弘巖羅喆太宗師編』三七頁。
- 208 「羅文卿（寅永）喪其賢妾、踴涼無托身之所、甚悶」（『統陰晴史（下）』巻二一、光武十年丙午七月九日程、一八三頁）。
- 209 「文卿自日本還、至木浦舟中寄書」（『統陰晴史（下）』巻二一、光武十年丙午九月二七日程、一八七頁）。
- 210 以下、羅喆の第三次訪日に関しては、『大韓季年史（下）』巻八、光武一一年丁未三月条（二二四～六頁）を参照。また、（八）「政府顛覆ト大臣暗殺ニ関スル件」一九〇七年四月一七日（『統監府文書』巻九、一〇「南韓大討伐実施計画其他」）にもほぼ同じ内容のことが書かれている。
- 211 『大韓季年史（下）』巻八、光武一〇年丁未三月条、二四九頁。
- 212 『大韓季年史（下）』巻八、光武一一年丁未三月条、二二六頁。なお、この記事からだけでは、羅喆らが内田良平と実際に面会したかどうかは分からない。
- 213 前掲（八）「政府顛覆ト大臣暗殺ニ関スル件」一九〇七年四月一七日。
- 214 （二七四）「韓人ノ行動ニ付テ：羅寅永・吳基鎬・康達天ノ動靜」乙秘第

旧韓末における羅喆の訪日活動

- 九一九号、一九〇六年二月四日（『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓国人挙動（三）」、「要視察外国人ノ挙動關係雜纂・韓国人ノ部（七）」）。
- 215 以下は、（二七五）「韓人ノ行動ニ付テ：羅寅永・吳基鎬ノ岡本柳之助訪問」乙秘第九二六号、一九〇六年二月五日（『韓国近代史資料集成』巻三、「要視察韓国人挙動（三）」、「要視察外国人ノ挙動關係雜纂・韓国人ノ部（七）」）を参照。
- 216 前掲（二七五）「韓人ノ行動ニ付テ：羅寅永・吳基鎬ノ岡本柳之助訪問」乙秘第九二六号、一九〇六年二月五日。
- 217 前掲『東亜先覚志士記伝（下）』一八七頁。
- 218 松村が死去した後、甥の吉富莞爾によって伝記が編纂され、『松村雄之進』（吉富莞爾編輯兼発行、一九二二年）として刊行された。本書の冒頭には頭山満の弔辞および黒龍会主幹の肩書きで内田良平の弔辞が掲載されている。松村の経歴に関しては、渡辺五郎・宮崎繁吉「松村雄之助君小伝」（同書、一～七頁）に詳述されている。
- 219 冠峯生「台湾回顧録より」（前掲『松村雄之進』二二頁）。
- 220 これと関連して、岡本柳之助は一八九一年一月に北面の拓殖及び防備の対策として北海道義勇団の編成を政府並びに議會に建言している（前掲『岡本柳之助論策：附小伝』一八三頁）。また、一八九八年には「日魯交渉北海道史稿」（岡本柳之助編述、風月書店）を著している。このことから、北海道開拓に関する事柄で松村と岡本との間に何か関係があったことが窺われる。
- 221 以上、前掲『東亜先覚志士記伝（下）』「松村雄之進」の項目（五〇九頁）を参照。
- 222 前掲（八）「政府顛覆ト大臣暗殺ニ関スル件」一九〇七年四月一七日。
- 223 「東京ニ於テ近來組織セラレタル對韓同志会ノ連中ハ多クハ元對露同志會員タリシモノニシテ：松村勇之進：等ハ其重ナルモノニシテ同会ハ動モスレハ現政府ノ軟弱政策ヲ攻撃セントスル態度ニ出テントスル団体ナリ」（二二八）「警秘：内田良平ノ言動」一九〇九年二月一八日、『統監府文書』巻八、二「日韓合邦關係書類」。
- 224 前掲『日韓合邦秘史（下）』二〇〇頁。
- 225 前掲『東亜先覚志士記伝（中）』四四～五頁。

- ②⑤ 藤本尚則、前掲『巨人頭山満翁』（三八七～八頁）で、一九〇九年五月にイブラヒム氏が来日し、頭山と面談した時の様子が記されている。
- ②⑦ 『大東』第三年第四号、明治四三（一九一〇）年二月一日付、第二面「社論」「覚醒せよ！亜細亜十億萬の民衆」。
- ②⑧ 『大東』第三年第四号、明治四三（一九〇九）年二月一日、第一面の巻頭言。
- ②⑨ 『大東』第四年一号、明治四四（一九一一）年一月一日、第一面「無縫塔」。
- ②⑩ 関妃暗殺事件の主犯であった三浦梧楼と岡本は共に熱烈な仏教信者であった。しかし、三浦は禅宗の信者であり、岡本は日蓮宗を信奉した。岡本は後年、三浦と宗教論議をした。この時、三浦は「参禅の妙味」を説き、一方、岡本は「日蓮宗の真髓」を主張して一歩も譲らず、「お互に喧嘩をする為の研究もあるまい。これからは宗教に関する事だけは、決して議論せぬ」ことに決めたという逸話が伝えられている（前掲『風雲回顧録』二五一頁）。
- ②⑪ 前掲『岡本柳之助論策・附小伝』一八二頁。
- ②⑫ 前掲『風雲回顧録』二七九頁。
- ②⑬ 岡本柳之助、前掲『政教中正論』六頁。
- ②⑭ 岡本柳之助「全国仏教大会決議案理由書」（前掲『政教中正論』一三九～一四〇頁）。
- ②⑮ 前掲『風雲回顧録』二八〇頁。
- ②⑯ 韓国併合後、一九一六年に頭山満外有志九名は故金玉均の表彰に関する請願を日本衆議院に提出し（『毎日申報』一九一六年一月二六日付）、日本人頭山満外有志九名請願を提出すこと、衆議院は満場一致でこれを可決している（『毎日申報』一九一六年二月二五日付、「日本衆議院」頭山満外数人請願）。
- ②⑰ 以下は、『大韓季年史』第八卷、光武一一年丁未三月条（二二六～二五〇頁）と、前掲（八）「政府顛覆ト大臣暗殺ニ関スル件」一九〇七年四月一七日を参照した。
- ②⑱ 前掲（八）「政府顛覆ト大臣暗殺ニ関スル件」一九〇七年四月一七日。
- ②⑲ 葛生能久、前掲『日韓合邦秘史（上）』二〇六頁。
- ②⑳ これに関して、統監府側の記録には次のように記されている。「外務大臣トナル保護条約ノ成立シタル三十八年十一月八日ハ本外務大臣ノ時ナリ次テ総理大臣トシテ統監ノ信任厚カリシカ宋秉畯一派ノ激烈ナル攻撃ヲ以テ暗ニ統監府ノ使喚ニ出ツルモノト邪推シ断然辭職シテ顧ミス（『統監府文書』卷八、三「韓官人ノ経歴一般」、八四「朴斉純」）。
- ②㉑ 葛生能久、前掲『日韓合邦秘史（下）』六五六頁。
- ②㉒ 関泳微（二八五二～一九三五）は驪興閔氏一族として中枢院議長・表勲院総裁など大韓帝国の要職を歴任し、韓国併合時には子爵を授与された。また、朝鮮を代表する大地主であった彼は、朝鮮最大の財産家として知られ、一九三〇年代には四〇〇〇万円を超える財産を所有していた（前掲『親日派九人（二）』二二六頁）。
- ②㉓ 暗殺実行のための資金は、多数の同志たちの寄附によって賄われたが、関衡植は出資者たちの中で最も多い金額一四〇〇円を提供している。『統監府文書』卷八、三「韓官人ノ経歴一般」、三〇「関衡植」。「大韓季年史（下）」卷八、光武一一年丁未三月条、二二九頁、二四二頁。
- ②㉔ 「寅永日往齊純門、乞一官未諧、遂有是事、或者議之、不甚義此舉也」（『梅泉野録』卷五、光武一十二年丁未条、四〇九頁）。
- ②㉕ 「外部大臣朴斉純ニ急電ヲ発シ『首ヲ斬ラル、モ協約ニ同ス可ラス』トノ警告ヲ与ヘタル」（前掲（八）「政府顛覆ト大臣暗殺ニ関スル件」一九〇七年四月一七日）。
- ②㉖ 金允植は、乙巳五賊暗殺が実際に起こる三ヶ月前に羅喆から書簡を受け取っている。「一日…又得経田（羅寅永）自京寄書」（『統陰晴史（下）』卷一二、光武一一年丁未二月一日条、一九四頁）。その内容については記されていない。同五月一日条（二〇〇頁）に、羅喆らが「売国大臣の殺害を謀り平理院に拘束された」ことが簡単に記されているだけである。
- ②㉗ 前掲『親日派九人（二）』一三一頁。『統陰晴史（下）』卷一二、光武一一年丁未六月二六日条、二〇五頁。
- ②㉘ 『大韓季年史（下）』卷八、隆熙元年丁未八月一六日条、二九三頁。（五三）「亡命韓国人帰国ノ件…趙義淵・趙義聞ノ帰国報告」保秘第一〇三三二号、一九〇七年八月一五日（『韓国近代史資料集成』卷三、「要視察韓国人挙動（三）」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂…韓国人ノ部（八）」）。

- 249 『統陰晴史』卷二二、隆熙元年丁未八月二十九日条、二二〇頁。
 250 (三一)「皇太子日本滞在中日本人ノ皇室礼遇ニ関スル致謝私信」
 一九〇七年二月十九日(『駐韓日本公使館記録』卷二六、一一「雜纂」)。
 発送者・金允植・兪吉濬・趙義淵・張博、受信者・伊藤太師。
 251 「韓国中枢院議長金允植、右者韓国有数ノ政治家ニシテ德望アリ屢政府
 ノ要路ニ立チ常ニ日韓ノ交誼ヲ重シ現ニ中枢院議長ノ要職ヲ帯ヒ今回
 韓国皇太子殿下御勉学ノ状況視察ノ敕命ヲ奉シ来朝致候ニ付特別ノ御思
 召ヲ以テ別紙ノ通叙勲ノ御沙汰有之度此段謹テ奏請ス」(『韓国中枢院議長
 金允植叙勲ノ件』『叙勲裁可書』明治四一年八月三十一日、叙勲卷六、外国
 人四、国立公文書館所蔵)。国立公文書館「アジア歴史資料センター」を
 参照(リファレンス番号：A1011265100)。
 252 陸軍省受領巻第一二五九号「韓国皇太子殿下御用掛、韓国中枢院議長等
 在京砲兵工廠參觀ノ件」明治四一年八月六日(防衛省防衛研究所所蔵『陸
 軍省大日記』、国立公文書館「アジア歴史資料センター」リファレンス番
 号：C04014390600)。
 253 『大韓毎日申報』一九〇八年二月二十四日付、〈雑報〉「涼血三魔」怪
 行」。
 254 『大韓毎日申報』一九一〇年二月一日付、〈雑報〉「逐日歡迎」。
 255 前掲『親日派九九九人(一)』一三一～三頁。
 256 韓国併合後、彼は一九一〇年一月に朝鮮貴族日本觀光団に参加して日
 本を訪問した。一九一一年一月には恩賜金一六万八〇〇〇円を受けとり、
 同年二月には日本陸軍少将の待遇を受けた。一九一二年八月に韓国併合記
 念章を授与され、同年九月父親である李熹公(完興君李載冕)の死亡によ
 り公位を継承して李竣公と改名し、一九一七年に死亡した。以上、前掲
 『親日人名辞典(親日問題研究所人名篇三)』の「李竣鎔の項目」(一五三
 ～四頁)参照。なお、彼に関する資料として、『李熹公實記・李竣公實記』
 (小田省吾等、李王職、一九四三年)などがある。
 257 前掲『親日派九九九人(一)』一五六頁。牧山耕蔵、前掲『朝鮮紳士名鑑』
 四八頁。
 258 前掲『親日派九九九人(一)』一四八～九頁。牧山耕蔵、前掲『朝鮮紳士
 名鑑』五三頁。

- 259 『統陰晴史(下)』卷二二、光武二年七月八日条、二〇八頁。
 260 「今日羅文卿(寅永)以流十年宣告後、保放還家、参書往見、病勢極重、
 莫可動身、為之悶慮」(『統陰晴史(下)』卷二二、光武二年丁未七月一三
 日条、二二〇頁)。
 261 「二十日：昨日大赦詔勅下、自国初以来、名在罪籍者、除拳兵犯闕及強
 盜外皆爰周、現在中外獄囚已決者及流配人并放、養泉・葵園・経田(徐周
 輔・鄭丙朝・羅寅永)一隊人皆得蒙宥、甚幸甚幸」(『統陰晴史(下)』卷
 一二、隆熙元年丁未二月二〇日条、二三二頁)。
 262 『湖南学会月報』第五号(一九〇八年一月)の「會員氏名」に「羅寅
 永・樂安」(五八頁)と記されている。
 263 李沂「一斧劈破」『湖南学会月報』第一号、一九〇八年六月、一二～八
 頁。続いて、第二号(同年七月)、第三号(同年八月)にわたって連載さ
 れた。李沂の遺稿集として、大韓民国文教部国史編纂委員会編纂兼発行
 『海鶴遺書』(一九五五年)が刊行されている。
 264 「唐津・吳基鎬・尹柱瓚、求禮・李沂、南平・梁漢黙」(『湖南学会月報』
 第一号(一九〇八年六月)、第三号(一九〇八年八月)、第六号(一九〇八
 年九月)の「會員氏名」を参照。
 265 (二二〇)「京城政界ノ現情」憲機第六二〇号、一九〇九年三月二二日
 (『統監府文書』卷六、「憲兵隊機密報告(一)」)。
 266 『韓民族独立運動史資料集』卷一、I「三・一独立宣言関連者訊問調
 書(京城地方法院)」、吳世昌訊問調書、一九一九年四月九日。
 267 『韓民族独立運動史資料集』卷一、I「三・一独立宣言関連者訊問調
 書(京城地方法院)」「樞東鎮訊問書」一九一九年四月八日。
 268 (八四)「天道教主孫秉熙一進会ノ侍天教ニ対抗シ天道教ヲ大韓協会ノ
 主教ニ推進ノ件」憲機第四一三号、一九〇九年二月二二日(『統監府文書』
 卷六、一「憲兵隊機密報告」)。
 269 樞東鎮・南宮濬・呂炳鉉・柳瑾・李宇榮・吳世昌・尹孝定・張志淵・鄭
 雲復、洪弼周の一〇名が発起人となった。「本会歴史及決議案」(『大韓協
 会会報』第一号、一九〇八年四月、三八頁)。なお、一進会の内田良平は、
 「大韓協会は、本と吳世昌が主唱して尹孝定を主力とし尹致昊を戴きて組
 織せし自強会の後身なれば、排日団の主腦たるが如くなる」(前掲『日韓

合邦秘史(下)』二五九頁)と述べている。

②70 「本会歴史及決議案」『大韓協会会報』第一号、一九〇八年四月、三九頁。

②71 (一六六)「天道教ト大韓協会」憲機第五五〇号、一九〇九年三月一三日(『統監府文書』卷六、一「憲兵隊機密報告」)。

②72 「雜俎」『大韓協会会報』第二号、一九〇九年三月、五二頁。

②73 「本会歴史」『大韓協会会報』第八号、一九〇八年十一月、五八頁。

②74 「統監府文書」卷八、「韓官人ノ経歴一般」、一一七「洪弼周」。「乙巳(一九〇五年)引用者」秋日本東京ニ遊ヒ民間有志者ニ交際シ又清国梁啓超等ニ交ハル。洪弼周訳「氷集節略」『大韓協会会報』第二号、一九〇八年五月、二五頁。「余於乙巳秋間ニ相遷於日本横濱之旅舎ハ茶酒既説ニ傾倒頗尽イリ」。なお、これは、梁啓超の『飲冰室文集』を解説付きで抄訳したものである。その他、梁啓超の「論幼学」を抄訳して掲載している。洪弼周述「論幼学」・氷集節界(統)』『大韓協会会報』第一〇号、一九〇九年一月、一五頁。

②75 崔起榮「韓末天道教ト梁漢默」(『歴史学報』第一四七輯、歴史学会、一九九五年九月、一〇三頁、一一一頁)。

②76 「會員名簿」『大韓協会会報』第四号、一九〇八年七月、六七頁。

②77 「任員録」『湖南学報』第一号、一九〇八年六月二五日、五七頁。

②78 「第四回会録」『湖南学報』第二号、一九〇八年七月二五日、四九〜五〇頁。

②79 この三派提携運動は、内田良平の教示を受けた李容九が、西北学会の崔錫夏を懐柔して実現させたものであった(前掲『日韓合邦秘史(下)』一〇五・二六二頁)。

②80 (四三)「李総理暗殺関係者拘引ノ件」親発第二二八号、一九〇九年二月二九日(『統監府文書』卷九、「警視総監機密報告(六)」)。

②81 (四)「若林警視総監報告:総理大臣及一進会長其他殺害陰謀事件ニ関スル件」(『統監府文書』卷一〇、二五「北韓及黄海道視察復命」)。

②82 一九一九年の三・一独立運動において、天道教の孫秉熙・樞東鎮・呉世昌・梁漢默の四名が「独立宣言書」に署名した。その中で、梁漢默は投獄された西大門刑務所で獄死した。独立宣言書に署名した民族代表者三三人

の中で、獄中死した唯一の人物であった。彼は一九六二年に大韓民国の建国顕彰大統領章を受けた。

②83 (二五七)「韓人來朝ノ件」羅寅永・吳基鎬・李金鎧・鄭薰謨ノ動靜」乙秘第二二五七号、一九〇八年一月一四日(『韓国近代史資料集成』卷三、

「要視察韓国人挙動(三)」)、「要視察韓国人ノ挙動關係雜纂」韓国人ノ部(八)」。なお、日本側の記録文書には、漢字の誤記が数多く見られる。人名に関して言うと、李健を「李鎧」、鄭薰模を「鄭薰謨」と記している箇所が多い。引用に際して、本稿ではそれらをすべて修正した。

②84 (二六四)「韓人ノ行動」羅寅永ノ動靜」乙秘第一三三二号、一九〇八年一月二〇日(『韓国近代史資料集成』卷三、「要視察韓国人挙動(三)」)、「要視察韓国人ノ挙動關係雜纂」韓国人ノ部(八)」。

②85 (二六〇)「韓人ノ行動」羅寅永ノ東京行蹟」乙秘第一二八四号、一九〇八年一月一七日(『韓国近代史資料集成』卷三、「要視察韓国人挙動(三)」)、「要視察韓国人ノ挙動關係雜纂」韓国人ノ部(八)」。

②86 (二五五)「往齋洞」訪羅経田(寅永)于翠雲亭下、草屋数間、四圍皆他人花園、桃花已向衰矣」(『統陰晴史(下)』卷一三、隆熙二年戊申四月二五日条、二五一頁)。

②87 「十二日」文卿(寅永)之子正文、為善隣商業学校三年生、貧無以赴学、自今日來吾家宿食赴学」(『統陰晴史(下)』卷一四、壬子西紀一九一二年一月二二日条、三五九頁)。

②88 (二七六)「趙義淵・陸鍾允ノ姫路向発報告」秘第四〇九号、一八九八年二月二二日(『韓国近代史資料集成』卷一、「要視察韓国人挙動(二)」)、「要視察韓国人ノ挙動關係雜纂」韓国人ノ部(二二)」。(二八三)「愛媛滞在中ノ趙義淵・陸鍾元ノ動靜」兵発秘第五六五号、一八九八年二月一四日(『韓国近代史資料集成』卷一、「要視察韓国人挙動(二)」)、「要視察韓国人ノ挙動關係雜纂」韓国人ノ部(二二)」など関連記事が多数ある。

②89 前掲(二六〇)「韓人ノ行動」羅寅永ノ東京行蹟」乙秘第一二八四号、一九〇八年一月一七日。

②90 (二七二)「韓人ノ行動」羅寅永ノ動靜」乙秘第一三三四号、一九〇八年一月二七日(『韓国近代史資料集成』卷三、「要視察韓国人挙動(三)」)、「要視察韓国人ノ挙動關係雜纂」韓国人ノ部(八)」。

- ②91 (二七九)「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一四三九号、一九〇八年二月三日〔韓国近代史資料集成〕卷三、「要視察韓国人挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動關係雜纂：韓国人ノ部(八)」。
- ②92 (一八三)「韓人ノ行動：羅寅永・鄭薰謨・李永錫ノ動靜」乙秘第一四八一号、一九〇八年二月八日〔韓国近代史資料集成〕卷三、「要視察韓国人挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動關係雜纂：韓国人ノ部(八)」。
- ②93 「東洋拓殖株式会社社法説明書」『湖南学会月報』第八号、一九〇八年二月、四四～五三頁。「東洋拓殖株式会社社法説明書(続)」『湖南学会月報』第九号、一九〇九年一月、四三～五〇頁。
- ②94 「本会歴史」「会中記事」『大韓協学会報』第六号、一九〇八年九月、五九頁。
- ②95 「官報抄録」「東洋拓殖株式会社法」『大韓協学会報』第六号、一九〇八年九月、四五～五一頁。「二四日東洋拓殖会社事に 대하여 內閣에 交渉한 顛末을 左에 記載함」(同、六二～五頁)。
- ②96 「官報抄録」「東洋拓殖会社定款」『大韓協学会報』第七号、一九〇八年一〇月、四三～四八頁、雜俎「東洋拓殖会社法에 関한 日本大藏省説明書」五一～五四頁。
- ②97 前掲(一八三)「韓人ノ行動：羅寅永・鄭薰謨・李永錫ノ動靜」乙秘第一四八一号、一九〇八年二月八日。
- ②98 「韓人李永錫、閔ヨリ頭山ニ托セル苦学生」とある。(二)「韓国視察員ノ行動ニ就テ：閔元植ノ動靜」乙秘第五三九号、一九〇七年五月三十一日〔韓国近代史資料集成〕卷三、「要視察韓国人挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動關係雜纂：韓国人ノ部(八)」。
- ②99 前掲(一六四)「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一三三二二号、一九〇八年一月二〇日。
- ③00 (一七七)「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一四二六号、一九〇八年二月二日〔韓国近代史資料集成〕卷三、「要視察韓国人挙動(三)」、「要視察外国人ノ挙動關係雜纂：韓国人ノ部(八)」。
- ③01 前掲(一八三)「韓人ノ行動：羅寅永・鄭薰謨・李永錫ノ動靜」乙秘第一四八一号、一九〇八年二月八日。
- ③02 前掲(一六四)「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一三三二二号、一九〇八年

旧韓末における羅喆の訪日活動

- 年一月二〇日。
- ③03 前掲(二七七)「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一四二六号、一九〇八年二月二日。
- ③04 故古市男爵記念事業會編『古市公威』(北林勝藏發行、一九三七年、三七頁)。
- ③05 同右、一五六～九頁。
- ③06 古市の伝記によると、「鉄道の借款、其の一部代行等の大問題に就きても、絶えず攻究画策」したと記されている点が注目される(同右、一六〇頁)。
- ③07 同右、一六〇～一頁。興亜興業株式会社を通じて、江西南潯鉄道借款契約、漢口水電公司借款などが行われた。
- ③08 同右、三七頁。
- ③09 同右、一五九頁。
- ③10 前掲(二七七)「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一四二六号、一九〇八年二月二日。
- ③11 前掲(一八三)「韓人ノ行動：羅寅永・鄭薰謨・李永錫ノ動靜」乙秘第一四八一号、一九〇八年二月八日。
- ③12 「今日羅文卿(寅永)以流十年宣告後、保放還家、參書往見、病勢極重、莫可動身、為之悶慮」(『続陰晴史(下)』卷二、光武十一年丁未七月十三日条、二一〇頁)。
- ③13 「文卿(羅寅永)以疲牽、多日辛苦、往問之」(『続陰晴史(下)』卷二、隆熙二年戊申一月四日条、二三八頁)。
- ③14 現在、東京大学薬学部東側に新海竹太郎作の銅像がある。東京大学「UTLife」『東大ガイド』(<https://www.ut-life.net/guide/exploration/statuekouji>)を参照。
- ③15 鶴崎熊吉『青山胤通』(青山内科同窓会、一九三〇年、二三五頁)。
- ③16 同右、二三六頁。
- ③17 前掲『頭山満翁正伝(未定稿)』三一頁。
- ③18 吉田俊男、前掲『天下の快傑：頭山満』の「頭山満と囲碁」の項目(一六七～八頁)。
- ③19 前掲『頭山満翁正伝(未定稿)』三〇二頁。

- ③②① その時、二人は黙々と三局立て続けに対戦をしたが、「棋局の成敗なんぞ殆んど眼中に置かない頭山の態度に青山が感嘆したと伝えられている（伊藤痴遊『快傑伝』第一編、忠誠堂、一九二六年、四五頁）。
- ③②① 葛生玄暁、前掲『金玉均』「付録」犬養毅談「朝鮮第一の人物」（三九頁）。
- ③②② 琴秉洞、前掲『金玉均と日本―その滞日の軌跡』三五五頁、五六〇頁。
- ③②③ 藤本尚則、前掲『巨人頭山満翁』六五八頁。
- ③②④ 前掲（一七七）「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一四二六号、一九〇八年二月二日。
- ③②⑤ 趙堧熙、前掲「大倣教重光聖地 東京蓋平館斗 北村翠雲亭에 대한 宗教地理学的考察」二八四頁。
- ③②⑥ 前掲（一七九）「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一四三九号、一九〇八年二月三日。
- ③②⑦ （一八六）「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一六一九号、一九〇八年二月二日（『韓国近代史資料集成』卷三、「要視察韓国人挙動（三）」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂：韓国人ノ部（八）」）。
- ③②⑧ 「鄭薰模ハ昨報ノ李永錫カ目下東洋拓殖会社ノ役員タラントテ運動中ナルヲ以テ其目的ヲ達スルヲ待チ同人ノ周旋ニテ自己モ亦其役員タランコトヲ望ミ其成否ヲ待ツ為メ暫時滯京ス」（前掲（一七九）「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一四三九号、一九〇八年二月三日）。
- ③②⑨ 日本側の記録によると、これは表面的な理由であり、別の理由として「羅ヲ訪問セル李永錫カ羅ノ看護婦ニ対シ無理ノ挙動アリシ為メ看護婦ヨリ医師ニ迫リ口実ヲ設ケ羅ヲ退院セシメタルモノ、如シ」と報告されている。（一九〇）「韓人ノ行動ニ就テ：羅寅永ノ動靜」乙秘第八三三号、一九〇九年一月一三日（『韓国近代史資料集成』卷三、「要視察韓国人挙動（三）」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂：韓国人ノ部（八）」）。
- ③③① （一九一）「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一一八号、一九〇九年一月一六日（『韓国近代史資料集成』卷三、「要視察韓国人挙動（三）」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂：韓国人ノ部（八）」）。
- ③③② （一九四）「韓人婦国ノ件：羅寅永ノ動靜」乙秘第二八四号、一九〇九年一月二八日（『韓国近代史資料集成』卷三、「要視察韓国人挙動（三）」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂：韓国人ノ部（八）」）。
- ③③③ 視察外国人ノ挙動関係雑纂：韓国人ノ部（八）。
- ③③④ （二六三）「韓人ノ行動：羅寅永・吳基鎬・李健ノ動靜」乙秘第一三一〇号、一九〇八年二月一九日（『韓国近代史資料集成』卷三、「要視察韓国人挙動（三）」、「要視察外国人ノ挙動関係雑纂：韓国人ノ部（八）」）。
- ③③⑤ 前掲（二七二）「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一三八四号、一九〇八年二月二七日。
- ③③⑥ 前掲（一九〇）「韓人ノ行動ニ就テ：羅寅永ノ動靜」乙秘第八三三号、一九〇九年一月一三日。
- ③③⑦ 前掲（一九二）「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一一八号、一九〇九年一月一六日。
- ③③⑧ 前掲（二八六）「韓人ノ行動：羅寅永ノ動靜」乙秘第一六一九号、一九〇八年二月二日。
- ③③⑨ 以下は、井出俊雄「松村先生を憶ふ」（前掲『松村雄之進』三〇～四六頁）を参照。
- ③③⑩ 武田範之は久留米藩出身で家業の医師を好まず、若年にして禪門に入つた。放浪生活の後、一九〇〇年に越後の曹洞宗顯聖寺住職となった。彼は朝鮮問題に関心をもち、東学党の乱の際には内田良平らと天佑侯に参与した他、閔妃暗殺の際には実行隊にも参加して広島監獄に収監されている。一九〇一年に黒龍会が組織されるとその同人となり、内田良平が伊藤統監の顧問として渡韓すると、その幕下で日韓合邦運動に関わった。孫秉熙によつて李容九が天道教から追放され侍天教を創設すると、武田は師資格で侍天教の顧問に迎えられた。武田は漢詩文に通暁し、李容九の顧問格・秘書格として侍天教教理の整備に協力した。その他、一進会関係の漢文文書も彼が作成し、日韓合邦建議文の漢訳も武田の手によるものであった。以上、川上善兵衛著、市井三郎・滝沢誠編『武田範之伝―興亜前提史』（日本経済評論社、一九八七年）、西尾陽太郎『李容九小伝』（葦書房、一九七七年）、『東亜先覚志士記伝（下）』（「武田範之」の項目（二九八～九頁）を参照。
- ③③⑪ 前掲『松村雄之進』四四頁。
- ③③⑫ 同右、三四頁。
- ③③⑬ 「韓同志士は亡命後玄洋社員の鉄桶に身を投じ、祖国のため、大に図る

所あり、玄洋社員亦一諾を重じ、終始亡命客の爲めに、奔走尽力するものあり」(前掲『玄洋社社史』二五二頁)と記されているように、玄洋社側では開化派の亡命政客たちを積極的に支援した。

③④ 大倅教と檀君教の分派過程については、拙稿「植民地期朝鮮における檀

君教の沿革と活動」(『朝鮮史研究会論文集』第四一集、二〇〇三年一月)を参照。

(本学文学部教授)